Januaro　:LA SEMANTO:　1922

5861
2144
no.7

大正十年十二月一日（第三郵便認可
大正十年十二月三十日印刷納本
大正十一年一月一日發行（毎月一回一日發行）

種蒔く人

行動と批判

第二年 第二巻 第四號

新年號

種蒔き社

BERKELEY LIBRARY UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

種蒔く人新年號目次

リープクネヒトと戰爭（題言）……………………
藝術に於ける國際主義と世界主義（社論）……
現實の方へ！（詩）……………村松正俊
旅行鞄（小說）……………松本弘二
鐵鎖を斷つ（小說）……………川崎春二
『勞働祭』前夜の曲（對話）………鳳　逸平
亂舞（小說）……………井東　憲
俺の詩三箇（詩）……………石渡山達
地上にて呼びかくる（詩）……角園春之助
プロレタリアトの歌へる（詩）…松本淳三
雄阿寒おろし（小說）……………神近市子
談りゆく一月の空（漫畫）………柳瀨正夢
批評
美術評家に與ふるから笑ひ一束……………正　夢
讀んだもの二つ……………………小　牧

「空に指して談ろ」……………逸　平
宗敎的センチメンタリズム………孝　丸
戲曲二篇……………………孝　丸
岸田氏展覽會評……………弘　二
映畫「戰爭と平和」……………正　夢
世界欄
ロシアの饑饉と列國の干涉＝勞農ロシアに於けろイザドラ●ダンカン＝イザドラ●ダンカンの手紙＝サッコ●ヴアンツエッチ事件＝マキシムーゴルキーとエスペランド
地方欄
社會思想の田園的使濶＝故村より＝仙臺のレッド●ムーブメント＝線香の淡い烟＝湖東支部講演會
婦人欄
音響機の音……………………
聾人欄

嘗て人間は神を造つた。今や人間は神を殺した。造られたもの〻運命は知るべきである。

現代に神はゐない。しかも神の變形はいたるところに充滿する。神は殺されるべきである。殺すものは僕たちである。是認するものは敵である。二つの陣營が相對する。この狀態の續く限り人間は人間の敵である。その間に妥協の道はない。然りか否かである。眞理か否かである。

眞理は絕對的である。故に僕たちは他人のいはない眞理をいふ。人間は人間に對して狼である。國土と人種とはその問ふところでない。眞理の光の下に、結合と分離とが生ずる。

見よ。僕たちは現代の眞理のために戰ふ。僕たちは生活の主である。生活を否定するものは遂に現代の人間ではない。僕たらは生活のために〇〇の眞理を擁護する。種蒔く人はこゝに於て起つ――世界の同志と共に！

種蒔き社

種蒔く人

【第二年第二卷第四號】

L'homme a créé les dieux. Les dieux sont assassinés par l'homme. C'est une fatalité !

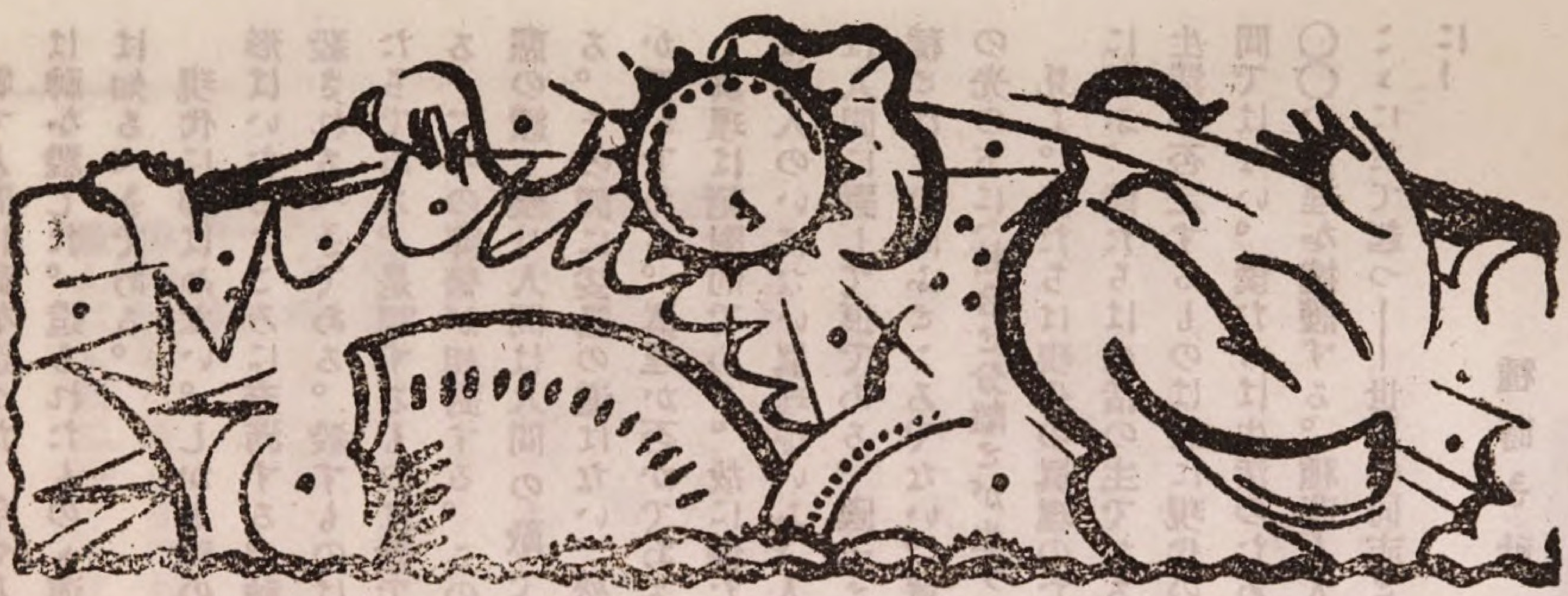
A présent, les dieux n'existent plus. Mais partout ont surgi d'autres dieux. A mort ces dieux. C'est à nous de leur donner le coup de grâce. Nous considérons comme ennemis ceux qui croient en eux. Les deux camps sont en présence face à face. Tant que cet état de choses durera, l'homme sera l'ennemi de l'homme. Il n'est possible d'aucunes concessions. Sic aut non, veritas aut mendacium.

La vérité est absolue, c'est pourquoi nous disons la vérité que les autres ne disent pas. Homo homini lupus. Il n'est question ni de nations ni de races. Devant la Vérité il y a union ou division.

Nous luttons pour la Verité. Nous sommes les maîtres de la vie. Ceux qui sont contre la vie ne sont pas des vivants. Nous défendons la vérité révolutionnaire.

Levez-vous, les semeurs ! En route avec les camarades de l'univers !

東167807
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



リープクネヒトと戰爭

× × × × ×

カー・リープクネヒトは彼の著書「軍國主義及び非軍國主義」の爲に捕はれて、一九〇七年十八ヶ月間の要塞禁錮の刑に處せられた。世界戰爭は殆どあらゆる社會主義者をして其立場を失はしめた。彼等が厚顏にもその戰爭反對の決議を他人事の如くに投げ棄て、軍國主義と資本主義の走狗と化し去つた時に、世界にはまるで良心と道する者がなくなつたかの如く思はれた然し良心は何處の彼等の鋭き目を表すものである。彼も亦數人の同志と共にドイツに於ける良心の所在となつた。人間が惡事をなさんとする時最も恐ろゝものは正しき聲である。リープクネヒトはローザ・ルクセンブルグと共に再び□□の人となつた。革命は再び彼を牢獄より喜び迎へたが、ブルジアートの野合になれた多數社會黨は彼の命を顧はずには、彼等の寢覺はわろかつた。

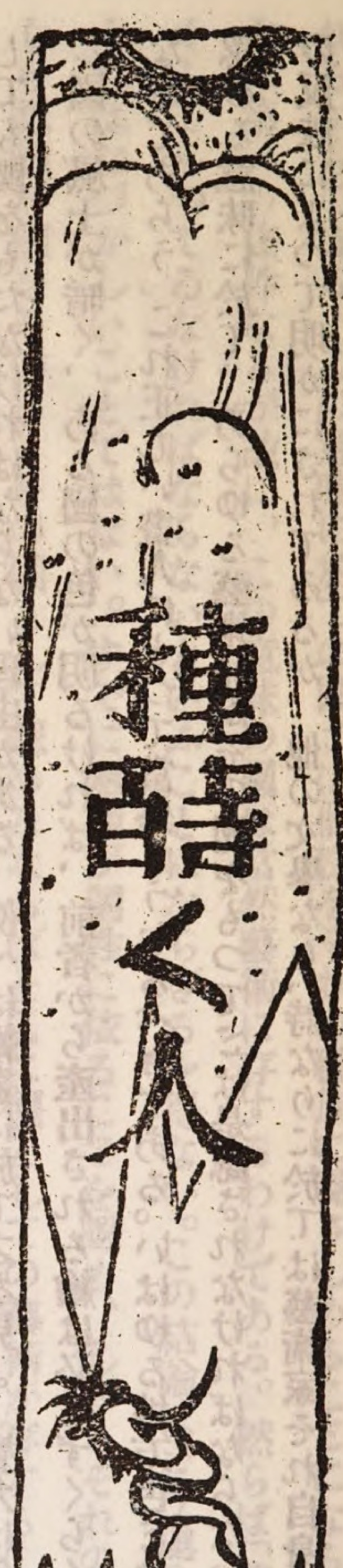
× × × × ×

現今の戰爭は國民の安寧を防禦する爲の戰爭でもなければ、又うちのめされた人民の自由の爲の戰爭でもなければ、民衆の利益の爲の戰爭でもない。プロレタリアートの見地からすれば資本主義及び絕對至上主義の利益の爲に政治上の壓迫經濟上の搾取及び勞働階級の軍事的殺戮の最大限度の集中と强化を象徵するに過ぎない。

此答としては、あらゆる國々の勞働階級は僅かに一つの答を與ふる事が出來るだけである。資本主義の政府及びあらゆる國々の支配階級に對して壓制及び搾取の廢棄の爲に、社會主義的精神に於ける、平和によつて戰爭を終結せしむる爲めより激しき鬪爭國際的階級鬪爭あるのみである。

『戰爭をやめろ!』と云ふ叫びは私が全然戰爭の歷史的本領の故に戰爭の一般社會的原因及びその起原の特殊的形式の故に戰爭の手段及び目的の故に、全然現今の戰爭を罰し反對する事を言ひ表はす事を意味し、又その叫は戰爭を終結せしむる爲に國際的階級鬪爭にたづさはると云ふ事がプロレタリアートの利益を代表するあらゆる人々の義務であると云ふ事と云ひ表はさんことを意味するのである。（「軍國主義と非軍國主義」から）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



藝術に於ける國際主義と世界主義

藝術は國をもたないことはしば〳〵言はれることであるが、それが果してどれだけの内容をもつかは、それの解釋によつて異つて來なければならない。國とは元來政治的意味をもつものであるから、政治と關係のない文學や藝術が國をもたないといふことはむしろ當然であつて、敢て意とするに足りないであらう。それは標準の基礎が全然ちがふからである。しかしながら之を大きく觀察すれば、現在の世界に於ては、いかなる個人といへどもある一國に屬せざるを得ないものであるが故に、ある個人の製作するところの藝術品は必然的に國家を無意識のうちにでも有してゐる。ことに國の成立に於て、その構成するところの人種が、ある特定の一民族である限り、民族主義の精神及び感情がその藝術品に加はるのは、けだしやむを得ないことであらう。この場合に於て藝術は國をもたないどころでなく、全く國家意識のみで出來てゐるともいへる。藝術そのものが個人の創造であつて、國をつくる意識とは關係のない筈であるのに、かくの如く密接に結合するのは、疑ひもなく、そこに二つの意識の混合のあるのが知れる。それは藝術的價値に代へるのに政治的意味をもつてすることである。それは藝術にとつての大なる恥辱でなければならない。その故にいはゆる愛國的文學とは、多くの場合、何らの藝術的價値なき傾向藝術に歸着せざるを得なくなつてゐるのである。愛國主義そのもの、批判は藝術上の問題として扱はれるには少

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し縁遠いのである。しかしながら藝術に於て愛國主義のある限り藝術上から之を批判してもいゝ筈である。愛國主義とは本來民族意識から出たことであつて、それは原始民族の自己保存のための本能の一表示に外ならない。この愛國主義は古代に於ては、自己を守るために必要であつたにはちがひないのであるが、すでにあらゆる國に於てその國家意識が崩落しようとしてゐる現在に於ては、すでにそれは無用の長物になろうとしてゐる。藝術そのものはかゝる愛國主義などを扱つてもいゝ。それは藝術はその對象に何を選んでもいゝからである。しかしながら單に藝術内部に於てその材料としてのみ之をとつていゝので、そのために藝術をまげてはならない。さうすること、藝術は藝術でなくして、傾向物になつてしまふのである。さうして藝術は一面時代意識と關係すると共に、また生活全體に關係してゐるが故にもしも純粹なる政治的愛國主義が此の世を去らうとしてゐるならば、その意識も正しく藝術に反映されなければならない。然らば現代に於て、たとひ單に愛國主義をその材料にとるにしても、それが殆ど何等の重大さをもつて來ないことは知られるであらう。然らば藝術に於て愛國主義などは意味のないことゝならなければならない。しかしながらさういつたからといつて、それで直ちにかの「藝術は國をもたないといふことが證明されたと思つてはならない。藝術品が個人の製作品であり、さうして個人がある國に屬してゐるならば、その個人は必然的にある一人種に即してゐなければならない。そのときの彼の個性には、人種も、國土も、氣候も、遺傳も、教養もすべてのものがその背景として有してゐるべきである。然らば一藝術品はその個性の表現であるが故に、必然的にそれの個性による思想、感情があふれてゐなければならない。そこに藝術がどうしても國をもたなければならない理由がある。例へば繪畫に於て之を見よ。畫人は色の感覺にするどい。故にある國の風土が暗く、ある國の色が明るければ、前者から産出される繪は必らずくらく、後者のはどうしても明くなるであらう。これ正しい畫人にとつて當然さうなるべきである。いはゆる地方色とはこれである。この地方色を認める意味に於て、あらゆる藝術品がその國をもつてとは是認されなければならない。それは繪畫に於ては外界の反映によつて明かにされてゐるが、他の文學なり、詩なりに於ては藝術家それ自身の個性として、個性が表現さ

れるからである。この意味に於ての國とは個性をそれの種族に屬さしめることになる。さうして種族とは價値建立の第一の條件なるが故に、この意味の國は當然藝術に存するわけである。然らば「藝術は國をもたない」のでなくしてもつてゐなければならないといふことにならざるを得ない。この結論はどう處分したらいゝのであらうか。それはむづかしいことではない。すでに藝術が個性に依ることを認め、しかもそれの種族を認めるにしても、もしも認識が個をそのまゝその個として認めるならばそこに個としての藝術が存することになる。これは單に存在かも知れない。しかしながらこの存在に於てあらゆる個はそれだけとして認識されるのであつて、種族は種族として、なほそこに連續としての全體系が開かれることになる。連續は全を構成する一系統である。これを認めることによつて、個は直ちに全に關係し、その個と全との間には何らの介在するものがないわけになる。即ち國は存在せずして、藝術といふ一世界の中に全ての個がそれ自身で存在してゐるのである。然らば藝術はやはり國をもたないと、いつていゝであらう。しかしながら藝術にも種類がある。これは藝術は一面には時代の産物として常に時代意識に接觸してゐるものである、さうして時代意識といふのは社會の支配階級の意識である。社會に階級の存する限り、即ち他の語を以てすれば、個人と社會との間に段階があるとすれば、その社會を支配するものは精神的にも物質的にも支配階級である。この支配階級の感情、意志思想などが即ち時代意識として、その時代の代表意識となるものである、その故に政治でも、經濟でも、科學でも、哲學でも、みな藝術とひとしく各時代々々によつてその色彩がちがつて來なければならない。然らば現代は何であるか、疑ひもなくブルジョワジーの社會であつてブルジョワ意識が一般にひろまつてゐるのである。藝術がその意識の下でなされるのもまた當然のことであらう。このブルジョワ意識の藝術も、前述のごとく意識として國をもたない性質をもつてゐるものである。現代の國家がブルジョワジーの國家で、これが特に愛國主義をかたくするのは有り得べきであるが、それでも藝術そのものとしてそれから脱してゐるもの、存することは不思議でない。そこで國のない世界的藝術がなほブルジョワ意識の下になされるのである。政治的にいつてその一番い、例は、昔からあつた平和會議や、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國際聯盟や、太平洋會議などであるが、藝術上のブルジョワ世界主義といふのは、いはゆる國際主義なのである。これはブルジョワ藝術の極、それの共通點だけをとつて、藝術をおもちやにし、一種の藝術至上主義の塔の中にとぢこもるものである。故にブルジョワの國際主義といふものは常にプロレタリアを排斥し、それの搾取を享樂する藝術をくみ立てるものである。之に對して、やはり藝術上の世界主義に立脚するところの一群が生ずる。それは現代の社會がブルジョワ社會がブルジョワ社會なるがために、それに反抗するプロレタリア意識を以つて時代意識となすところの來るべき世界を望む世界主義である。プロレタリヤは現在に於てはその支配をもたない。しかも藝術に於てさへもち得ない。その故にそれをもとうと意欲する。この意欲はいかなる國を通じても見られるもので、それは國によつて少しも妨げられることはない。それは愛國主義を要求するところの現在資本國家を倒壞して、個即全の境を提出せんと欲するものである。さうしてそれを以つて藝術上に直ちに見んとするのが世界主義である。それは外面的な國際主義でなく內部に共通するところの世界主義である。即ち個が即ち全であるといふことは、哲學の問題であるが、それが實現されるのは、ブルジョワ國家制度の下に於てにあらずして、プロレタリアの世界主義に於てゞある。一言にしていへば、世界主義文學とは藝術そのもの・性質なる個性を直ちに認め、しかも時代意識に即してプロレタリア藝術を花咲かせやうとするものである。それは世界主義であつて決して國際主義でない。この意味に於て、現代日本の、しかも藝術家が自己を忘れて、いたづらに外國を盲拜することが舊時代のブルジョワ意識のなすところであるのが明であると共に、いたづらに日本の小說は外國のものに劣らないと威張つて見るのもそれの反面のあらはれである。正當なる世界主義文學は絕對に自己を表現する。故に外國のものも、自國のものも同一の標準により之を律する。自己が第一である。そこに個即全する藝術の本道がある。さうしてブルジョア意識によらずして共になやみ、共に苦み、共に戰ふところのプロレタリアの反抗意識を有してゐるものであつて、橫に全と接觸するのである。即ち世界主義文學は國をもたないと共に。又ブルジョワジーの國際主義にも墮せず、さうしてなほ藝術の眞をつかめるところのものである。おゝ種蒔き社よ?

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

現實の方へ！

Im Anfang war die That.

村松正俊

飛躍せよ！　わが心よ。
汝はいつまでこの影の生に執着するのであるか。
今やその日が近づいた。
眞赤に空が燒けて血のごとき光榮ある日が近づいた。
勝利の盃に滿ちたる酒をくむ日が近づいた。
心よ。この影の生をすてよ。
忍べる心の起つ時が來た。
その日に於てあらゆる動搖が心をつゝむ。
わが心よ。飛躍せよ！
何故にかく躊躇して決しないのであるか。
汝がくらい日はもう過ぎ去つた。
一切の外なるものを觀みる必要はない。
たゞ自我にのみ忠實であるべきである。

汝を蓋ふすべての束縛は寸斷された。
暗黑の支配者なる過去は死んだ。
汝は何物にも負はざる自由のうちにある。
事實の盡きることなき認識のうちにある。
たゞ歌へ！　たゞをどれ！　たゞ狂へ！
見よ！
今や萬民は街頭にひしめいて狂つて歡呼の聲をあげてゐる。
群集は汝の飛躍を期待してゐる、白日の下の大群よ。
すでに呪はれた概念のなやみをすてよ。
さうして潮のごとく大群と共に進め！
そこに新しい實體が生を築いてゐる。
血にぬられてはじめて祝はれる門が開かれる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

心よ。汝はそれの主導者である。
何故にかくも躊躇するのであるか、
たれ覺めよ、わが心よ！
その灰色の衣を脱いで喜びに參せよ。
そこに來るべき理現が恐るべき炬火をもつてゐる。
汝の手は一瞬にしてその點火をなすべきだ。
そのとき世界は新しい光を見るであらう。
それは萬物の解放の火だ。
大群を白日の廣野に放つ火だ。
すべての期待が汝の上にある。
お、飛躍せよ、わが心よ！

事實である、
事實を除いて何が殘されてゐるのか！
人間の願望！欲求！歡喜！また幸福！
一列の行進が情意の中心に躍進する。
赤裸なる精神がその舊主に反逆した！
そこに血こ肉とが一致して未來の夢を實現する。
欲するこは牢獄につながれた者の全精神の叫びである
欲するとは幸福のねがひである、

幸福の前に何を怖れるのであるか。
身を投げて幸福の實體を抱け。
わき上る肉の力が幸福の深奧をつかむ。
幸福の外にいかなる生活が可能であるか。
見よ！世界は廻轉する
新らしいもの、前にふるい影が逡巡する
死せる權威者の暗のうちに何物がひらめくのか
幸福を否認する存在の呪ひである。
おゝ、幸福こは尊嚴なる事實である。
今に及んで何故に事實を認めないのか
過去の跡は消えた。
人は醒むべきである
事實と而して實在こ。——
事實は決して欺かない。
幸福は事實を豫定する。
幸福のためにこそかつて人が叫んでゐた。
今やそれを認める時が來た。
それがかつて人間に與へられた最大の贈物である。
その前に立つて戰慄するものは何者であるか。
認識が愛である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

愛にあこがれる汝が何者にはゞかつて事實を認めない
のか

本能と欲求と！
事實の認識に偉大なる人間の幸福が開かれる。
秘められた幸福は光を仰いだ。
走れ！　お丶、わが心よ！
閉ぢられた悪夢は道德者に投げよ。
さうして自由なる戀愛の手の下に來れ。
そこに人間の事實を認めるであらう。
古代は死んだ。未來は來らない。
われらのもつところのものは現在である。
たゞ現在である。——お丶、醜悪なる存在よ！
革命の期待が未來を地上にひきおろす！
そこに活動する事實である。
お丶偉大なる實在よ？
汝の前に眼を閉ぢるものは卑怯である。
耳を蓋ふものは愚劣である。
わが心よ。汝はそれを欲してゐた。
さうして今もなほ欲してゐるではないか。
認識の美と戀愛の幸福と！

それが人間の最後のねがひである！
他の一切は迷妄のうちに投げよ！
最後のねがひが體現を主張する。
美の理想がその實在の日を見るべきである。
そこに永遠に生みゆく命がひらめく。
流動と創造と！
生活の志すところは一つである。
つくるところのものはたゞ一つ！　お丶偉大よ！
美の理想が戀愛に顯現された。
戀愛こそ實在の最も深奧なるものである。
かつて威を吐いた混沌の哲學はどこでふるへてゐるか
實在は今やわれらの手中に歸した。
われらの日こそ期待するべきである。
お丶、喜びもてをどれ！
歌もてうたへ！　さうして事實そのものに面接せよ！
過去の降伏の上に世界を展開せよ！
影でなくして事實である！
自我である！
事實を制御する自我である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

宇宙を支持する自我である。
認識の源流であるこころの自我である。
權威の保護者なる自我である。
未來を指導する自我である。
美の殿堂を建立する自我である。
幸福の追求者なる自我である。
さうしてつひに戀愛を實現する自我である。
人間はその血と肉とを以つて
その新しい哲學をきづいた。
自我こそ偉大なる魂の起立である。
あらゆる舊時代が瞬間に解體して
そこに自我の勝利が來た。
それが火である。たれ永久に消えざる生命の火よ！
自我の權威に流動の本質がある。
戀愛の志向は認識を夢想する。
さうして世界は未だ闇のうちに横はる。
この大きな長い闇黑の髑髏よ！
闇の力こそ恐るべきであつた。
目覺めた夜は嘆きである。
暗黑の花は所を知らない。

呪咀と重壓の最後のあへぎである。
その奥底から新らしい芽が出た。
さうして生命の一氣の出現！
開ける眼の前に闇の死骸が連ねられた。
黎明の太陽の歡喜のうたに、
情意の世界が自由の炎を吐いて、
新らしく生れた自我を祝ふ。
氣迷ふばかりのにほひ、味ひ、香また光！
魅する魂の全裸の抱合！
さうして自我がつくるところの未來のねがひに
認めざらんとする意志の敵なき努力
庭後に伏して哀を云ふ倫理！
さうして堂々とした自我の濶歩のすがた！
自由の行進に大道が通ずる。
そこに新らしい哲學がその命を見た。

しかしながらたれは何といふ卑怯なものだ
おれの眼、おれの耳、おれの理性は一切の事實に閉ぢ
られてゐた。
おれの世界は詐欺であつた。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おれに一つの理想があつた。おゝ死せる理想よ！
それがおれの苦腦の源だ。
醜悪な存在のうしろの美の影を知らなかつた。
さうしておれはあらざるものゝ影にいたづらにをのゝいてゐた
見よ！　おれの目覺めが來たのだ！
おれののぞみは常に完全をめざしてゐた。
おれは古典派の一騎士であつた。
おれは古典のうちに完成の美を見た。
おゝ、美よ！　汝の命はいづこなのだ。
おれの見たものは死せる美であつた。
肉と血の亂舞する陶醉の美よ！
人間の命そのまゝで炎える全裸體の美よ！
感情と意志とを戀愛に放下し去る美よ！
人間の欲求、人間の本能に身をまかせる肉欲の美よ！
調和の中和にふるへあがる筋肉の美よ！
ネアニスコスのなだらかな頰に觸れるやはらかな美よ！
おゝ、しかしそれらはみんな死んでゐた。
しかるそれらの生きてゐたときの盛時を思へ！

バクケ！　イヤクケ！
イヤクケ！　バクケ！
おれの閉ざられた心はそこに開かれた。
おれは古典から古典の肉のにほひをかいだ。
おれがちらと見たものは人間の幸福だ！
さうしておれは古代の夢を見てゐた。
いつかおれの上にその夢の顯示されるのを待つてゐた
さうしておれの心はやつと詐欺から出やうとしてゐた
おゝ新らしきものに對するあこがれよ！
おれを縛めてはなさない過去の詐欺よ！
しかもおれはやはりこの醜い日本にゐた。
さうしてふるい敎へに腐敗された心をもつてゐた、
おれの心は小供のときからくさりはじめてゐた、
さうしてその腐敗がいよ〳〵大きくなるに從つて、
あざむかれた心が歸ることを忘れてゐた
さうしておれは黑い命の死に近づいていつた
おれは事實を忘れて一つの理想を見てゐた
それは人を欺くといふあの空しい希望にもまして
もつと空しい理想であつた
おれの心は深淵へ落ち込んだ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おれはもがいた
おれは苦んだ
いくら泣いてもおれを救ふものはなかつた
おれはおれをひとりで救はなければならなかつた。
しかし何といふ高價なすくひであつたらう。
おれはだまされてゐた。
そこに氣がついたとき時にすでに去つてゐた、
くさつた心がしつかりとゝりついてゐた、
おれの古代の夢は盲目な心にさゝへられた、
さうしておれは永遠に漂はなければならなかつた、
それは何人の負ふべき罪であるのか。
見える限り、聞える限り、おれは否定の哲學を以つて
すべての事實を否定した！
おゝこの怖ろしき存在よ！
ギリシアの夢もおれの上には落ちなかつた、
さうしてそのあとにあの意志の哲學が這ひ込んだ、
白晝の光に幻惑するおれのひそやかな心よ！
性欲と戀愛とをいたましく蹂躙する哲學よ！
意志とは果してそんなものであるのか、
個人はたゞ全體の犧牲になるに過ぎないのか」

おゝ、暗黑な夜よおれの考へを蓋つてくれ、
さうしておれを美しい華やかな酒場へつれていつてくれ。
そこには歡樂の女がゐる
そこには淫蕩な音樂がある
そこには自由な愉快がある
そこには華麗な解放がある
美しい夜の花が毒の齒をもつてゐる
さうしておれは何を欲してゐたのだ？
理智は幸福の敵であつた。
否定よ！ 否定よ！
知ることはなやみである。たゞワイルドよ！
美の影はいづこに求めるのであるか、ボドレルよ！
たれの美は現在になかつた。
さうしてたれはかのあらざるものへの欲求に身をたゞらせた。
あらざるものとは何といふ凄い誘惑だらう。
それは狼の齒もてる甘いわなだ。
その下におれはすべてのあるところのものを否定した
さうしてそのあとからニイチエがかの超人をもつて現

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れた
しかしながらそれがどうしたといふのだ
生活は愛の認識にはじまる
愛を除いてどんな生活の實在が可能であるか
認識とは愛を認めることだ
愛は事實だ
事實を除いて生活はない
それだのにおれの生活は終つてゐた
死んだ魂がおれのうちに浮んでゐた
塵と埃とのつみかさなつた古い本の上に
おれはおれの命をやつと見てゐた
くだかれた思ひがおれの胸をさしてゐる
認めざらんと努力した甲斐もなしに
おれのうちに忍び入つた事實の跡だ！
さうしておれは黄色くはげた古本の上に熱い涙を流し
てゐた
見よ！　あの美しいなほやかな戀人の姿よ
死せる魂がよみがへらうとしたとき
おお！　時はもう過ぎてゐた！

いかなる悔恨がおれをそれから救つたらう
手段はつきた。とるべき道は一つだ
革命よ！　現實の方へ！
それが事實の認識だ
さうしておれは事實の前に確乎として立つのだ
さうして新らしく生活をひらいてゆくのだ
古い哲學ののろひを去れ！
おれはおれの事實の上に立つ
さうしてつくり上げられた古本のかびよ
一切をすて、小供の心になるべきだ
新らしい日が近づいた
おれは事實の存在を認めるべきである
それ以外におれの生活はないのだ！

おれがある！――それが第一の命題だ
おお偉大なる命題よ、
おれがあつて哲學があるのだ
哲學がおれの實在を規定するものでない
おれは生きた感情をもつ、欲求を、意志を
それが生活の事實だ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おれの志すところに軌範がある
おれの考へることが一切の律だ
それらは死せるものだ
おれを支配するものでない
おれはおれの自律者だ
おれは自己目的だ
この偉大なる宣言に如何なる哲學が抗し得るのであるか
おれはおれの日をおれのうちに認める
さうして事實の前に之を强調する！

一切が誤りであつた
一つの立場は無數の立場である
おれが今ゐるところは絶對の立場だ
無に歸するところの存在の前に
おれは明かに有を證明する
その有に立つて見たおれの過去は
すべての人の罪を負つてゐたものであつた
おれはそれを誇りとする
しかもおれの心の打擊をどうするのだ

おれは他人の幸福のためにおれの哲學を組み立てた
今や他人の下に居ることがあまりに長すぎた
おれはおれの哲學を要する
それは事實の哲學である。意味でない
おゝ意味のあとを追ふ空しい愚人共よ
意味の哲學が何物をこの地球の上に寄するのであるか
意味とは敗北者の口實である
象徵の哲學がそこに基して
存在を解せざる愚人がそこに禮拜する
見よ！　殿堂は立てられた！
そこにあらざるところのものを認めんとする努力がある
さうしてそれがあへぎながら行きつく愚人のあとだ
それはおれがすてた哲學だ
おれはその哲學のために命を殺してゐた
おれの若い命はいたづらに費された――この若き血よ！
辛苦の十年よ！　――今や實在にかへるべきである
三段階のいづれに汝らはゐるのであるか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

象徴でなくして現實である
意味でなくして實在である
力である。美である
道徳をすてよ。法律をすてよ
過去が現在を何を以つて蓋はうとするのであるか
現在は理智である
しかも理智は意味にかへる
意味は生活の指標でない
おれの住むところはそこでない
おれの世界は現實を通しての情意の世界である
おれの要求するところは美である。藝術である。戀愛
である
それが現實である
世の何人がこの壯大なる要求の本質を感じ得るのであ
るか
おお愚人よ！
過去の亡靈なる意味の糟をなめよ！
意味でない。象徴でない
確乎として認識されるべき實在である

おお戀人よ。わがいとしい戀人よ
おれは何といふ卑怯者であつたらう
おれはお前を認めることが出來なかつたのだ
おれの心が蟲に食はれてゐた
おれは存在否定の哲學を學んでゐた
さうして眼の前にゐるお前さへ見なかつたのだ
見えてゐるお前さへ認めまいとしたのだ
おれの内に存在が顚倒してゐた
おお許しておくれ、おれの戀人よ
おれは臆病だつたのだ
お前の戀さへ知らない風に見ようとした
おれはお前の眼に浮ぶ色を分らないとした
お前の愛らしい白い腕の招きを拒絕したのだ
可愛さうな戀人よ。おれの心をあはれんでおくれ
おれは今更になつて悔いてゐるばかりだ
おれは死にかゝた概念の亡靈だつた
さうしておれの幸福を一切流した
さうしてお前の幸福さへめちやめちやにした
おれは罪を負つてゐる
お前のすがたが夢に浮んでゐる

おれはお前の生活まで破壞したのだ
おゝ虫くへる心よ！
生きてゆく胸の血の音に目覺めよ
事實は常に示してゐる
何故おれは正當の存在を否認したのだらう
何故事實の前にふるへてゐたのだらう
おゝ、おれは今決心した
おれは今やおれの生命をとりかへした

たれはたゞ一つ、たゞ一つの生を求めてゐる
この生は戀愛だ。未來の世界だ！ おゝ戀人よ！
否定が再びおれによみがへつて來た
おれは堂々として人生の大道を步む
おれの道は天空にひらかれた
幸福ののぞみがわきかへつてゐる
おれの日は今や來たのだ
おれは事實と共に濶步して進む
さうして生活の創造をはじめるのだ
おゝわが戀人よ！
お前もおれの同伴者だ
おれと共に手を携へて進むのだ

さうして宇宙ははじめて震動する
去れ、過去よ！ 退け、推積よ！
のろひの眼は最早おれのものでない
たれの道は自由だ
おゝ、戀人よ。躊躇なくおれについて來い！
世界は今やおれのものだ！

おれは何をなさうとするのであるか
運命はおれの上に重荷をおいた
おれは運命に抑へられる何ものでない
しかもおれの心は弱すぎた
おれの心は存在の前にびく〳〵してゐる
怪しい眼が暗中に光つて
おれの心がいたづらにわめいてゐる
おゝ、闇の脅威よ！
おれは悶えてゐる
おれは事實をどう回轉すればいいのだ
たれの性格はもろい
さうしておれの悲劇は兩方から來た
運命と性格と——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さうして二つのくび木がおれをしめつける
起て！　おれの醒めた理性はさう心に命ずる
心はおづたづと起き上る
しかもおれの心は弱すぎた
おれは眼の前に戀人をみつめてゐる
おれは彼女こ合體しようとあへいでゐる
それがおれにこつてほんこうの道だつたのだ
そこにおれの意志が歡呼の聲を放ち
おれの理性がおれの實存を確定してゐる
さうして世界に一つの夢を與へる
それが唯一の美に至る道なのだ
しかもおれはためらつてゐた
おれはあまりに事物を見通すここが出來すぎる
おれは過去を知つてゐる
過去はおれの厄介物だ
さうしておれには未來の見極めがつくのだ
おれは進まうにも進まれない
さうしておれはおれの唯一の戀さへも
運命こ偶然の手のうちに投げた
おた、おれの一生の敵よ！

おれは泣きたい！
おれは自分をなぐりたい！
何故おれは突進しなかつたのだ
何故おれは自我こ必然に任せなかつたのだ！
おれの心はうなだれる
それでもおれの戀人は永久にかへらない
彼女の眼は綠色に濕れておれを責めてゐる
その涙をごうしてかへすのだ
さうしておれの命をごこに救ふのだ！
一切は終つた。おた！
さうしておれの一生はかへらない
自我の哲學者はごこにその跡を止めようこ欲するのか
悔恨は汚辱である
何がおれの上に落ちようこいふのだ
すべては過ぎた
幕は下つた
言葉はない
さうして去つたものの上にいたづらな涙が落ちる
亡靈がひらめいておれの心を誘つてゐる
いづこに？

やさしいなげきが甘くおれをいざなつてゐる、
それがごうしたこいふのだ
おた！
愚人よ！
過去にくだかれた心の敗北者よ！

だがおれは今起つのだ
おれは戀愛のために起つのだ
それが事實なのだ
一切の制度は死んでゐる
生きたものこそ眞の事實である
さうして戀愛の花が生の上に咲いてゐる
おれの未來がそこに息づく
おれは強くなるのだ
おれはすでに超人を學んだ
おれは自我の哲學者だ
おれの前に何者が横へられてあるのか
行け！
おれは革命歌をこなへる
おれは死んだ法則にかかはらない

おれの決心は定まつた
見よ！　そこに自我の炎がひらめいて
かの崇高な超人が舞ふのだ！

去れ！　心に巣くふ一切の惡よ！
惡こは何だ
彼らが教へたる一切のものである
さうして彼らが惡こいふこころのものの一切は
今やそこに眞の善こして出現する
概念は轉化する
創造が命である
古代人の貧しい智識が凝固して
そこに現代の惡が生じた
空しい現實よ
それはおれのいふ現實でない
おれの目ざすこころは未來の現實だ
それの發展を妨げるのが古典の理想だ
おれはおれの意志を信ずる。本能こ欲求こ！
かの偉大にして壯嚴なる幸福の目覺め！
おれの意志をふせぐものはみな惡だ！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おれは勝利を見る
陶酔と亂舞と——、
そのそばに死の影である理智が横はつてゐる
それはもうおれの前に降伏したのだ
世は去つた。——世が來たのだ！
幸福の影がひらめいた
たくみにつくられた計畫がひらかれた
心をおとしいれる罠があばかれた！
あらゆる生命を虐げ、苦しめ、囚へる罠である
舊世界のねたみの罠である
傳統はうけつがれた
しかも傳統は絶對でない
おれは今や一切の束縛から放たれた
おれは起つ！ さうしておれは進む！
心は一切の惡をすてるべきである
生命は創造する
過去の所有は何物でない
生活の一切をつくしての所有は一時の創造にしかない
所有のあとに創造である
それは事實の創造である

意味の假面でない
何人がその喜悦を感じ得るのであるか
所有の生活は愚人のなすところである
過去の生活である。過去の模型である
そこに魂はない
そこに命はない
そこには塵にまみれた存在がある
愚人よ！
一切の歡喜！ 一切の享樂！ 一切の幸福！
それらはすべて創造から來るのだ
生むとは生命の直接のはたらきである
さうして戀愛こそ自我の第一の生むものである
おれは超人を目ざすものだ
おれの生活は創造の外の何物でない
今やおれは起つ！
さうしておれは新しい紀元に入るだらう
おお美の化身よ！
をどれ！ うたへ！
美とは價値の最上である
感ずるとは考へるよりもすぐれてゐる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

美は感ぜられるものだ
おれの生活は美のための生活だ
美を生むこと、それが戀愛の生活だ
美の創造！
それより偉大なものがかつてこの世にあり得たか
おお戀人よ！
さうしておれはそのために起つのだ
そのやさしい手をおれに借しておくれ！
双手をあげておれを抱いておくれ！
一所に戀愛と美との創造の世界に入らう！
見よ！
現實の勝利である
哲學と概念とはこの勝利に何を働いたか
それは現實の力である
かくも醜くいやしい現實は瞬時に變化した
價値が贈物をささげて、存在が轉向する
おれの意志がそこに花ひらいて萬物を更新する
さうして現實がその認識を得たのだ
おお愛の手よ！ すべてを抱く愛の手よ！

おれは現實の眞中にゐる！
そこには臆病なくらい影はない
おれは戀人と共に手をたづさへて白晝の喜びに接吻する
全天地の歡喜が全身にみなぎつて
かつて輝かざる太陽の大光線！
自由が絶對の廣野に横行して
無二の幸福が頰づりをする！
おお！
忘却である！ 平和である！ 興奮である！
一切はその姿を失つて一意おれの下に整列する
さうしておれは戀人と笑をかはす
人間のもつところの最大の美は裸體の美である
強き唯一の戀こそ赤裸のうちにはぐくまれる
戀こそ人生の救濟である。おお絶對の美よ！
裸體と裸體と相抱いて純一無雜の美が湧く
さうして何物を認めない戀愛が陶醉の歡喜にあふれて
おお接吻！ おお抱合！ おお昏迷！
波うつごとき肉體のかをり！
覆すがごとき血潮の笑ひ！

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

狂ふがごとき心臟のをどり！
音と色とにほひと味ひとが交錯して
夢は現在をすてて未來に走る
さうして未來の國土がこの地上に建てられる
地上こそ唯一の人間の住處である
現實よ！
心の囚人はいづこであるか
羞恥と汚辱とに身を賣つた心の囚人はいづこであるか
勝利である！
悲みは去つた。のろひはない
來るべきものは微笑である

すべてをつくして後に來る微笑である
しづかにつつむ天才の微笑である
さうして勝利に醉つた現實がその微笑の下に
なほ來るべき生活の創造をまつてゐる
見よ！
今や現實である！
現實の外に何物もない
酒と火とをどりと血と肉と！
行け！　わが心よ！
現實の方へ！　現實の方へ！

旅行鞄

松本弘二

一

十二月も此數日で終るといふ頃、――今年の年の瀬は何うして過すか、下宿屋の拂ひだとか、額椽屋だとか、質の利上だとか、それぱかりでなく、未だ冬物が這入つた儘で出てゐない。出る時も、家にゐる時も、一張羅の洋服で、それも外套はあるが、間服を着てふるえてゐるので、着物と二重マントだけは出したいのだ。だが、下宿の拂ひさへも出來さうにもない。仕方がないから、夏の木綿もの、少しばかりの本、從兄から貰つた革の旅行鞄、等々――それに下手な繪でも仕方がないとして、とつてくれるところがあつたら額椽付が大少とり混せて二三枚はある。――そんなものを、少しばかり貸してくれて構はないから入れて來やうかしら。そしたら幾分かの足しにでもなるだらう。晋一は二三日とう、文字どほりに考へあぐんでゐた。

放蕩をするでもなし、大抵は繪でも描いて勉强してゐる。たまには一杯やることもある。友達が繪を賣つたと聞くと、一杯たごらせに出て行くこともある。氣持の其方に向いた時には、金にしやうとしても、一向金にならない小說を書くこともある。――我々は何うしてサンヂカリストになつたかとか、サンヂカリズムの世界はどんな世界であるとか、平和だとか、または藝者制度や娼婦制度は何故に徹廢しなければ不可いかとか、さういつた小說を書いてゐるのである。書いては削り、書いて削り、未だ名作といふものを書いたことがない。さうしてゐるうちに、晋一は段々輪に輪をかけて貧坊して終つたのだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

愈々二三日で新年になるといふ時、晋一には思はぬお金が這入つた。日本橋のTといふ人が只一人、彼の繪を愛護してゐたのだが、突然十號を二枚買つてくれたそのお金は、下宿料を拂つて、額椽屋が厭な顏をしないで歸る位ゐに拂つて、それでも尙冬物が出せる位ゐの額に達してゐたのだ。

『これで、やつと暖かい着物が着れる』。

晋一は、下宿のお內儀の笑顏を見て、梯子段を自分の部屋へ上りながら、さう一人北叟笑みした。押し入れを開けて、風呂敷を出した。が、直ぐこれでは包みきれまい。と思つた。風呂敷を二つにしやうかと思つた。が、それも智惠ない話だ。さう考へたその時に思ひついたのが、例の旅行鞄であつた。彼はそれを押し入れから取り出して、風呂敷で埃を拂つた。そして、一寸ぶら提げて見て、嬉しくなつて獨り微笑むだ。これはいい考へだと思つた。鞄の兩側には、北海道だとか、臺灣だとかの旅館のデッテルが張つてある。商買用で旅行ばかりしてゐる從兄から、貰つたといふよりも寧ろひつたくつたといふ方が適當かも知れないが、兎に角自分のものになつてゐる、彼には相應はしくない代物である。『これは名案』、さう思ふと彼は再び微笑んだ。質屋の佐六どんも、彼の豪奢ぶりに驚くだらう。晋一は、もう向ふへ行つた時のことを考へながら、電車通りの方へ下宿を出た。佐六どんは、彼とすつかり懇意になつて終つた、質屋の若い番頭だつた。

外は眞の闇で兩腭が傷くなるやうな冷たい風が吹いてゐた。順天堂の側から新宿行の電車に乘つた。恰度、諸會社から家路に歸る腰辨達で、電車の中は殆んどぎつしり詰まつてゐた。鞄の置き處に困つた。下に提げてゐると、隣りの人に邪魔になつた。頭の高さ位ゐ上に差上げてゐると、腕が疲れて困つた。仕方がないので、鞄を縱にして前の方で抱いてゐた。水道橋で人が少し減つた。晋一はその調子をねらつて、少し中の方へ這入つた。飯田橋で又少し減つた。晋一も亦少し中の方へずり込んだ。が、勿論街ける場所もなく、洋服着の人や、土方風の人や、紡績の着物を着た會社通ひらしい女の間に狹つて、矢張り鞄を抱きなら立つてゐた。それでも、ちつとも苦にはならなかつた。といふよりもそんなことを考へる餘裕もなく、安心した氣持で、何かにほかんと憬れなが

ら搖られたり、押されたりして立つてゐた。

『や、此方にお掛けなさい。――此處にお掛けなさい。』

さう、の直ぐ前で言ふ者があつた。何々家とか、何々商會とか襟に染め殘してある印絆天を着た、二十四五位ゐの職人風の男が、半ば腰を浮かしながら、晋一の方にさう言つてゐるのだ。彼はそれに氣がつくと、直ぐ辭退した。

『直ぐ降りますから、……何うか』

彼はさう言つて、猶ほ腰をおろさうともしなかつた。實際混んでゐるので少し荷厄介であつたが、その時はさう大して困つてもゐなかつた。第一中は空つぽだし、重たい筈もなつたのだ。

だが、その職人風の男は、今度はすつかり立つ上つて終ふと、『遠慮はいりません。お掛けなさい』さう言つて晋一を自分の後に座らして終つた。彼は妙な、――濟まないやうな感じで兎に角彼の後に腰を下した。鞄を膝の上に乘せて、可なり重いものであるかのやうに見せるには、一體何うしたら善いのであらうかと考へ始めた。この場合、そうでもしなければ、その人に濟まないないやうな氣がした。彼が重い荷物を提げてゐるので、自分と入れ代つたのだし、だから自分はいい行爲をしたのだと思つてゐるのだらうさうし、そうしたならば今の場合その行爲を滿足さす方が、その人に對しての禮儀であり報ゐである。さう晋一は思つたので何うにかして重い荷物であるかのやうに見せ度かつた。が、別段いゝ方法もないので、何うして直く座つて終つたのだらう。といふやうな、自分を責める氣持に襲はれたり、又それとは全然反對に、可笑しいやうな擽つたいやうな氣持に襲はれたりして、そのまゝ電車に引かれてゐた。席を讓つてくれた男は、釣革にぶら下つて、彼の直ぐ前にぢつと立つてゐた。

二

電車が北町の停留場まで來ると、晉一はその人に一寸禮を述べながら、人々の間を搔き分けて下車した。大通りを右へ矢來の方へ這入つた。それから直ぐ右へ折れて、彼が數年越し行きつけてゐるA質店の暖簾をくゞつた。其の店は、他の店よりも割り合ひに多く貸してくれるし、地の利もよいので、常々から隨分と流行つてゐた。

先客が二人程來てゐた。二人共借りる方らしく、二三圓の差を多く借りやうとして、切りに主人と交渉してゐた　顏ののつぺりした、そしてこんな人が質屋通ひをするのと思はれる位ゐにいゝ着物を着た、だが何處か遊び人らしい風をしてゐる男であつた。今一人は、小商人らしい、みすぼらしい身裝をした、五十格好の男であつた。

晉一が靜かに這入つて行くと、佐六どんはにきび面を主人の側から突き出して、彼の方を見た。

『入らつしやい。……暫らく見みませんでしたね』

『さう、しよつちう來てたまるもんかい』

『私しあ又この頃は餘程景氣でもいゝのかと思つてましたよ。……暮に來るやうぢや、矢つ張り景氣が悪いのかな』

『馬鹿言ひなさんな、今晩は出しに來たんぢやないか』

さう言つて彼は苦笑したが、他の二人に當てつけるやうに思はれて、それからは默つて終つた。側に來てゐる二人に比べれば、自分は聊か幸福のやうにも思へたり、だが、それにしてもこの暮になつてから、借りに來る人が從令ばどんな悪い、自業自得のやうな原因があつたにしろ、それは隨分と氣の毒に思へた。その、火の出るやうな氣持も同感された。とは言へ、彼自身にしてもが、二三日前までは、幾らにもならない質草の數々を頭の中で勘定して、今一歩で此處へ來やうとしてゐたことを思ふと、果して彼に他の人を憐れむ資格があるか何うか、さう思ふと何だか自分自身の矢鱈な心持が馬鹿々々敷くなつて來て、癪にもさはつて來た。

佐六どんは直ぐ出して來てくれた。今直ぐ入らぬものは、矢張り殘すことにした。二重マントと、冬の着物だけ出した。それでいつぱいになつた鞄を提げて、彼は元氣よく左樣ならを言つた。先程の二人は、未だ相談が纏

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らぬらしく、何かと愚圖々々言つてゐた。格子戶を開けて彼が出た時に、又一人の包を抱へた人と　つた。何だか、妙な淋しさに襲はれて遣瀨ないやうな氣がして來た。

啓一は、それから直ぐは停留場の方へ行かなかつた。左の方へ、――椅寺町の方へ歩き出した。懐中には、未だ多少のお金が殘つてゐるのを知つてゐたのだ。久しぶりで、湯豆腐でほんの一杯ひつかけて、かち〳〵に固つてゐる身體中の筋肉から神經を、いたはつてやらうと考へ出した。何時まで經つても貧棒とは離れられさうにもなく、摺り減らされた神經、榮養不良で活氣のない肉體、――さうした、その年も〳〵虐げられ、その月も〳〵も樂をしたことのない肉體は、酒を呑んでゐる間だけでも暢んびりしてくれるだらう。春のやうな氣分になつてくれるだらう。彼の頭にはそんな切迫つまつた考へが、考へることもなく起つて來て段々と―酒場の方へ足を向けて終つたのである。

繩暖簾をくゞつて、中へ這入つた。何の卓子も、何の卓子も、先客で殆んどいつぱいになつてゐた。塵や埃に汚なくされた印絆天を着て、頰の出つぱつた顏に髯を茫々と延ばしてゐる五十男、色のあせた、メルトンの二重マントを着た商人風の男、ひんまがつた帽子を冠つてゐる安腰辨らしい人、そんな人達がごちや〳〵と居並んでゐて、その中の幾人かは二合入りの燗德利を、ぐでん〳〵になるまで列べ立てゝ、何かしら空氣焰を隣りの人に聞かせたりしてゐた。が、又一方には、一人ちびり〳〵盃をなめながら、切りに考へてゐるらしい人もあつた。

啓一が腰を下した直ぐ側の人は、そのちびり〳〵の方で、一盃呑んでは何か考へ、併も、考へあぐんでゐるやうな格好であつた。蠑螺の坪煮、湯豆腐などが彼の前に運ばれた。可なり水でも這入つてゐるらしい惡い酒、だが今の彼にはそんな微妙な味を吟味してゐる餘裕もなく、久しぶりの酒に咽喉の鳴るやうな快感を覺へながら、ちびり〳〵呑んだ。一本と思つたのが、もう一本といふことになつた。

表の障子穴から、遣瀨なささうな二つの眼が窺いたり、子供を負つて、何時洗濯をしたまゝかと思はれる皺ばかりの着物を着て、髮はづんぐり巻にし、物うさそうに障子を開けて酒場を見廻はす女、――そんな人達の眼は、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

晉一が其處に來習つた頃には、可なり神經的に、感傷的に、彼の心持を惱ましたものであつたが、もこの頃ではそんな眼にも馴れて終つたし、さう大して彼の氣持を苛立たせもしなかつた。彼は、思ひがけなくも、その頃餘り呑まなくなつたせゐか、氣持よく醉つた。――そして第三次目の一本が女の手から運ばれたのだ。

晉一の側で、考へ／＼呑んでゐた男が出て行くと、直ぐその後に一人の車夫が這入つて來て腰をおろした。小柄な三十格好の愉快氣な男だつた。もう少し醉つてゐるらしかつた。赤ら顏に、働らき盛りらしい血色を漲らしてゐた。が、その赤ら顏も、半ば以上は酒の爲めに出た色らしく、それは彼の言葉つきで直ぐ推察することが出來た。車夫は燗德利を一本立てると、湯豆腐の中に箸を突つ込んだり、馬鹿貝の鍋をかき混ぜたりしながら、きゆ／＼つと音をさせて彼自身の盃を乾してゐた。さて自分も重ねて呑んだ酒に醉つて來ると、先程から相手欲しさうにしてゐる晉一の方へ少なくとも車夫にはさう見えたらしく、車夫は彼の方へ身體を向け始めた。その時は、右手には盃を持つてゐた。

『旦那、逆さで失禮ですが、……一杯さし上げませう』

さう言つて元氣よく手をさし延べてゐた。晉一は、不意のことに一寸面喰ひながら周章てゝその盃をうけた。それから、車夫は彼の膝の上に乘せてある鞄に一寸眼をやつてゐたが、今度は少し頓狂な聲を出して言ひ始めた。

『いや旦那はこれから御旅行ですな、トランクを提げて。……このデッテル は臺灣の旅館に、北海道の、なか／＼强勢ですな。今度は何方まで……』

『いや、旅行ぢやないんです』

『そんな謙遜つて奴は不用でさア。現代式にやつつけますと、あけつ廣げて終ふのが本統でさア。旦那の洋服の格好から私つしが推察しますと、旦那は油繪つて奴をお描きなさいますな。私つしは畫描きつて人は大好きで御座んすよ。何うです、東京驛までお供いたしやせう』

『俥屋さん君なか／＼愉快にやるね』

晋一も可なり醉つてゐたし、身體中の神經が一時に溶けて終つたやうな心持で、盃を返しながら、段々ご出鱈目を言ひ始めた。その時はもう今迄のやうな生活の苦勞も、肉體の疲勞も何もなかつた。唯、晴々さした愉快な空氣ばかりが彼の頭をこり卷いてゐた。

その時であつた。先程から、晋一と車夫こ向ひ合つて呑んでゐた會社員らしい男が二人、——それも、腰辨こいふ字で盡されてゐる感じの二人が、酌したり、酌されたりしてゐたが、呑みながら會社の愚痴らしいここを話し合つてゐた。

『だから、僕等が幾ら安全な地位にあるからつたつて、かうなつて來りや安心してゐられないぢやないか。職工なごになれば、ストライキつて武器を持つてゐるから、上手く行きさへすれば勝つここも出來るんだけれご、僕等ぢや職工こ一樣にあんな眞似をするわけにも行かんし、結局は泣寢入するより仕方がないな。……今のうちに追々い、口でもあつたら探して置くんだね。』

一つ二つ年上らしい、こ言つても三十を少し越した位ゐの男で、ハイカラの眞似をしてゐるらしい髯を生やした方が、若い方にさう言つてゐる。晋一は車夫この話の合間に、聞くこもなくそれを聞いてゐたが、其處まで聞くこ急に腹立たしさに襲はれて來た。鞠を車夫の方へ押しやるやうにして、ぬつこ立ち上つた。

『馬鹿！　意氣地のない話ぢやないか。君達は何故鬪はない。ブルヂョアの犬、そんな奴は何處へ行つたつて矢つ張り同んなじさ。君達は、君達自身が略奪されてゐるここを知らないのか、そんな奴は頸でも縊つて死ね！馬鹿野郎！』

晋一は眞紅な顔にいつぱいの怒氣を含めて怒鳴つてゐた。その二人も、突つ立つて來た。それと同時に、他の卓子に掛けてゐた人々が、總立ちになつて彼等の周圍に集つて來た。二人の方が、本統に昂奮した面持で、晋一に突つかゝらうこした。他の人々が、それを阻止した。こ、又一方には車夫の方が彼の身體を抱き止めた上に、段々こ後の方へ運れ出し始めた。『旦那、だから早くステーションへ行きませう。こんな處へゐるこ馬鹿々々敷いて

さあ。』
『行くよ。大いに行くよ。こんな處へ馬鹿々々敷いゐられるもんか。意氣地なし野郎！』
それから、彼は殆んど夢中で拂ひをした。そればかりでなく、彼が拂つた勘定の中に、車夫の分まで拂つたことは意識的には知らなかつた。

俥は肴町から左へ折れて、飯田橋の方へ走つた。それから九段の下を通つて走つた。車夫は、體をふら〳〵させながら、それでも根氣よく走つた。晋一は俥の上で冷たい風に當りながら、時々間歇的に白い湯氣を吹いた。熱した後で心地が好かつた。これから避寒旅行をするといふ氣分その儘であつた。
が、東京驛の大玄關に俥が横づけにされた頃には、彼も寒さの爲めに幾らか正氣に返てゐた。多少、身慄ひさえも出る位ゐであつた。だから、『しまつた。又やり損ねたんだ』といふ理解が、彼を後悔さして來た。恥かしささへ混つてゐた。――走つた爲めに醉が極度に上つて、返つて朦朧となつて終つて車夫に、いゝ加減な賃錢をやると車夫はそれでもぺこ〳〵と頭を下げた。
『君、大變御苦勞樣。……もう歸つてもいゝよ』
晋一がさう言つた時には、車夫はもうたまらないらしく俥の下段の足置きの方に腰をおろして、毛布を冠りながらぐつたりなつて終つた。彼はそれで安心して、――それは、彼が電車切符賣場の方へ行くことを、よもや見はすまいといふ安心から、――だが、I酒場で行けつこ言つた元氣どころか、お茶水まで電車切符を買ふお金さへ、もはや殘つてゐるか、殘つてゐないか、蟇口の中を心配しながらしほ〳〵として、併も旅行鞄を右手にぶら提げて、こつ〳〵と切符賣場の方へ歩い行つたのであつた。

（一九二二・十一・十二）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

鐵鎖を斷つ

川崎春二

安太郎が煉瓦場の炭焚べに廻されたのは、まだ〳〵殘暑の酷い九月の中ごろで、殊に煉瓦燒場の日盛りは、爛らすやうな火氣に氣も遠くなりさうであつた。

耐火煉瓦で造られた大きな竈の周圍には、二間位の間隔をおいて竈なりに六角形の高い煉瓦塀が築かれてゐた。その上六つの竈口に對して、外壁の出入口は三ケ所しかなかつた。竈の口の蓋の隙間からメラ〳〵と洩れる火焰さへ、この外壁で絕えず蒸返へさせて少しでも火氣を遁がすまいとした構造であつた。

三十人近くゐる煉瓦場の職人の中で、晝休みに一時間だけ他の者に代つて貰ふばかり、この竈の廻りを始終離れられないものは炭焚べの安太郎だけであつた。二十間も隔つてゐる石炭置場から、バケツに七八分目宛運んで來ては、息が詰りさうに暑い火氣の中に入り、六ケの竈の眞赤に燒けた蓋を長いやつとこ火箸で開けて、順番に石炭を放り込んで廻はる。それが朝から晩まで續くのだから、十六歲の少年の仕事としては、如何に安太郎があらつぽい野育でも、實際骨の折れ過ぎる程の負擔であつた。

しかし安太郎は、誰に苦情を訴へる術もないので、『これが自分のしなくてわならぬ唯一の仕事なんだ』といふ風に恰度何でもない仕事を碌に骨も折らずにしてゐるやうに、のそり〳〵と、そして怠けずに働き續けるのであつた。

『安太郎が炭焚べに來てからは、煉瓦の燒けが不同なしになつた。』

『まつたく、是れまでにないことだ。』

翌朝、竈をほぐして煉瓦の出來榮えを見る度に、旦那も技手の野村さんも安太郎の働き振りを譽めた。普段は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

自分のことを、犬か猫ほどもかまつては吳れない親方さへも、

『ほんたうに安太もなあ、これだけ感心なものさ。』

など、、その四角いドス黑い顏に、譽めたのか貶すのかわからぬやうな、無愛想な微笑を浮べるのであつた。

汗と石炭の粉とで地の色もわからなくなつた股引とシャツ、泥そのもの、やうな手足、インジャンのやうな尖つた顏に眼ばかり不氣味に光つたこの少年も、この時許りは大に得意になつて、その營養の不足らしい骨つぼい肩を聳やがすのであつた。

安太郎は全く、かうした時の外に此の世の中で何の誇りも、何の心榮えも感じる事の出來ない、不幸な少年であつた。彼が奇怪な顏付をして、眞黑になつて働いて居るのを見る者は、誰でもその運のない生れだと言ふ感じを持たずにはゐられない程、その無頓者な動作があたりの空氣を不思議に支配するのであつた。

それでも時たま、親方から貰ふ小使で、晝休などに向ふの原つぱを横ぎつて行つて、梨畑の小屋から梨を四つ五つ買つて來たり、そこいらから駄菓子を買つて來たりして、それを入江の柳の下に寢そべつて噛ぢることがあつた。そんなことでも除いたら、彼には爪の垢ほどの樂しみも、喜びも見出せなかつたのである。けれども彼は初めから此の世の中を、是れ以上なものとは思つてゐなかつた、からそれ程に自分をみじめな人間とは思つてゐなかつた。

只一つ、安太郎が不滿でたまらないのは、職人の誰もが恰度彼等全體の奴僕見たやうに、目の前で『安公』とか『安太』とか呼捨てにされることであつた。

『フン、畜生め、俺あおめい達の弟子でも何でもねいだ。親方の弟子なんだ。』

安太郎は自分の名を呼びかけられる度に何時もかう思ふのであつた。時にわ、ブッと頰を膨らして、何と言はれても聾か啞のやうに默つて行つてしまふこともあつた。職人達はそんな場合、腹を立て、『打ちなぐるぞ』とか『てめいは何處の馬の骨だ』なとゞ威嚇したりしたが、だん〳〵と此の偏屈で奇怪な少年をば、眞面目には

相手にしないやうになつた。安太郎は安太郎で、皆の前へうつかり行つて弄ぶり者になるよりは、入江の岸の大きな柳の木蔭で寢ころんでゐる方が、ごんなに氣樂だつたか知れなかつた。で、彼は暇さへあれば自然ご足がそこへ向いた。仰向にひつくりかへつて大空を眺めながら色々なことを想出すのは、たごへやうもなく嬉しかつた。

そこで安太郎が何時もよく思出すのは、利根川の上をすら〳〵と走る高瀬舟のことであつた。彼は自分が何處で生れたのか、誰の子なのかわからなかつた。たゞ赤坊の時、利根川の舟乘りであるその兩親に貰はれて、育てられたのだこいふだけ外知つてゐなかつた。

安太郎がその兩親ご共に初めてこの利根の支流の渡良瀬川を上つて、そこの入江に彼等の家であり、一切の生活方便である高瀬舟を入れたのは三年前の夏であつた。それ以來、彼の兩親はずつご此處の煉瓦を積み込んでは、東京この間を上下してゐるのであつた。

安太郎が此處の煉瓦場の親方の家に預けられるやうになつたのは、些細なことから兄弟喧嘩をして、弟の岩吉の頭を舟板で撲つて、舟緣を血だらけにしたのが原因であつた。少くも安太郎は、さう信じてゐた。それは二年前の秋で、もう川水が冷たくなつてからであつた。舟は舟錘(ふなあし)に疊表を少しばかり積んで、上げ風に帆を孕ませて關宿の河岸を左に見てシャブ〳〵こ氣持のよい響を立て、矢のやうに走つてゐたが、彼は兩親に兩手を縛られて綱で艫(とも)につり下げられ、川中に體半分を浸されたまゝ小半時も引ずられて行つた。彼はその時の苦しさ、恐ろしさを考へるこ身ぶるゐせずにはゐられなかつた。

『この恩知らずめ、一日ましに惡獰になつて來らあ、今度こそ川流れにしてやる。』

安太郎は本當に、今度は川流れになつてしまふかも知れないこ思つたのであつた。

それから三日の後には、彼は煉瓦場の親方の家に殘されて、五年の年期で一人前の煉瓦職人にして貰ふことになつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

安太郎は父母の舟が煉瓦を積み終つて、入江から出る時も、急に自分の身の上が變るのだといふ激動のために頭が茫としてゐたので、たゞ帆布がする〳〵と捲上り、梶がぎゆう〳〵鳴り、舟脚がグルーッと曲つて、何時までも消えずに残つたのを見つめてゐるだけであつた。それでも舟が見えなくなると、いよ〳〵遠い小島にでも置いてきぼりを喰つたやうな氣がして、急に哀しくなつておい〳〵泣き出したのであつた。

親方の家では彼は、少しも煉瓦の方は敎へられなかつた。朝から晩まで、親方の家の末つ子の太郎坊の守をさせられたり、方々への走り使ひや、風呂の水汲みからおしめの洗濯までさせれるのであつた。彼は『これは約束が違ふ』と思つたけれど、何うしようもなかつた。

しかしこの不滿も、陸の生活の目新らしさにすかされて、次第に馴らされて行つた。そして今までは餘り考へても見なかつた、生みの兩親のことが氣にかゝり出した。それは、そんなに懷かしいとか慕はしいとかいふのではなく、『自分の本當の親はどんな人か、父親は立派な洋服など着てゐるか、母親は又奇麗な優しいお上さんだかな』ともかく、遠くからでもいゝから、一度見たいものだと思ふのであつた。彼は自分の顏付とは似もつかない、父や母を描き出しては、柿葉のやうな冷めたい蒲團の襟を泣きぬらすこともあつた。

舟の親達は幾度も〳〵、そこの入江に這入づて來た。今は舟の兩親も以前とは打つて變つて、『よく働いて、いゝ職人になれよ』などゝ、優しい言葉をかけて呉れたりした。

安太郎は、生みの親達のことを一度はよく聞き糺して見たいと思ふやうになつた。

『お母さあ、おらが本當のお父さあやお母さあはどんな人だか、おらあ本當に敎へてもらひていだ……』

幼い時から住み馴れた穴のやうな舳の室に這入つて、母親に恥かしさうに問ねたのは、陸へ上つてから半年許り經つてからであづた。

『そんなことがわかるもんかえ、赤坊を他人に呉れるのにあ、名も所も話されねい譯があるからなんだぜ。そんな事を聞くよりも、こちこらを本當の親と思つて、孝行して呉れゝばいゝだがな』

母親は掻消すやうに、それでも他人と口を利く時のやうに眞顏になつて言ふのであつた。

安太郎は、どうやらそれで一片ついたやうな氣がしたが、それでも何かの拍子に生みの親がわかる時が來るやうにも思はれてならなかつた。

まる一年過ぎても安太郎は、元の子守の安太郎で、煉瓦場へはやつて貰へなかつた。

『俺はまだ年が足りねいんだ』

彼は斯う思つて諦めてはゐても、何だかもどかしいやうな氣がしてならなかつた。

一體安太郎には、こゝの親方は惡く思つていゝのか、善く思はなくてはならないのか、見當がつかない不可思議な人間であつた。

自分では毎晩酒ばかり飲んでゐて、家内の者や安太郎には碌な食物も吳れないし、弟子職人達の中で、『嬶が病氣なので』とか『子供が病氣なので』とか言つて、金の無心などに來ても恐らく一文だつて出してはやらなかつた。それでも多くの職人達からは『親方々々』と立てられ、技手の野村さんや旦那からも、やつぱり、『親方』とか『小山君』とか言はれる。またどんな難かしい事件が起つた時でも、『まあ〳〵俺に委せねへ』と一言いへば誰も直に默つてしまふ。安太郎は、こんな親方をたとひ心の中でゝも惡く思つてはならないやうに、えらい人間のやうにも思はれるのであつた。

ところが、この秋に煉瓦場の『炭焚べ』が遁げてしまつたので、その代りに安太郎を使つて見ることになつたのであつた。彼は小躍りして喜んだ。しかし、それは決して喜ぶべきことではなかつた。苦しい辛いといふことばかりでなしに、こんな事では何時になつて、一人前の職人になれるだらうと考へた。おまけに、職人達は揃ひも揃つて、安太郎に親切でなかつた。

人の話では、竈番は一人前の賃銀を取つていゝ仕事だと聞いた。しかし親方は、月に三四度二十錢か三十錢宛位、彼に小使を吳れるだけで、股引一つ、シャツ一つ、奇麗なものをあてがつては貰へなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はじめの間は、野村さんや旦那に譽められるのが嬉しくて、他にしなくてはならぬ用事のある時でも、竈ぼぐじの場に居合せて、出來榮えを誇らしげに見ながら、それを運んだりしたものであつた。

けれども二月經ち、三月經つ中にその並々でない骨折が、ちつとも酬いられてはゐないといふことに氣がついた。そして、自分程甲斐のない馬鹿々々しい仕事をしてゐる者はないと考へるやうになつた。

『たゞ口の先で譽めるぐらゐ樂なことはありあしねい。幾ら眞面目に働いたつて、眞黑になつて働いたつて、他人から重寶がられ、便利がられるだけなんだ。糞骨折りだ』

安太郎は最早、竈ぼぐじのところへは、行かないですむ限りは行かないやうになつた。彼には、酬いられもしない仕事の結果を見るのが厭なのであつた。

そして、石炭置場のぼかぐ\する板塀に凭りかゝつて、日向ぼつこをしながら、色々な空想に耽るやうなこともあつた。

でも安太郎は、元の舟の生活に歸りたいとも思はなかつた。ともかく陸は廣い何をするとも自由だ。こゝでは誰もがのうぐ\と手足を展ばされるやうに思へた。だからと言つて、此處を出て何うならとも思はれなかつた。

水に馴染み、川風に吹がれ、舟水に浸つて育つた彼は、常に高瀨舟と川面とが目に浮んだ。土塊のやうに素朴な心に、繪のやうな大利根の風景を思浮べることもあつた。しかし何か水の上が、本當の自分の生活すべき場所とは思はれなかつた。それは、過去の生活記憶から來る氣持ではなかつた。

少しの事にもガミぐ\怒鳴りつけ、頭でも體でも打つ父親、決して優しくはして吳れない母親、意地惡の岩吉、ひねくれで泣虫のお仙つ子、しかし彼には、誰れも彼れも懷かしい人々ではあつた。晝の休みに例の木蔭で午睡などしてゐる時、入江の莕の茂みで葭切がキキツぐ\と鳴いたりすると、彼はたまらなくなつて夢も結べないやうなこともあつた。

『ほんとにつまらねい。べら棒な』

と思ひながらも安太郎は相變らず額に汗をにじませて、忠實にせつ〳〵と炭焚べを勵んだ。彼が竈番に來てから、もう四ケ月近くなつたが、未だ煉瓦の燒けのことで、苦情を言はれた事は只の一度もなかつた。

寒さが烈しくなつてからは安太郎の仕事は大分樂にはなつたが、それと反對に今度は職人達が、少しでも暇さへあれば直に、竈の周圍に寄集つて來て、安太郎をいぢめるのであつた。

『たい安公、ためいは舟板に乘つかつて、栗橋の鐵橋の下を流れて來た、川流れ子だつちうだないか』

『そんなに馬鹿骨折つて一日幾らになるだい』聞えない振りをしてゐても、こんな言葉が耳に這入ると『ク、ツ、畜生』と言はずにはゐられなかつた。

さうして彼は、二圓だけの働きをしたら、きつかり二圓だけ酬はれる處へ行つて働かう。親方に義理があるではなし、何處かへ行つてしまはうとしみ〴〵思ふやうになつた。

『今に見ろ、俺あ何處かへ突走(つつぱし)つてやるから』

安太郎の胸の中には何時も、かうした考へが藏されてゐるやうになつた。はつきりと旅費といふ考へもなく小使錢を一圓七八十錢ほど貯めたのが、今は大事な〳〵旅費となるやうに思はれた。

暮の押しつまつてからであつた。安太郎は夕飯を終へると、たつた一枚のさつぱりした着物を、普段着の上に重ねて、綿ネルの頸卷をして親方の家をふいと出た。そして、入江の縁を廻つて渡良瀬の堤防へ出た。この土手を少し上れば、日光街道へ出る道があつた。安太郎は日光から今市の方へ行きさへすれば、水力電氣や炭燒きや其他色々な働き場所が、幾らでもあるといふことを聞いてゐた。

『今夜こそ突走るんだぞ。なに、十五里や十八里は一晩と少しもかゝれば雜作なく行けるだ。それに道は並木の街道だから、間違へつこはねい』

安太郎は下駄を脱ぎ棄てゝ、羽織の下に匿して持つて來た草鞋を履いて、裾をくるりと端折り、頸卷を頭から冠ると、走るやうに堤防を川上に向つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『支度さへきまれば、親方に見付つたつて追ひつかれあしねいぞ。』

安太郎は急に、強い人間になつたやうに思はれた。今や、彼の全身にはどす黒い奴隷の血の代りに鮮紅な血潮が脉々の壁を突き搖つた。

ヒユー／＼と凩が駈け荒む空はカラツとして、何處までも廣がつてゐた。川の上には白い星が撒かれて、水明りが透き通るやうにチラ／＼した。

岸の枯芦が、時々追立てるやうにざわ／＼と音を立てた。

安太郎は一段と勇氣を加へて、敵の中に躍り込むやうな姿勢を取つて急ぎ出した。(完)

『勞働祭(メーデー)』前夜の曲

鳳　逸　平

石壁に圍まれて嚴重に閉されたる狹き室内。月は沈み星は匿れたれど太陽未だ昇らざる黎明。理智と情熱に輝ける青年二人。

b　頼むから靜かにしてくれ。俺はもう疲れて眼が眩みさうなんだ。

a　馬鹿めつ、それを俺が知つたことかい。

b　あゝ堪らない。俺はもう氣が變になりさうだ(どさりと壁に凭れて腕組みをする)

a　いゝから怒鳴つてろ、そして跳ねてろ。泣くなよ、泣いたつて世間はどうにもしちやくれない(と踊り唄ひ狂ふ)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

b　ほんとに靜にしてくれ。俺はへと〱に疲れてるんだ、それに腹もぺこ〱なんだ。
a　石塊がパンになつてウヰスキイが地から湧き出る時代が來たら、お前の泣言も神樣が聞き届けて下さるだらうよ。ハハ〱……。
b　俺はも少しのことで今日職にありつくことが出來たのだ。俺は毎日々々其處らぢうをほつゝき歩いて漸つと今日それをめつけたんだ。それに——ああ犬め、俺の邪魔をしやがつたんだ。ああ狂人め。
a　どうせ狂人だ。氣が狂はなくつて世の中に生きて行けると思ふのか……苦しくてもかはない、空腹でもかまはない、疲れてゐてもかはない。聲の出る間は唄つてろ、足の續く限りは跳ねてろ、それで可いんだ。くそつ、人生はそれで可いんだ。
b　(突然發作的に)人生だ人生の觀樂だ、人生の享樂だ。そんなものが俺達の何處にあるんだ……。
a　默れ。
b　俺は人生にパンを求めたんだ、生存を求めたんだ。そしたら何をくれたと思ふんだ。俺は訴へてやる、俺を生してくれつて、俺を返へせつて……。
a　默れ、默つとれ、そして跳ねてろ、唄つてろ。これが神樣のお好きなことなのだ。俺の哀れな人生の勞働者に。神樣と云ふ奴が何をくれると思ふんだ。撫てて、欺して、絞り上げて、それから蹴飛ばすんだ。それが神樣のお情けと云ふ奴だ。
b　否、俺はもう一度訴へる。俺を返せつて訴へる。
a　何だ慄えてるのか、泣いてるのか、鹿馬め、恐れるな、涙を見せるな。そんなことをすると世の中は猶ほつけ上るんだ。吼えろ、そして飛べ、人生に跪くことのかはりに、其奴の面に拳固を振上げてやるんだ。
b　俺の力は、それに復讐するだけの可能性がない。
a　馬鹿な！　光と闇と、色と響との交響樂の眞只中に飛び込め。其處に人生の詩があるのだ、人生の美がある

のだ。力は自然と其處から出てくる。お前の机上に積み上げた書物を引裂け、そして薄暗い靜かな世間離れした一室で、寄木細工のやうにこね上げたお前の哲學を蹂躙しろ。そんなものは俺達の人生には不必要だ。

b ああ……(苦し氣に呻吟く)。

a (烈しく踊り狂ひながら)唄つてろ、跳ねてろ、この世の中は如何なるものか。お前が幾度神樣に訴へたつて、空腹は充滿くなりつこはないよ。

沈默。瞳を瞶めあつた二人。長い恐ろしい沈默……軈てBは猛然と立上る。

b 俺は今一度神樣に訴へやう、そして光明を求めやう。ぢや俺は、も一度職を求めに出かけるよ。

a ああ幾度でも行つて來な。しかし、それは幾度出なほしても、やはり空手で此處へ歸つて來るだけだ。俺は一人になつても、神樣に叛逆する、復讐する、滅ぼさずに置くものか………。

Bは出て行く。Aは踊り狂ひ唄ひ續ける。闇、次第に濃ぎ室内よりは、騷がしく不安なる音絶間もなく響く。

それより程經たる後、暗き壁の下にAとBとの二人。

a Bはどうしたらう。ほんとに何處かへ行つたのだなあ(と次第に石壁の下に近寄る)。

b う、う、う……(と微かに呻吟く)。

a や、此處に居たのか。どうしたんだ。何時歸つたのだ。

b (微かに眼を開いて、Aを見上げながら)うむ、Aか。

a 如何したんだ(とBを抱き起こす)。

b それを見ろ、俺はそれを越えやうと思つたんだ。越されると思つたんだ。

a 何だつてそんな事をしたんだ。

b 見ろ、壁の向ふには光明がある、そして不思議な音樂も聞える。彼方には俺の求めてゐる眞實の俺があるんだ。俺は其處へ行つて見たかつたのだ。

a うむ。

b それで俺はこの壁を攀ぢ登らうと思つたんだ。ところが壁には手掛りになる裂目一つすら無い嚴重なんだ。俺は落膽（がつかり）して、一時は到底駄目だと斷念めたけれどまた思ひなほして、俺はその壁の前へ歩いて行つて、やいこの馬鹿野郎、俺の言ふことを承知しなきや、土臺石を掘り返へすぞつて脅かしたのだけれど、壁の奴びくともないんだ、啞のやうに默つて白痴のやうに突立つてゐるんだ。俺は突然（いきなり）一つどしんと打突かつて行つたが、やはりびくともしない。二度三度………五度も六度も終には夢中になつて壁に打突かつたけれど、やはり壁は平氣なんだ。まるで食ひ肥つて神經の鈍くなつた金持か、四つん這ひで泥の中を這ひ廻つてゐるブルジョア共のやうに………。

a ハハハ………それから。

b それでも俺は斷念めなかつた。疲れて身體が動けなくなると、今度は大聲で怒鳴つてやつた。路を開けろ、路を開けろつて………。

a そしたら………。

b やはり默つてゐるんだ。頑固で、馬鹿で耳も口もない廢人のやうに………ああ壁の向ふには新しい世界が出來かかつてゐるのに、俺は凝つとして此處に居なきやならんのだ。

a ハハハ………昔の豫言者の書に恁う云つてあるな。叩けよ、さらば開かれん。求めよ、さらば與へられん、とな。それぢや何時開かれるんだ。

b 彼方では不思議なものが生れるんだ。それは眞理だ、奇蹟だ。

a 何つ、奇蹟だつて。奇蹟つて何だ、俺達はそれ以上に權威を持つてゐる人間だ。俺達の前に奇蹟は無い。そんなブルジョワの口眞似をするな。

b 俺はこの人生を統一して行く「或物」が欲しい。太陽が數多くの恒星を索くやうに、俺達の生活を統一に整理

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

a　して行くものが欲しい。

b　(胸をうつて)此處にある、(また頭を指して)此處にもある。俺達は一切だ、俺達の前に最早や神の必要は無い。

a　こころで俺達は何をしたら、いいのだらう。

b　壁を壊せ、神を殺せ。

a　さうだ、〳〵。

b　さあ唄はう。

a　よし………。

A　こB　こ合唱。

　　ああ〇〇〇近づけり
　　吾等の前に近づけり
　　……………………
　　吾等は寒く飢えたるも
　　なほ團結の力あり……

b　(突然不可思議な幻影に襲はれて)太陽だ、太陽だ。プロレタリア萬歳！

a　(ほこんご一塊の石かなんぞのやうに身體を壁に突當てながら)飛べつ、今だ。

b　同じく壁に向つて摑みかゝりがら)飛べつ、飛べつ、今だ。

a　プロレタリア！　萬歳！　太陽が昇るんだ、太陽が昇るんだ。飛べ、〇〇。

b　う、う、う……(こ物凄く呻吟きて血に塗れて倒る)。

a　(Bを抱き起して)見ろ、俺の手を染めたこの血の始末は、こうして與れるんだ。血に染つた俺の手は、もう

ブルジョア共の黄金世界の夢て拭き消すことは出來ないぞ。政治家や金持共が道樂でやる慈善事業や温情主義て洗ひ落すことも出來ないぞ。ああ暗黑の支配者、地上の帝王、悪魔よ目を覺せ。そして西から東から北から南から、汝の唄と舞蹈とて、この地球の上に建てられたブルジョア文化の一切を蹈み躙つてくれ……。

b （血塗れになりながら、息も絶々に唄ふ）ああ〇〇〇づけり、吾等が前に………。

a （それに合せて血塗れの兩手を頭上に高く振り動かせながら）吾等の前に近づけり、吾等は寒く飢えたるも……。

この聲に應ずるやうに、遠くから群衆が叫ぶ「プロレタリア萬歳」の聲響き來たる。地球を擧げて共通の、プロレタリアの祝祭よ……と五月祭の唄も聞ゆ。

立派なる洋服に身を包み、金縁眼鏡、金時計、金指輪に飾り立てた、だぶだぶと脂肪ぶとりの老年紳士風の者二人

甲 たい、おい。またこの煉瓦壁のなかで唄ひ出した。

乙 うむ。何だか變竹林なことを喋つてら。

甲 見ろ、見ろ、踊つてるぜ。

乙 あつ、壁に頭を打突けやがつた。

甲 こりや大變だ、狂人だ、狂人だ。

乙 何て云ふ馬鹿だ、青二才の小僧つ子の癖をして……。

甲 狂人はしやうの無いものさ。自分で自分を殺してることを知らないのだからな。

乙 やつ、遂に頭を破つた。大變な血だ。見ろ、見ろ、素敵な血だ。

甲 いよう、これは豪氣だ。こんな藝當は馬鹿か狂人でなくちや出來ない。

乙 時にそろ／＼急がうぢやないか、飯に遲くれるからさ。生つ嚙りの本讀みの小僧どもが、何をぶん／＼唸らう

さ、襤褸を着た小汚ない奴等が、それに煽動せられて、どんなに騒がうと高の知れたものさ、其奴等に猺(十圓札)の十枚も見せてみろ直ぐ尻尾を振つてついて來るから……

甲 (ぶるぶる……つと嚏をしながら)さあ急がうかな、俺は風邪をひいたやうだ。早くうまい酒を呑むこしやう。

乙 そのこと、そのこと。其處でひとつ此間から儲口の相談をするのさ。

甲 いや金儲けは、あんたに限るて。

乙 金持になるには、義理人情はいらんからなあ……(と河馬の樣な口を開けて笑ふ)。

甲 それを當節流行の温情主義で、勞働者どもを欺すのだから、あんたの手腕は完く凄いよ。

乙 欺すのが悪いんぢやない、欺される方が馬鹿だからさ。

甲 それは俺も同感、同感。

勞働祭の歌聲、次第に高く次第に近く、この紳士達の後方に迫つて來る。その群衆の歌聲に交つて、始めは絶々に微かに響いて居た革命歌も今は鮮明に力強く聞えて來る。二人の紳士は、それに慴えたやうに早足となる。

乙 ぺ、ぺ、、狂人どもが唄つてゐやがる。

甲 忌々しい畜生め。金持のお蔭で生命を繋いで居やがる貧乏人の身分で、俺達に喧嘩を賣るなんて、身の程知らぬ野郎どもめ……(と云ひながら顔色蒼くなる)

乙 早く行かう。

甲 さうだ、早く行かう。

遁げるやうに駈けて行く後方からは、蓬頭垢面、淺黄服を着た人々の一團や、黑の詰襟服や破袴を着けた青年達の群が、怒濤の押寄せるやうに、口々に歌ひながら、雪崩をうつて進んで來る。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

歌

見よ黑雲は空を飛び
疾風は地を捲いて吹く。
世界をひたす○○の
ほまれある日は近づけり
吾徒が打ち鳴らす
自由。平等。共產の
○○○の――
……………………

（作者附記）こゝまで書いて來た時に、一代の名宰相と噂さるる反動政治家原敬君が、終日終夜冷たい鐵道線路の傍に立つて常に人生問題社會問題を默々として體驗しつゝあつた白面の一青年中岡轉轍手君の爲めに斃されたとの報知を受けました。商賣柄とて私はこれから直ぐ出動しなければたりません。當分筆は執れませんからこの結末の如何は讀者に於て御隨意につけて下さい。（大正十年十月四日午後八時十五分）

亂舞

井東憲

Ｋ木工場には、十三人の弟子が居た。皆十七八から二十歲くらゐ迄の、働き盛りの若者ばかりであつた。一番の兄弟には、粂造と云ふ無口な反抗家の、二十歲になる青年であつた。

粂造は、自分の苦しい不自由な生活の事を、囚人生活と呼んでゐた。

實際彼らの生活は、囚人のやうなみぢめな生活であつた。――彼等は毎日、午前の六時頃から、午後十二時頃まで、立續けに働らかされた。これでやつと仕事場が片付いたかと思ふと、最早夜中の一時であつた。それから直ぐ勞働の朝が來てゐた。

彼等には、月のうち一日十五日と、一回の定休日があつた、が、然しそれは本當の意味で、籠の鍵を明けられたものではなかつた。と云ふのは、例へ仕事は休んでも、親方が監督に着かなければ、何處へも自由勝手に羽をのばして行く事は、許されなかつたからである。親方の忠次は、此の利己的な壓制の事を自ら辯護して、「俺が斯うやつて皆なをかばうのもた前達に惡い友達を拵らへさせない爲めだ。」とい、やうな事を云つてゐたが、其實は、他の工場の職人なぞと交際して、所謂世間と云ふものを知らせる事を、何より過敏に怖れて居たからであつた。忠次の卑しく頑なになつた、貪欲的な考へ方に依ると、何でも弟子どもは、出來るだけ無智にして置くのが一番都合が宜かつた、働かせるだけ働かせて、搾れるだけ搾つてやるには、何にも知らせないに、越した事はないのだ。兎に角、彼らから、眼も鼻も腦味噌も、皆な、「心の儘に」奪つて仕舞ふのだ。其時、自分は、安心して思ふ通りに血肥が出來る、のだ。で、萬事の事が、一から十迄、壓迫と掠奪でなければいけない。だから何でも、凡のこつは、監獄式か軍隊式でなければ駄目だ。

彼は斯う信じて、此の積りで弟子をこき使つてゐた。丸で永久に使はなければ損な機械か何かのやうに。――この慘酷な生活を、誰より反抗的な乘造が、囚人生活と呪つたのは、何より當り前の言葉である。

所謂仕事場の囚人たちは、親方夫妻及息子夫婦のことを、二階の鬼と呼んでゐた。

それはたつた八段の梯子段を隔つての、二階と下との生活であつたが、二階の鬼と仕事場の囚人との生活は、全て、人間の種類が異るかのやうに、違つて居た。同じ太陽の惠みを享け、同じ空氣を呼吸してゐる、やつぱり

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

倶に同じ人間なのだが、どうして斯うも異ふものかと思はれる程兩者の生活は隔離してゐた。

仕事場の連中は、もう疾うに一仕事仕上げて板屑と鉋屑との中で、脊中の汗を拭き合つてゐる頃、二階の方では今やつと夜が明けたところであつた。そして、下の弟子どもが、極小量な何時も乍らの不味いお菜で晝飯を食ひ終る時分、のそのそと二階から下りて來るのであつた。

二階の鬼どもは、下りて來ると必ず、丸で相談でもして來たかのやうに、四人口をそろへて、弟子どもにやかましい小言を云ふのであつた。弟子どもは、其毎日お極の小言が初まると、皆顏を顰めて、不快で堪らないやうに横を向いてゐた。で、なければ、故意とガタピシ箱や板を叩きつけた。

そして其お極が一段落着くと、鬼どもは二階へ引上げて、さんざつ腹贅澤な熱を吹きながら、甘まさうな匂だけを四人にかゞして飯を食ふのだ。

それから、雜談だ。お客だ。で、夜になると、例の通り回數券を持つて、淺草へ出掛けて行く。(これが自分達の天から惠まれた特權でゞも有るかのやうな平氣な顏付をして。弟子どもの血の汗の生んだ金を持つて。)が、弟子どもは、其傲慢な後姿を、忌々しさうな白眼で睨み付ける切り、不思議とおし默つてゐた。

勿論、腹の底では、泣き出したいやうな屈辱の感じと、燃え上るやうな不平とが、渦を卷いて狂つてゐるのだが、彼等は凝と我慢し合つて、湧き立く憤怒を忍んでゐたのだ。だから二階の鬼が、のこ〳〵遊びに出掛ける時刻になると、弟子どもの顏付は、急に悲しさうに憂欝になつて、だが又、恐ろしく腹立たしさうに歪んで來るのであつた。

冬の初めの或る夜であつた。

二階の鬼が四人とも何處かへ出掛けて行つて了ふと、下の四人どもは待ちかまへてゐたやうに、鍋火鉢を取り出して、ごんごん火を焚きはじめた。火は盛んに燃えた。

彼等はその焚火の周圍へ集つて、二階の鬼ごもの惡口を云ひ合つた。罵詈、怨言、呪咀、不平は、彼等の口を突いて出た。凡ての言葉が、二階の鬼の冷酷こ利我生義を呪ふ、反抗の熱罵であつた。彼等の一言一句は、熱鐵のやうに燒け爛れ、限りない怨恨こ深刻な悲憤に、痛み顫えてゐた。それは常に、虐げられ屈辱された者の、鬱勃こした憤懣の迸りであつた。

焚木は益々くべられた。彼等の醜く昂奮した顏付は、赤銅色に輝いて見えた。

彼等は自分の云ひたいだけの事を云つて仕舞ふこ、黝んだやうに、押し默つて了つた。

彼等は默つたまゝ仲間の顏を覗き込んでゐた。何こなく憂鬱であつた。だが、泣き出したいやうに、腹が立つてゐた。苛立しかつた。彼等は默つて手を揉んだ。――それは何かが爆發しようこしてゐる前の、あのあやし氣な不氣味なしゞまのやうでもあつた。即ち彼等が憂鬱であつたのは、爆發の前の一瞬であつたからである……。

『ええ、こんな物燒ちまへ。ごうせ幾等骨を折つて拵らへたつて、俺達の物になるんぢやねえんだから……。』

突然息苦しい沈默を破つて、兼造が叫んだ　他の弟子ごもは、吃驚したやうに、兄弟子の足元を見詰めた。兼造は先刻拵らへたばかりの抽斗を、思ひ樣足蹴にしてゐた。

鏡臺の抽斗は音を立て乍ら燃え上つた周圍に居た者は、勝鬨のやうに、ドッこ笑つた。がその聲の中には未だ充たされない淋しい空虛が有つた。

『序でに鏡臺もやつちまへッ。』

誰かが力强い聲で怒鳴つた。

『よし。やれ、やれッ、』三四人の若者が應じた。新らしい尺七の鏡臺は、滅茶苦茶に壞されて、投り込まれた。仕事場一面に、新らしい木の燒ける、刺戟的な臭がたゞよつた。

彼等はその、刺戟的な臭氣を嗅いで居るこ、又元のやうに、すかり昂奮して來た。(それは破壞の本能の目醒めであつた。制し切れない、反抗心の迸出であつた。)

『燒いて了へ、皆な燒き拂つて仕舞へ、道具でも板でも工場でも、皆な燒いて了へ。』から云つた破壞的な復歸的な心持に於て、彼等の心理は一致して居た。『燒けッ、燒けッ、滅茶滅茶に破壞して了へ。』と彼等の憤激した心は、絕叫つてゐた。そして彼等は、破壞しずには居られなかつた。心の命令を、餘りに永く蹂み躪つて來た彼等は今こそ、眞實の自分を實行する時が來たのだ。――彼等は、思ひの儘に、反抗しずにはをられなかつた。其處にこそ彼等は自由意思が働いて居るのだ。人間の强烈な意思の力が。どうして無慙に死んで宜い譯があらうか、と云ふ眞理の證明があるのだ。

彼等は、燃え狂ふ火勢と、むせ反る煙の中で、それ自らが一つの、偉大な使命のやうに、品物を叩き割り盛んに投り返んだ。

火勢は急に、あほり立てられて惡魔の舌のやうに物凄く延びて行つた。パリ、、と云ふ爆音が、天井のあたりでした。

火は、たうとう、天井へ廣がつて仕舞つたのであつた。

天井へ燃え、廣がつた火は、此度は又新らたな火勢で、土間に積み重てある板に飛び移つて行つた。と、家中て眞黑な煙に包まれて仕舞つた、その中で板や壁が倒れる度びに、パッパッと眞赤な焰がくるめく………。

『これや大變だぞッ。』と、煙の渦の中で、誰かゞ顫え聲で叫んだ。

『馬鹿ッ。思び切つてやれ、やれ。』

粂造がその弱音を叩きのめすやうに、怒鳴つた。粂造の眼は、もう血走つて狂つて居た。

『かまふ事あねへ、やるぞッ――』

と、二三人が應じた。そして、何か重い物のを叩ぎつけた。

その裡に火は、二階の鬼部屋へ、すさまじい勢で、めろめろと、甞め廣がつて行つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それを眺めるこ、弟子ごもの一同は、『ワツ』こ鬨の聲を上げて、獸のやうに怒鳴り合つた。そして彼等は、天井や壁の壞れ下ちる下で、手當り次第に何かを打突けながら、『ワツワツ』と喊聲を上げて、無暗矢鱈に亂舞した。――彼等一同は、熱火こ黑燒と崩壞このなかで、氣違のやうになつて狂ひ廻つた。（一九二一、十二月三日稿）

俺の詩三箇

石渡山達

○

蓄音機に保留せられた肉聲が
ラッパの先から發散する。
文明に虐げられて滅びていつた感情の底に
危くも生き殘つてゐた性の病人の
うめきがかすかによみがへる如く
怯えきつたあほざめた顏に浪をきざむ。
空想は天に飛び去り――
追憶は地にうづまる――
お丶、まざ〴〵こ現實は攻めよせて
道路のすみに息をひそめた男を投げたほした。

○

こんがつた三角の最後の一端よ
何だ。土塊（つちくれ）の紫色にふくれ上つた――
泡立ちの。みにくさ――そこから
お前が生れたこ思ふ奴が――お丶――。あるもんか
い！
（お前は知らないでも、お前はそこから生れたのぢ
やあ無いのだ）
こんがつた三角の最後の一端よ
桃色の寶玉を。
再び、そこに取りもごして
お前こ俺こ生れようこいふのさ。

○

當然の理窟なので。
俺は靜かにされて内省を强制されても、それが

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

眞理だとエホバの神が現れて宣ふとも。
俺の心の底にとゞかふる——
ごみかも知れない…………
けがれた女子の生み捨てたちみごろ——
何でも俺には、かゝはりは無いのだ。
たゞ。たゞ其處から發散する力が
俺の五體をちッ息させうとしてるでは無いのか。
それも解りもしないで、神よ
眞理を說くのは、よしてお吳れよ！
俺は。惡液のほうあつの中から
ばく發された俺の身體から
きの儘のものを見せ付けてやるだけだ。
—(二二・一〇・二二)—

——轟然たる音響に反省せよ
凋落の秋は深く培はれぬ
サラリメンス會社を休み——
勞働者は働くな
將校は號令を止め——
兵隊はその小銃を捨て、——
機關手は運轉を中止して
しづかに黑雲の犇めくを見よ
處女は戀に陶醉し——
姙婦は流產するがいゝ
——新しき戀に生きよ
——享樂のうちに生きよ
然してみな——
黑雲の中に惠まれたる祝福の時を思へ——

地上にてよびかくる言葉

角園春之助

地上を歩くものよ
その足をとゞめて——
おゝすべてのものよ
人間よ
空をかけゆく大鳥の

心のうちに生をはらみ
新しく土地に培かへ――

あけぼの、空は
いま――
新しき太陽の時に祝福されてゐる

プロレタリアートの歌へる

松本淳三

餓にえさまよふ俺の眼に
あゝ、白晝の光りは
ぎらつく

空の高さに
消え入りそうな口のかはきよ
アカシヤの黑い葉かげも
踏むにはあまり
おそろしい

火玉のやうに
飛びかゝる赤い電車の
正面に――
おゝ、ぶつゝかつたか?
はげしい眩暈!

憤怒と呪ひと
すべてを越した
幻滅の
汚い俺の顔と姿を

笑へ！ 笑へ！
蝶々のやうな若い女よ
すれ違ふ。
きざな男の幾群よ――。

街上に立ちて

くれてゆく、雨の街の
ほのぐらい肴屋のかどで
そつと立つてる
やせた女よ——
。。。
まぐろは高價だ
鯛はもつともつと高價だ
一山の小さい鰯か
それとも隅の方の鹽からそうなさけの切身か?

ほづれた髪毛に
しぶく秋雨
胸にかゝえた
青い、汚い風呂敷に
あゝ何を求めて
何をかなしむ?
そつと立つてゐる
やせた女よ
私は貴女を見るにたへない。

雄阿寒おろし

神近市子

叔父はその時丁度歸る仕度をしてゐたさうです。內地から連れて來た若い雇男と二人して苅り集めた萱を二疋の馬につけるやうに束を造りにかゝつて居りました。

太陽はもう釧路の平原の向ふに春つき、あたりの落葉の並木は、一本一本が黄金色の光線を反映して、宛かも

荒野の中の唯一の裝飾で、もあるやうに、神々しく美しく輝いてゐるのでありました。その時叔父が立ち働いてゐたのは北海道の脊髓と云はる、石狩山脈が東に伸びて雄阿寒、雌阿寒の連峰となり南に流れて平野に入らうとするあたりで、その邊はまだ斧鉞の入らない所謂北海道の處女林の幾百年と樹齢を數へる大木が晝まだほの暗く立ち並ぶところでありました。

もうすぐに釣瓶落しにやゞて來る冬の暴虐を豫示するやうに頭の髓迄ズーンと刺せる突風が突然平野を渡つて來て、背後の林にぶつかりました。

『ゴーッー！』と云ふ林の悲鳴が聞えました。

『雄阿寒颪だなっ』叔父はかう呟きました。丁度その途端古い白樺の根元で犬達と走り廻つて戯けてゐた八つと十の男の子が。

『ワーッー！』と云ふ驚愕の聲を上げて叔父の方に驅け出して參りました。四疋の犬は遽にひどしく吠え出して、白樺の木の右手にある下萠えの木の茂みに向つて四疋四樣に戰闘の姿勢をとりました。

叔父は急いで背中の銃を下ろして、犬の後方から叢の中を覗ひました。叔父はオヤヂ（熊）が餌を尋ねてこの邊迄立ち廻つたのだと考へたのでありました。

『怪しい者ではありません。どうかその犬を押へて下さい。』叢の中からかう云ふ青年らしい聲が聞えて來ました。

『あなたは何です。』叔父は犬を制し乍らかう尋ねました。

『……………』叔父の問には答へずに、聲の主は叢の中から叔父の前に姿を現はしました。若い、土方らしい服裝が袖も胴も無殘に裂け破れたものを着て、手や顏や傷だらけで血が滲んでゐましたが、體格の立派な憂欝な表情を持つた青年でありました。

『あなたは何です。』叔父は再びかう訊ねました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『脱走者です。あつちの驗道工事をしてゐるところから逃げて來たのです。かくまつて下さい。お願ひです。』

その男は明るみの中に出ることを恐れるもの〻やうに林の端に立つたま〻、どこか慌しく云ふのでありました。

瞬間、ホンの瞬間のことではあつたさうですが、叔父は人間としての怖しい試錬に逢つたさうです。その男をかくまつてやることについて、叔父自身の覺悟には少しの躊躇することろもなかつたのですが、その結果として起つて來るかも知れない事についての豫想が叔父の心を強く打つたのでありました。叔父は四人の幼い者と愛する妻と父との上を氣遣つたのでありました。それはこの種の脱走者をかくまつた事がこの附近の鐵道工事に從事してゐる下請人達に知れやうものなら叔父は彼等から殘忍で執拗な復讐を覺悟しなくてはならないからでありました。

然し、それはホンの一寸の間のことでした。そこらには別に怪しいと思はれる人の影もなく、あたりの耕地の人々も遠くの方で忙しく立働いてゐる丈けで茲に何事が起つたか氣付きさうにもないことを見極めると、叔父は少し大膽になれました。直ぐに叔父はその青年に命じました。

『少しの間、そこを出て來てはいけませんよ。今そつちに馬を引いて行きますからね。』

一旦その男を助けやうと決心して了ふと、叔父の頭には場合に必要な機智が群るやうに起つて來るのでした。叔父は冷靜な落着を持つて歸る仕度を整へました。

即ち、一旦馬に積みかけた枯草の束を今一度下ろし、その馬の背に若者をのせました。そしてどの方角からも中にゐる人が見えないやうに、一杯枯草を積み上げました。かうして仕度が出來ると時を移さず、二人の小供は雇男が追小馬の上に載せ、四疋の犬に前後を警戒させて、林を越え川を渉り乍ら家路に向つたのでありました。

一行が家につくと、叔父の一家には異常な緊張と沈默とが家族の者を支配しました。物に辨へのない極く幼い者の外には、高い聲を立てるものもありません。誰も彼も一人の人の生命――いや自分達の生命に迄影響を及ほ

ずかも知れない事件の前に立つて、極度の興奮の爲めに低い聲で話したのでありました。

食事がすむと、凡ての家族が中の間に集りました。かうした片邊な土地に暮す家族にとつては、夕食後の團欒は可成り大きな樂しみの一です。平生でも大抵の夜は家族がそこに集つて一時間なり二時間なりの時間が費されるのでありましたが、特にその夜は家族の一人々々の心にそこに相集まる事によつて一の大きな力と信頼とを得やうとする、無意識の希望が燃えてゐるのでありました。叔父の養親に當る老人は、叔母を促して中の間に切つてある爐に盛んに薪を燃させました。

『かう云ふ時には火をドン／＼燃すことだ。火の性は極く陽氣なもので、魔を拂ふからな。』老人は叔母の手から赤ん坊をとり乍らかう云ひました。

叔父は子供等に見守られ乍ら、セツセと武器の手入をしました。二挺の銃、一挺の短銃。それに短刀の類がありました。特にその中の短銃は叔父が官途に愛想をつかして北海道に移住した時、親しい軍人から送られたもので、ブラウニング式の優秀な武器でありました。

武器の手入れが了ると、叔父も老人も何となく慌しかつた心が少し落着くやうに感じるのでありました。武器は老人が短銃を用ひ、叔父と雇男とが銃を使用する事に相談で極りました。老人は短刀の一つをとつて拔き放ち、刃先を改めて懷中に呑みました。その事によつて老人は遽に昔の元氣を復活し、急に一寸ほども背丈が伸びたやうで周圍の者には頼もしく感じられたさうです。

日がスツカリ暮れて了ふと、叔父は老人と相談の結果、氣の利いた雇男の與作を窃かに裏口から送り出しました。

鐵砲を持つて行くか？無い方がよいかも知れないな。石川さんにも松田さんにも、明後日あたり町に行きますから、お買物でもありましたらさう云つて下さいつて、さう云つたが好いだらう。』叔父はかう意を含めて與作を送り出しました。これは偵察の爲めでありました。使に托して、今夜附近の耕地に有る家に變つた人の出入は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なかつたかそれを見究めさせ、序に脱走者についての風評なども探らせやうとする叔父の心算でありました。與作の保護には、叔父は敏捷なグレイホンドを一疋伴はせました。三歳になつたばかりの漆黒の獵犬は、神の如くに聽き風の如くに疾驅する、この平原の帝王でありました。與作は棍棒を打ち振つてエドワードを指揮しながら、深い闇の中に消えて行きました。

與作を送り出すと、叔父は庭場に下りて犬を一疋々々順に撫で乍ら、

『皆しづかりしろよ、な。』から云ひ乍ら。叔父は平生犬が好きで、この邊としても可成りに多數飼つてゐる方でしたが、扨かうして意外な事に出逢ふて見ると、犬を持つてゐる爲めに非常に心丈夫に感ずるのでありました。

七時、八時、九時と長い秋の夜も段々更けて行きました。けれど子供達に至る迄仲々床に入る事はいたしません。皆がいつ迄も中の間で一緒に聲を潛めて話し乍ら與作が歸るのを待ちました。その間は長いことでありました。

とう〳〵犬が吽り出しました。續いて二聲三聲彼等は聲高く吠え立てましたが、戶外からは暗を縫ふて聞易慣れた與作の口笛が聞えて來ました。更に土を踏む草履の足音も聞えて來ました。遙かに後れたエドワードを呼び立てゝゐるものと見えて、高く低いその口笛が平原を向ふに水のやうに流れました。晴々としたその元氣な口笛を聞いてゐると、何事の異常もなかつたことが想像されて、感じ易い叔母は淚さへ浮べてゐるのでありました。大人は誰れも安心の吐息をつきました。

『與作かい?』叔父は待ち兼ねて、與作がまだ戶を叩かぬうちに戶の前に立ちました。

『只今歸りました。遲なはりました。』與作の若い聲が戶外で答へました。

叔父は戶を細目にあけて與作とエドワードとを家に入れました。

『寒かつたゞらう。もつと火の方によりな。』

『與作、こつちにお出て、今お茶をあけるからね。』

『與作に僕のビスケットをやりませう。』叔父の長男が突然分けて貰つてゐたビスケットを與作の方に差出しました。今夜は誰も彼も、人を愛しても愛しても愛し足りないやうな不思議に劇しい魂の目覺めを覺めてゐるのでありました。

『變りはないのだらう。』叔父は與作が落ちつくをまつて訊ねました。

『何にも變りはありません。向ふの耕地も半分ほど歩いで見ましたが、變つた樣子もありません。エドワードは野鼠ばかり追つかけて戯け切つて居ります。人つ子一人通ることではありません。』

『石川さんや松田さんは?』

『皆寄つて來ました。念の爲め林さんや上田さんにも寄つて見ましたが、話も出やしません。上田さんではこつちから脱走者があつたさうですと云ひましたら、へえつて驚いてゐなすつたづけ。』與作の話を聞いてゐると叔父はよろこびと安堵との爲めに與作の手を押し頂きたいと思ふほどでありました。一旦決心して脱走者をかくまいはしたものゝ、萬一それが發見されたら? その時の危險の豫想が可愛想にも叔父の心を深く暗くしたのでありました。

『ではあの人を茲に連れて來ても好いでせうね。』叔父は老人にかう相談しました。脱走者は萬一の時を慮つて一寸目立たないところにある枯草の小屋にかくまつてあつたのでありました。

『好いだらうね。然し要愼の爲めにはエドワードと外にブチでも外に放しといたが好いだらう。』どこ迄も用心深い老人がかう發議しました。叔父が二疋の犬を賺して外に放つてゐるうちに與作に導かれて脱走者が入つて參りまりました。

『さあ、こちはお入りなさい。小屋は寒かつたでせう。』叔父はかう聲をかけ乍ら、始めて少し落着いた氣持をもつてその人を眺めたのでした。そして氣の毒な脱走者が今極度のよろこびと興奮との爲めに、木の葉のやうに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

身體を慄はせてゐることに氣つきました。

北海道の中でもまだ開けない北部北海道には、一體に貧しい移住民對手の商人の集團が、海岸や海つゞきの低地などに相集つて造へた小さな部落がそこゝに散在します。かうした部落の海岸に四月末の解氷期から九月頃迄の間に、突然舷腹を眞赤に塗つた奇怪な小型の汽船が汽笛を鳴らして入つて來ることがございます。汽船と云ふものが入つたことのない土地でありますから、始めのうちは移住民達は走り出てそれを見に集つたものですすると汽船からは二百、三百と云ふ數の樣々の服裝をした貧しさうな人達が下ろされて、雪の上を素足でブル〳〵震へ乍ら(或者は浴衣がけのまゝで)武裝した人相の悪い少數の人達にどなられ乍ら上陸いたします。

この人達は誘拐者によつて凡ゆる手段で誘拐されて、北部北海道の鐵道工事に働く爲めに送られて來た氣の毒な人達であります。この人達はそこに着くとその儘、鐵の棒をはめた、唯だ一つしか入口のない小屋に入れられて、外からピーンと錠をかけられて了ふのでございます。そして翌日から朝は夜明けから小屋を引出されてその附近に行はれてゐる鐵道の工事に追ひ使はれ、粗末な、犬でも顔をそむけるやうな食物を宛がはれ、日暮れには又火も充分な夜の道具もないその小屋に、家畜でさへこんなにはあしらはれはしないと云ふ樣にして投げ込まれるのであります。實際彼等は家畜以上には見られてゐない丈けでなく、その待遇の不條理と殘酷とを意識すると云ふ理由にならない理由の爲めに、この地方の奴隷所有者から、あらゆる悪意と敵意とをもつて待遇されてゐるのであります。そして反抗と逃走とを防ぐ爲めにはピストルがあり棍棒があり笞があり、更に死でさへも平氣で使用されるのでありました。

彼等には日給と云ふものは定められてありますけれど、不當に高價な食料や草鞋代などに貪り取られるので、實際には十錢の金も手にしたことはないのであります。そして粗食と過勞とで身體のつゞく限り追ひ使はれ、一旦肉體が衰へると「植民地の暴君」等の爲めに軌道下に生埋になつたり高い崖から不意に突落されたりして、その生命をなくするのでありました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

こんな話が一時傳はつたことがありました。落石の測候所に、一人の脱走者が投じて來たことがありました。脱走者は東京で醫學を修業してゐたのですが學資に窮するところから甘言に乘ぜられて植民地の誘拐者の毒手に陷つたのでありました。その地に着いた學生は。勞働に慣れない爲めに半月もすると兩肩をスッカリ痛めて了ひました。けれど鬼のやうな奴隷所有者達は休息の爲めには寸暇も與へません。學生は破れて石榴のやうになつた肉の上に擔ひ棒をかついで土を運ばなくてはなりません。死ぬほどの苦しみに堪へかねて、彼は死を賭して逃れ測候所に投じたのでありました。

翌日になると、使用者達は雪の上の足跡を辿つて來て測候所に脱走者の引渡しを要求しました。所長は涙をのんで脱走者を彼等の手に返さなくてはなりませんでした。以前同じやうな出來事の爲めに、『生命知らず』と稱する無頼漢にとり卷かれ、脱走者をかくまつた所員は遂に彼等の毒手に斃れたのでありました。

所長は脱走者に事情を告げました。悄然として死の宣告を聞いた學生は、もう運命の前に反抗しようと云ふ氣力も餘してはゐない風でありました。

『あなたもこゝにゐられる他の人も少しも恨みには思ひません。然し歸つて行つても私はどうせ殺されるのです。私は何度もそんな場合を目撃したのですから、それよりもどうか私をこゝで死せて下さい』さう云つて彼は所長の卓上に並べてあつた研究用のストリキネーを仰いでそこに倒れて了つたのでありました。

叔父の家では自分達の家に投じて來た若者も、同じ鐵道工事の場所から脱して來たのだとは、一見して誰も推測してゐたのでありました。叔父は若者の興奮の樣子を見ると尙更に心を搏たれて更につゞいてかう云ひかけるのでありました。

『今近所をこの人に見せたけれど、別に怪しい風もないから安心しなさい。君は實に運が强いのですよ。もつとこつちに來て茶でもおあがんなさい。』

叔父は今始めて燈火の下で落着いて脱走者を觀察することが出來ました。疲勞と睡眠の不足との爲めに瘠せや

つれては居りましたが、骨格の立派な、顔立に温和な落着をもつた好ましい若者でありました。幾日も森林の間をさまよつてゐたものと見えて、着物は無殘に破れ裂け、手足を痛めてゐるやうすでしたが、然もその若々しい元氣に滿ちた氣性は少しもたじろいてはゐないやうすでありました。家族の者は凡てそれをうれしく見たことでありました。

『お腹は減りませんか。ご飯を仕度させませうか。』叔父がかう訊ねました。

『遠慮は少しもいりませんからね、氣をユックリと落着けてこゝに二三日おいでなさい。その間に大抵樣子が分るでせうから。』老人も側からかう口を出しました。

『君、明日もそれから明後日も僕のところに泊り給へ。』古い繪本などを展げてみてゐた次男が、脫走者の方を振り返り乍らかう云ひました。皆がそれに笑ひ出しました。

脫走者は死ぬ思をして虎口を脫して來てこゝで思ひもかけない一家の者から暖い待遇をうけて、他で見るのもいぢらしいほど喜んで、興奮の餘り一言も口には出せないでありました。漸うの思ひで、

『今後生きてゐる限り、今日の御好意は忘れません。』と云ふ意味の感謝を口にしたほどでありました。

その一時的の發作が靜まるのを待つて、叔父は又訊ねました。

『あなたは何歲になられたのです。』

『廿四になりました。』

『東京ですか。そして又どうしてこの恐しい北海道の土方などになられたのです。この邊では、鐵道のレールは下に人を埋めなくては軋ると云ふ位多くの人が惡辣な下受人達の犧牲になつて死んで、殆ど生埋同然の目に逢つてゐるのです。こんな怕ろしいところにどうして來たんです。』

『それをチッとも知らずに來たのです、』脫走者は今更に生命を脅されてもするやうに、身慄ひを始めて暫時止めませんでした。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

―四月の事でした。東京で少し失敗つたことがあつて、どこか地方にでも暫時行つて歸り度いと考へてゐると北海道行人夫が要ると云ふ廣告を見ましたもので、いろ〳〵話を聞くと甘い話なので、慣れないことは止したが好いと止めた人があつたのを無理にやつて來たのです。五月に室蘭について、あすこから汽船で來ました。』

『例の船腹を赤く塗つた人喰船でせう、』老人は靜かに點頭きました。

『あれをこの地方では人喰船と云つてゐますよ。あの船で一遍この沖を渡つて來られると、もう諸君に滅多には生きて內地に歸られることは出來ないのです。一體それと云ふのが………

『お祖父さん、僕いつかあの船を見たでせう。』今度は長男が古い晝本の中から首をつき出して叫びました。

『さうだ、あれもこの春先であつたのう。かうと、あれは馬鈴薯を下ろす頃だつたから矢張り五月だつたかな。やあ因緣不可思議の事だ、わし達はあなたが送られる時、その船がこの沖を通つて行くのを見ましたよ。その時も白晝公然と極惡事が營まれるのが不思議に感じたことでしたが、あなたの運命がまだ盛んでかうして無事に脫れて來られたのだ。そして我々のこころに投じて來られたのも深い因緣だ。打くつろいで身體を養つてこの先の旅にお立ちない。』老人が不思議なめぐり合せに興奮して語れば、脫走者も更に打寬いで『送られた』以後の事情をボツ〳〵と物語るのでありました。

彼の一行が上げられたのは、型通りの僻村の部落でした。そこから二里ばかり步いて行つてバラック式の小屋に入れられ、翌日から十三時間からの不斷の勞働に就かされたのでありました。室蘭以後は待遇が變つたことによつてうす〳〵感づいてゐた怖しい運命が、今目の前に形になつた現はれたのを見ると、犧牲者達は二日ばかりは飯に手を出す者はなかつた位でありました。そして一度は二人一度は三人逃げ出さうとして失敗して、怖しい殺され樣をして死にました。それ以來、それ迄いくらか希望をもつて樂觀してゐた者も、パタッと希望を捨てて了ひました。

『そして諦めた云ふのか自暴になつたといふのか、皆だまつて働いてゐます。』かう云ふと、その男は又劇しく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

涙を流しました。聞いてゐた家族の者は、言葉の返しやうがないのでありました。皆が危險を冒してその男をかくまつたことを、今では替へ難い幸福にこそ思へ、ツイ少しさつき迄、いくらか當惑した不安な感をもつてゐたのは今ではもう跡もないのでありました。

『そしてあなたはどうして脫走ができたのです。よく大膽にやれましたね。』叔父が最後に尋ねた事は家族の者が最初から聞きたがつてゐたところでした。ヒソ／＼と話してゐた者も話を止めて了つて、皆が一の耳、一の眼になつて、脫走者の方を向きました。

戶外では又雄阿寒颪がひどく荒れました。エドワードが誘はれたやうに遠吠に吠えました。

『ホンの一寸した思付が役に立つたのです。私共は――連が一人あつたのですが、山に逃げ込むと直ぐに樹に登つて了つたのです。そして一晝夜その儘動かずにゐたのです。奴等はそれに氣が付かないで、私共が村に出るか鐵道に乘るかするだらうと思つて、飮食店だとか停車場だとかばかり警戒してゐるのでせう。ホンの一寸の氣轉だつたのですが、かうしてこゝ迄落のびたのです。』かう冒頭して、彼はその時のことをポツリ／＼話しました。

彼とその連とは五日ほど前の夕方、一寸した隙を見たので運んでゐた土をそこに投り出して山を目がけて逃げ出したのでありました。併し附いてゐた監督がそれに氣付いたのは大して遲くはなかつたと見えて、廿間も走つたかと思ふうちに、彼等の後方でピストルの音を聞きました。そして十人ばかりの者がバラ／＼と後を追かけ參りました。

然し幸ひなことに、山に入ると間なく日がドップリと暮れて了ひました。追手の者も事情に慣れない脫走者は山中で熊に襲はれるか、幸に遁れても一週間か十日のうちに鐵道のある方に立ち廻つて沿線に警戒してゐる手先の者に捕つて送り歸されるが常なので、強いては追はなかつたと見えて、近づいて來た樣子もありませんでした。二人は直ぐに手頃の樹に登つて了ひました。

そして二晝夜をその儘樹の上で暮し二日目の夕方樹を下りて、仕事場の側に一週間も前から準備して盜んで置

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いた着物と辨當に南瓜を固めて入れて置いたバケツとを窃にとり出しました。そして服裝とた腹とを造へて網走の方角と思はれる方に歩き出しました。』

『そして連はどうしたのです。追手にでも逢つたのですか。』叔父は慌しく再び尋ねました。脫走者は始めていくらか微笑しました。

『ところが今朝でした。咽喉が乾いて仕方がないので、連の者を置いて谷に水を呑みに出かけたのです。すると方角を失つて、どうしたも以前のところに出られないのです。マゴ〳〵してゐるうちに耕地が見えましたので、危險だとは思つたが出て見たのです。脫走者はそこに來ると何とも云へない表情をして急に話を切りました。彼は又今更に自分の運の盡きなかつたことを寧ろ不思議として既往と今とを思ひ較べてゐる樣子でありました。

『連の人も食物を充分に持つて居られたのなら、或は逃げ了せられるでせう。あなたももう大抵大丈夫です。然しまだ危險區域を出ては居られません。こゝから南の方に四里ばかりあるところにも矢張り鐵道工事をやつてゐるますが、奴等はどうも連絡をもつてゐるらしいから油斷はできません。極く秘密にこゝで二三日身體を造へて釧路に御出なさい。あすこに私の懇意な役人で信用できる人があるから、あすこからどうかして船ででも內地の方に行かれる事に取計つて貰ひませう。』

そしてその夜は脫走者は久し振に暖かい床の中で故鄕の夢を見乍ら眠つたのでした。時計が二時を打つと家族の者も始めて安心して床に就きました。

『脫走者は三日ほど叔父の家に止まつて四日目の朝早く充分の食料をつけて出立しました。彼は鐵道の沿線をさけて、半分山道を辿つて釧路に出ようとするのでした。』

老人が養老の爲めの蓄財の中から旅費にも餘る丈けの金額を割いて送りました。叔父は若い頃着古した背廣と外套とを送つて、若者の服裝をスッカリ替へさせました。黎明の薄光の中を雇男に送られて振返り勝に行く若者

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を見送つた時、叔父の一家の者は口にも言葉にも云ひ現せない幸福と勝利の感を經驗したのでありました。生命の危險をさへ冒して他人を愛した時、愛は始めて劇しく燃えたのでありました。叔父はよろこびの餘り、老人のを手取り子供達を胸にかい抱きました………………

× × ×

久し振で買物その他の用向の爲めに上京した叔父がこの話を私にいたしました。が、私には到底それは事實だとは信じられませんでした。

『そんな事をいつか亞米利加人が移住時代の事を書いたもので讀んだやうには思ふけれど、それがこの日本の而も北海道のやうに内地同樣に考へられてゐるところで行はれてゐようとは私には一寸信じられませんね。』私は叔父がどの點からでもそんな戯談を云ふ人ではないとは知つてゐたのですが、それでもどうもその儘には受取れませんでした。すると叔父も大してそれを氣にする風もなくてかう云ふのでした。

『いや、その方が眞個だよ。殊に東京のやうに警察權が好い意味にも盛んに使用されて、警察力の威力を爲政者が見得にしてゐるところでは、そんな事實は想像できないのが却つて尤もだ。けれど想像できるにしろ出來ないにしろ事實は事實なんだよ。維新以來急激に輸入された歐洲文明が今頃北海道あたり迄浸潤しようとしてあの混雜をやつてゐるのだ。

僕等はまるで無政府無警察で暮してゐるのだ。實際三里に一人、五里に一人ゐる巡査が北海道あたりに流れて來る『生命知らず』の人達を相手に何が出來るものかね。而も名義丈は立派に警察があつて生命と財産とを保護してゐることになつてゐるから、移住民同志で相互扶助的な團體を造へてその團體力でその種の惡事を牽制すると云ふこともできないのだ。』叔父はかう云つて何かワク〳〵溜息をついて居りましたが、更に又かう申しました。

『俺はどうもこの近代文明に氣に喰はないところがあると考へてゐたが、この頃になつてヤツとそのどこに缺陷があるかといふことが分つて來た。人の生命を淺草紙でも使ふやうに粗雜に扱つて平氣でゐられるのは矢張り

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

近代文明の悪い感化の一だよ。その點から云へば中世紀文明はその要素がまだ精神的のものであつた丈け、まだその感化なども近代文明ほどに毒々しくはなかつたやうだ。丁度戰爭の殘虐が增した程度に他の方面でも物質文明は多數の人間を器械視し同時に虐待してゐる。ヒヨツとしたら俺達はもつと野蠻で非文明であつて好いのかも知れないよ。』

そこで思ひ出すが、何かで讀んだ事がある。メキシコは歐羅巴人が始めて侵入した時は實に不思議な文明を樂しんでゐた相だよ。土民は富の程度が大抵平均して、住居なども同じやうに庭園を抱へて、淸潔な氣持のよいものであつたさうだ。ところで歐羅巴の文明が這入つて行くとどうだ。今のあの混沌とした有樣だ。實際俺は今の人達が文明が智識だと騷いでゐるものには大して人間の生活を高めるものはないと見てゐるよ。實際政治はどうだ、敎育はどうだ、産業はどうだ、改革を要することばかりではないか。俺は近代文明は決して支持するに及はないと堅く信仰を立てゝゐるよ。』

私はいつも向ふ見ずで、時代に餘り流行らないことを云つて平氣なこの叔父が大好きでムいます。私はこの小說を讀んで下さる皆さんにも私のやうにこんな叔父がおありになれば好いと考へます。…………

—(一九二一・十一月九日)—

飢ゑたるロシアのために

一無名氏が種蒔き社に金子を送られて、それを飢えたロシアの民衆のために送るやうとの依賴がありました。『種蒔く人』は一時それをお預りすることにしました。そして、それを一纏にして勞働同情會の方へ拂込みます。飢ゑたる仲間にほんとうに同情のある方はどうか此の擧を助けて下さい。

基金　種蒔き社　拾圓、無名氏　一圓、山口隆三　三十錢、計　拾壹圓參拾錢

批評

美術評家に對するから笑ひ一束

畫家は文字の上へ物を言はない。小さい不平は聽流してゐる。大きな不平は仕事の上で物を言ふ。仕事の上に殺言されたら之の時は拳に固めて物を言ふ。

世の中の人間は大概が無駄口許りたゝいてゐる。あつてもなくつてもいゝことなんだ。大眼が見てゐるとそれはおかしい。殊に仕事の上でものを言ふ畫家に對して、文字の上で何も言はないことを物の言へないこと決めてかゝつていつの世までもへまな獨斷理論を並べたてゝかゝる美術批評家なるものを見るとついくすぐつたくなる。くすぐつたくなつても畫家等は決して文字の上へ踊り出でない。それ無駄な美術評は勿論讀流しに屬する。讀流しの度に畫家は獨りで皮肉な頰笑を浮ゞてゐる。その頰笑に畫家はたつしやな言葉を向ける。それは兄等に讀めない。讀得ないからこそいつの世までも大誤駄言を悠々並べたてゝゐらるゝのだ。勿論他分野の論鋒は此處迄の浸入を避けてゐるし、そこで非文字の此處避難所を特殊國といい氣に早合點した彼等は、畫家を統卒した聖者の如き態度で、彼等自身の特殊哲學をもつて易々おさまり返つてある。これの畫家ば默殺の寛容でゐる。けれ共畫家は實在といふ事實の爲にまだ忠實にもそれら紙の上は一々見てゐる。見ては變りないそれを又か又かと頰笑に流し行く。に無言の此處へおせつかいにもまだ『畫家は仕事の外へ物を言ふのではない』と、御丁寧さは笑止の至りだ、まだそれは善い。

人生の底へ靜かに沈澱してゐる美はそこに總ての眞理と融合してゐる。

兄等がまだ美術の分野で美術評の上にゐる時それは頰笑流しにし了せる。が無用にも欲深々と此の逃避國に居ながらも、一歩追はれた分野へつゝき出た時それは實に醜い、美の捧持者畫家は常に默つて見てゐるなが

らも、生活眞理に逆ふ醜體を見ては餘りに間近い底の冒瀆には此時腹立たしさを感ずる。けれ共此處にも未だ〳〵一方の畫家の寛太さが履行されるから安泰だ。一方拳で物言はねばならない畫家にとつても寸暇を割くにては取るに足らない末流で物言ふにしてはも少しそれの大元があらねばならないから。蓋し彼等が無意識的でありながらも獨創と思ひつ事が、嚴然たる現在の支配階級の反映そのものであるからなのである。畫家は背向けて仕事をしてゐる。拳で物言ふ時はたつた一言。それは目標ついてる嚴肅事だ。間近の而し小さいくすぐつたさ、物言はない仲間は未だ口を開けて笑はない。けれ共無理にこの畫家等の中の粗忽者となつて無感激な口をあけて僕がから笑ひでもしてみよう。

＊

『社會運動に對する美術家の立場』と題して第七卷第六號の中央美術に園頼三氏が卷頭論文を書いてゐられた。一寸月經た古いものであるが。それもその當時頬笑流しに了つてゐたもので、それを最近の早稻田文學の本間久雄氏が『美術と民衆生活』や、讀賣新聞紙にあつた張紅々氏の『繪による反省』等によつて何氣なしに蒸返され、それらえ忘れゐるいくつかをも一括して、それは單に頬笑み流しにし得べき程、默殺を許されえないそれだけに美術批評家に對して言はねばならない或ものゝ考察對象となり得たから、頬笑流しにある駄評家は間題の外として僕の力拔けた言葉を一寸並べたくなつた。よつて形こそ園氏を借れ、是は總ての同範疇なる同内容者に對して此機會に言ひたいことなのである。

園氏はまづ、藝術家とは人間で、社會改造家とは物である、といふような最初から得手勝手に二大別した先天的々な假定の人間を作つて置いてから論を運んでゐらるゝ。畫家にとつては煙つたい有難い三拜九拜の殿堂である。けれ共社會改造家は眞事にもつて見すぼらしいなりはひの涯である。よつて此處に社會改造家なるものは。瞬間にして何の苦もなく簡單にセッチンの隔つてへ打のめし盡されてゐる。さうした最後に園氏は息止めした社會改造家の胸倉をすくひ上げ「時に若しもお前が人間であつたとしたならば」と人間に返る誓ひにとつて特く息を吹き返してやつてゐる。社會改造家は命めうが助かつた譯である、が此處で園氏は畫家の方を振返り義憤家顏に言ふよう「物奴は此の通り

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中實ない弱虫である要するに物なのだ。皆様は此奴の眞似をしてはならない。完全に絞めあげた事實は今見られた通り」と、後に引用する氏の抄文の如くに何の事あない全く其處にある改造家は眞事にもつて物である。「而も物とて程も程似も似つかぬ單純な薬模型である。

元來獨斷は大概の評論家に付物だが、それも筋や結論を運ぶ爲のきめつけ方には必要だらう。それとは別の是は又何たる醜い獨斷であらう。悲慘にもわざ〳〵評論形式を惜りて迄自らの無考な淺い內生活を暴露してゐる。園氏は社會改造家とは人間を經ずして、一足飛物質の權化になつたもの丶如くに思つてゐらる丶が環境改造の意志が深い〳〵ごん底の人間性から、人間個の底の類性から、其美から眞理から發生して來てゐる事を感がへ至らないに至つて、思ふに園氏の餘りな人間侮蔑の沒常識は、氏自身と他個の間に於既に常に賢者對愚者の差別的の貴族趣味を示し自らの內部なる人間的な自主心の皆無を裏書してゐるのではないか。要するに使ひ古された言葉を持つてする即ちブルヂョアの亞流なのである。ブルジョアの潮流に流されながら或はまだ履違へたエゴイズムのお上品な聲で「俺はブルジョアの生活あるけれ共いやしくも理論は厳密な中立だ、ナニ仲々流されて溜るものか、俺ぢやないよ岸が動いてゐるに過ぎない」など丶言はぬとも限らない。

美しい心の持主は藝術のみではない。社會改造家も美しひ心の持主だ。總ての底をのそいて見るが善い。個のずつと底に類性がある。美も眞理も其處から社會改造家の心も其處から發生してゐる。その底に總ての人間が連なつてゐる。社會改造家を環境形骸のみより見えないもの丶如く決められた、必迫した現代の社界運動が理解出來ない園氏自身は、要するに此の底の類性を知り得ない、底を持ち合せない故にブルヂョア生活の日常そつくりな反映を示されてゐるではないか。素質畵家にも無口にして具管(チューブ)の一本買ひ得ない人々をのお知りではないのか。心の底から總て此の底から發生しないものが何一つあると思つてゐるのだ。それが昨日に過ぎて唯最後に思ひきめた物一つを目指してゐる、それを口にするとしないとの違ひだけではないか。人間生活の搆相はさう簡單なものではない。言つてゐれば限りもないから、唯貴重な紙の上で次のこれだけ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

をお傳へしたい。お互な何ふせ人間なのだから、畫の上の批評なんか何んなに我儘な主觀でなさらうとも、それは畫面へ背向けてゐる畫家にとつて關した事ではない、お自由である。けれ共僭越に美術の紙の上で畠違ひに生活眞理などをなぶり廻してもらひたくない。底の眞理には美が隣つてゐるからつい默つてゐられなくなる。言葉を抽象と具象取混ぜて誤魔かしてゐらるるが「社會運動だけに就いて言はるべきことではなく、どんなことでも例へば讀書することでも旅行することでも、のみならず社會生活を營むことすら全く餘計なことである」などゝは全く餘計である。言つても言はなくつとも何ふせ畫家達自身も我儘だ。園氏の如き頭から定め付けた所に規律はなく、全く自由に放された所に人間の規律はあるのだ。

などゝ言つてゐた日には、全文を引かなければ納らなくなる。此の粗忽者の僕が張り出た後ろに、畫家等が並べてゐる頰笑み顏を返り見るが善い。僕も口を閉ぢて頰笑顏に歸るとしようがよつて尙左の如き一二のた人好しの園氏が抄文をた目にかける。此の抄文によつてのみ僕のから笑ひが、全くから笑ふ價値の證明となり、即ち美術の他の分野の人達の充分なる頰笑みに價すると思ふ。

「改造すべきものは物質にある。て、彼等は信ずる、物質が凡てを解釋すると。」「それで、物質的力に支配され環境の內に包攝せられ人間といふものを考へてみる。それば物質的關係から一歩も踏み出さない人間、環境の力に張られてゐる人間、環境の産物としての人間、物質としての人間ではないか。さうしてそれは人間と言へるであらうか。もしも强いて環境の産物とし物質としての人間を考へなければならぬとならば、人間が社會を改造するといふことは果してることだらうか。何となれば自身がその産物であり子であるものがどうしてその原因であり親であるところの環境を改造することが許されよう。」「環境の改造は生命の維持を目的としてゐるものとすれば、美術家は社會運動に携つた瞬間に於て自殺したものと見なければならない。」社會改造運動が、もし維持生活のみに始終して他を顧みないて滿足してゐられるとすれば、それは頗る低劣な思想と云はねばならぬ。さうして文化の範圍へ充分に這入りえないのだ。人間性の考慮に餘り立入

る資格はないのだ』。「藝術家は生命の發展創造といふ點に關して社會運動に貢獻するところ頗る大なりと言つてよいこの社會運動をして意味あらしめる方面に於ての大貢獻を思ふとき、彼こそ眞の意味の社會運動家だと言へるではなからうか。」

＊

『美術と民衆生活』と題した本間久雄氏の論文は既に立場の相違でもあるが美術に對する理解の缺乏によつてそれと現代生活との觸點眞於て矛盾が生じてゐる。本間氏が短所の如く指摘してゐる「一般公衆に容易に目に入り易く、一般公衆の印象を鮮明にするために、題材の上では殊更に珍奇を衒ひ、色彩の上では殊更に强烈なるを努め、又は畵幅の上では、殊に大きいのを選んでゐることは容易に觀取されるつまりこれらの展覽會に陳列される、繪畵はその大きな會場に陳列され、多くの公衆の注目を牽くといふことを、少くも主要目的として會場藝術」は却つて僕の讃同する所である既に繪畵を物としてみてゐる僕には比格上に一家族內で玩賞する私存物的としてよりは、大衆的民衆に及ぼす社會的會場藝術の効果の方へ問題を置きたい。

『繪による反省』といふ張紅々氏へも「畵に於ける社會革命の潜在意識」もお話したいと思つたが愈々ダルけて書き續けるだけ自分がさもしく意識されて來たので、第二號拙論「展覽會評に代へ」をた讀み下さるべく又そのうちに機會を見て後二氏等に見たいと云つて思つてゐる。人名を借りて類型の爲にといへ、のさばり出た事の許容を願ひ、要するに繪畵評とは毒にも藥にはならない無駄ものだと結びたい。

——十二・十二——(正夢)

長篇小說『空に指して語る』　內藤辰雄著

これを讀んで何よりも感じたことは、この頁を讀んで見ても、嘘の語られてゐないことである。「空に指して語る」中の主人公「俺」の思索にしろ行動にしろ、悉く間違ひも無く作者內藤君の自我表現である、作から受ける感じは、即ち作者其人から直接に受ける感じと、些かの相違も無い。——僕は何よりもそのことと、から感動を受けた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

内藤君は生れながら詩人である。彼の感覺のなかには大自然の秘密な生命そのものが跳躍してゐる。彼が曠野の眞中に立つた時に、その曠野は、單なる無人格の自然ではなくして、「俺」と云ふ人格を所有した一個の自然である、而して同時にまた、「俺」といふ一個の人間は、果しも知らぬ曠野の姿となつて讀者の前に迫つて來る、全篇を通して流れて居る。人間的な情感(所謂人道主義者共の呟聲と一緒に考えて貰つては困るが)と、笑ひながら涙を誘ひ出すやうな、諧謔とは、それが作中の人物に依つて語られ、或は行動せられてゐるにも係らず、それが直ちに、その人達を廻ぐる自然の――、空の、曠野の、河水の、そして路傍の櫻並木や、時折には女が强姦されるといふ草原の――情感であり、諧謔であるが如くに、讀者の胸に泌み込んでくる。――内藤君が把握してゐるこの力は今日迄に釀出したブルジョア作者どもを、押し伏せるだけの魅力と偉力を持つてゐる。他の多くの作者どもが、カフエで洋食の味を經驗して居る夜に、内藤君は曠野のの魅力が如何に强烈であるか、そしてそんな曠野の眞只中で女を犯すことが如何に聖なるものであるかを經驗してゐる。ブルジョア作者どもが、一流の劇場で、相互に他人の身の上を嫉みながら、生つ噛りの劇通でも振舞ほして居る時に、内藤君は、奴隷小屋に集つた八人の奴隷ども(勞働者)が、ブリキ罐を自棄に鳴らして、八木節を唄ひながら、如何に人間愛の絕頂で、抱擁し狂氣してゐる人達の姿を靜かに眺めてゐる。

然かしこんなことは内藤君にあつては、ほんの序開きに過ぎない。眞の强味は、最初の頁から最後の頁迄、三百六十六頁を一貫して焰のやうに燃え上つてゐる、階級鬪爭の觀念と、徹底した自我意識と、そして何よりも見逭すことの出來ないのは、これらの鬪爭觀念と自我意識との背後に波うち、そして作者をして現在の社會組織に對して一大斧鉞を打下ろすべく奮ひ立たしめてゐる、人類愛であり、誠實心である。作中の主人公「俺」は自分の兄弟であり仲間である八人の勞働者達に、幾度愛想をつかしたか知れない。愛想をつかし、時には憤懣をさへ感じながらも、直ぐその後で仲間の爲め勵まし、助力を與へことを、決して厭ひはしない。そして最後には同盟罷業の犧牲となつて、自分のみが馘首されながらも、決して仲間を憎ぐを憎くみもせず、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嘲けりもせず瓢然こ只一人で、行方も定めず工場を追はれて行く。

この愛こ、この憎くみ――これは今日迄の作家達が、机の上で、または西洋の横文字のなかで發見し、捏ねあげ、ふくらませた飴細工ではない。內藤君が十數年の間、身を以て行動し、體驗し、思索した哲學であるのだ。彼はそれを工場でも摑んだ、路傍でも摑んだ、そして河岸でも、或は鑛山の坑內でも、それを摑んだ。そして、今日それが長篇三部作の第一部である「空に指して語る」こなつて、我國のブルジョアごもの前に、又は未だ自覺せぬ勞働奴隷ごもの頭上に、投げつけられたのである。

まつたくこれは一個の爆彈である。新文化への黎明を告げる爆彈ある。

この爆彈は何を語つてゐるか？

ある時は工場の奴隷小屋の陰慘な描寫こ、それに住む八人の勞働者達の狂態を寫し、或時は黎明の曠野に立つて、勞働同盟の幹事と革命を論じ、或時は夢の如き月夜の草原に、情人を抱いて肉の飽滿に喜び、或時は花の如き處女に戀して悶々するがこ思ふこ、仲間の卑屈心に憤激して課長に突擊し、或時は聲を奪はれ宿を追はれた一社會主義者に「相互扶助」の道德を聽き、或時は罷業工集會に出席して、勞働運動の眞理を語り、最後に至つて同盟罷業こなり、罷業僅か三日にして勞働者の慘敗こなり、主人公は工場を追はれ、社會主義者は行方不明こなる。その轉々として變ずる幾場景を、ぐい〳〵こブラッシュの如き筆觸で描きながら作者が血肉の汗を以て體驗し來つた哲學を說く。

その哲學は二筋の太い糸で、撚られた哲學である一筋は資本階級に對する、又はブルジョアの安逸に對する反逆哲で學あり、他の一筋は總ての人間を、否人間のみに限らず、一切の動物をも、自然すらをも抱擁しやうこする、博大深刻な人類愛である、作中の主人公なる「俺」が、或日は曠野の草の一本一本に限りなき愛を濺ぐ描寫を見よ、或日は曠野の緣を流る、河水や、その空を飛び白雲に向つて「俺の兄弟よ」こ話しかける描寫を見よ、或日は棄てられ、飢たる犬の頭を、兩腕に抱えて、接吻せんこする刹那の描寫を見よ。そこには、ブルジョア作家ごもの、窺ひ知るここころの出

來ない、愛と優しさ――それは、プロレタリアのみが、眞に所有し得る感激の美しさに、讀者の胸は感激に波立つであらう。どのブルジョア作家が、これだけの感情の美が、人間の胸に巣喰つてゐることを、語り得たものがあるか、今日迄のどの作家がこの樣な簡素な筆で、こんな魅力ある場面を描き出し得たか。

哀れな殘疊に枕して、愚にもつかぬ痴言を呟いて居る、ブルジョアの作家共よ。赤化運動は、單に政治や經濟の組織に向つてのみ、襲つてゐるのではない。革命の巨浪は、君達の足下をも、既に洗つてゐるのだ。長篇小說「空に指して語る」は、この新文化の建設に向つて突貫するプロレタリア軍の、眞先に振かざした赤旗なのだ。その赤旗は、反逆的感情に燃えたものではあるが、決して破壞の叫びではない。それは人生の一切を肯定し、建設せんとする慾望に燃え立つた旗識である。西に落ちた太陽ではない、東に登る太陽である。

玆に作者內藤君の絕對的な强味があり、そして「空に指して語る」が、一切のブルジョア藝術を一蹴して、新社會の建設の爲めに、その礎石を持ち運ぶ、目覺めたるプロタレタリアの若者達や、それらと共に肩を列べて未來に向つて歩まんとする智識階級の青年達に向つて、「これこそ君達の欲しがるものだ」と大膽に云ひきることが出來るのである。

「空に指して語る」に對して藝術上の仕上げを云々する輩は世紀末的生活の中に、辛ふじて生き殘つた、よぼ批評家に過ぎない、君達は、この作を云々する前に既に東の空に染めてゐる黎明期の、處女の誇りにも似つかはない綠の光りが、何を語つてゐるかを考へるがよい、そして自分達の無智イズムの分類や、文法の適確さや、美辭や、麗句や、そんなものを悉く智識と見る時代は過ぎ去つた。そんなものは水の上に浮ぶ。一掴みの泡沫(あぶく)に過ぎないのだ）を、反省して恥ぢるがよい。

それと同時に、作者內藤君と肩を列べてゐる勞働者諸君よ、君達は、國粹會の會費を出するのを中止してまた大和民勞會の雜誌を購讀するのを中止して、更に武士道鼓吹奈良丸節を聽く金を貯めてこの空を指して語るを買ふことはほんたうに正しい金の使用法であることを告げる。そして、さうなつてこそ、作者內藤君が、この長篇三部「空を指して談る」を書き綴つた意

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

志を徹底する。そして内藤君が貧しい生活と戰ひながら、苦心慘膽した辛苦の意義を生ずるのである。（逸平）

宗教的センティメンタリズムと偶像崇拜の時代錯誤

――倉田百三氏『出家と其弟子』の上演

未だ理智が生活の主權を握らず、隨つて未だ科學が行なはれなかつた古代にあつては、科學の代用としての宗教が、曚昧なる未開人にとつて必要であつたことは、佛陀をを古代の大なる醫學者であると斷じ、その膨大なる經典を古代醫學書としてのみの價値かし認めなかつたニイチエの言を借りるまでも無く、現代人としての吾々が等しく認めるところである。

現代が如何なる時代であるかと云ふことは、今更らしく繰り返へすまでもないことであると同時に、その現代に生息するものが、殊に、現代の思想家と目され或は自稱する人々が如何なることを爲すべきかといふことも頗る明かであるべき筈だ。

古代の宗教的偶像の代りに、今日吾々の前には理智的偶像、科學的偶像が跋扈跳梁してゐるのである而して現代思想の緊必なる任務は、これ等凡ての偶像を悉く破壞し去ることである。若し現代に生棲するものが、當然否定すべき過去の宗教を拉し來つて、更に愚かなる偶像を築き上げんとするならば、渠は竟に現代の理智的偶像、科學的偶像を破壞し能はざる怯懦なる痴漢以上の痴痴漢である。然も「出家と其の弟子」の作者は洵にこの痴漢以上の痴漢である。渠が「出家と其の弟子」を借りて表現し得たところの思想は、渠によれば「愛と祈り」である。自分によれば「偶像崇拜」である。渠の思想は現代の吾々に縁遠き、寧ろ唾棄すべき、過去のものでありその思想の上に組み立てられた、「出家と其の弟子」なる一篇の戯曲は當然現代から葬り去らるべきである。

然るに、渠のこの作品が、書にして數十版を重ぬる讀者を持ち、舞臺に上されては連日滿員の盛況を呈する所以は何であるか？其處に自分は、偶象崇拜と宗教的センティメンタリズムとが、偶々現代の特殊階級の嗜好に投じてゐることを觀るのである。

茲に謂ふ現代の特殊階級とは、理智的偶像、科學的

偶像に自己の生活主權を攪亂され、然も自ら快しとしてゐる階級のことを指すのである。彼等は理智が生むだ科學の世界の裡に生棲し、科學の與ふるところのものを、その生活樣式としては取り入れながら、然も根本に於て、自己によりて生きることを知らない。この自己によつて生きることを知らないといふことは、直ちに古代の未開人の生活と本質的に結び付くものである。奇異なる類似が、宗敎の裡に生棲した古代人と、科學の裡に生棲する現代人の中の一部の特殊階級との間に存する。古代人が宗敎を必要とし、宗敎によつて自己の生活體系を造りながら、然も佛陀やクリストやその他多くの宗敎創始者の敎ふるところの根本義が Anarchia であつたことを解せず、隨つて自己によつて生きることを知らなかつたごとく、常に偶像によつて生棲してゐる現代の特殊階級のものも又自己によつて生きることを知らないのである、

倉田氏の偶像崇拜と宗敎的センティメンタリズムの思想とが、古代人と斯くの如き類似點を持つ現代の特殊階級に迎合されたのは、玆に於てあやしむに足らなくなるのである。かく考へれば、特殊階級の中でも特に甚だしく自己によつて生きることを知らない現代日本の女性に、渠の讀者が多數存在することも肯けるであらう。

旣に、作品の中心思想が過去のものであり現代から葬り去らるべきものである以上、その外形上のことについて、一々の批評を加へるのは愚であるかも知れない。然しながら自分は、これを一箇の劇としてより具體的に、また、より全的に批評するためには、舞臺上の「出家とその弟子」についても、二三の言葉を發しておく必要があるのを感ずる。

舞臺協會が、往年の名優佐々木積氏を迎へての今回の旗擧けに、この「出家と其の弟子」を選んだのは、新劇運動を標傍する協會の主腦者が「新劇」の意味を「現代語で書かれた芝居」位の程度に於て解釋してゐだものと見て良い。さもなくば、特殊階級に迎合するこの戲曲を選んで、物的成功を得やうと欲したものと見も良い。何故なら、今日の劇場に出入する大多數のものは特殊階級に屬するものであるからだ。（尤も自分にいはせれば、現代の日本には、眞の『新劇運動』などは皆無なのであるから、この點では舞臺協會だけを責め

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

やうとはしないのであるがたゞ協會はこれを研究劇として演じたのである。そこで何故多くの日子と多數技藝員の勞力とを費してまで、斯の如き無意義なるものを上演しなければならなかつたか問題になるのである、研究すべきものは、最も他に無いとは云へまい）

偖、自分は有樂座の最終の日に、序幕と二幕とを見落して、三幕目から見たのであるが、六幕目の最後で、「善い調和した世界ぢや」と云ひながら親鸞が息を引き取るまで各幕を通じて、惡い不調和な世界で、不調和劇場で不調和な劇を見てゐた自分は、聊も感心しなかつた。

技藝員はみな熱心ではあつた。そして技倆も相當に持つてゐた。親鸞の佐々木積氏も、唯圓も山田隆彌氏も、善鸞の森英治郎氏も、淺香の森美樹子氏も、かへでの岡田嘉子氏も、たゞ佐々木氏の親鸞はあまりに勿體振り過ぎてゐた。（作者が勿體振らせてゐるのは無論ではあるが）それから、みんな誇張が多かつた。特に岡田氏のかへで、森氏の善鸞などは。

右は、個々の技藝員に對する概評であるが、斯くし舞臺に上されたこの劇を觀てゐると、前述の思想的大缺陷が一つ一つ具體的に體明されてゆく上に作劇上(ドラマトルギイ)の缺點も一々明かになつていつた。（無論この二者は、常に必須的に相關聯するものであるのは言を俟たない）

第一に、總ての會話が極めて不自然である。非常な技巧を弄して、然もことすら不自然なものにしてゐる。筋を若くは會話を自然に運ばせるといふことにも、却つて大なる技巧が要るのである。

第二に、レアリテとサムボルとが舞臺上で恐ろしく調和を缺いてゐる。

第三に、作者は劇の中で「愛と祈りと謙虚」とを説き乍ら、然も作者自身は一段高く止つて說敎してゐる。そしてこれが、この劇の技巧上の大きな破綻であると共にまた思想上の破綻でもある。

餘りに冗長になるからこの程度で擱筆することして、最後に舞臺監督伊藤松雄氏には、技藝員の臺辭の云ひ方が悉くゼロであること（例へば、形容詞に附くべきアクセントが、みんな次きの名詞に附いてゐたり、最後のシラブルに附くべきアクセントか最初のシラブルに附いてゐたり）云ふことを、それから舞臺設計の井上弘

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

範氏には舞臺裝置が出鱈目である（例へば三幕目の圓窓の障子の入れ方が逆になつてゐたり、五幕目の本堂で、導師の姿が見えるの內陣が見えず、結界すらもなく、殊に磬の音が舞臺裏から聞えて來たりすることなど）ことを、それから舞臺照明の遠山靜雄氏には光線の使ひ方が舞臺に合つてゐない（例へば六幕目で二人の僧が月を見て話してゐる時、松の木の蔭が月の方へ向つて垂れてゐることなど）ことを云つておきたい。

かくは云ふもの丶、右の如き缺點を見ない多くの特殊階級の夫人令孃達は、作者の描いた偶像に魅せられ、宗教的センチメンタリズムの泪を惜し氣もなく流して、或ひは厚化粧の顏を汚し、或ひは香ひのあるハンカチを濡らしてゐた。その點に於て作者は偉大なる成功をかち得たものと云つて良い。（孝丸）

戲曲二篇

藤井眞澄氏「窟を出て」―解放。
谷崎潤一郎氏「愛すればこそ」―改造。

二篇の戲曲を列べたことは、二篇の比較批評をするためではない。その優劣を問ふのではない。斯う云ふものに優劣をつけるのは愚である。先づ藤井氏のから始める。

『窟を出て』は五幕物の『新世話劇』で、藤井氏近來の力作であらうと思はれる。かなり大がゝりなもので、かなり種々な問題を投り込んだものである。ところがこれは今も云つたやうに、この作者近來の力作であると同時に、この作者近來の失敗の作だと思ふ。無論、茲で云ふ失敗の意味は、大向ふを標準にした失敗の意味でもなければ、また、現在の所謂文壇を標準にした失敗の意味でもない。寧ろこの兩者を標準にして云ふならばこの作は大成功であると云つても良い。何故なら前者の場合にあつては、この劇は、新派的な意味に於ての喝采を博し得るに違ひないし。後者の場合にあつては、總花式な批評家の賞讚を受けるに決つてゐるからである。自分の云ふ失敗は、斯う云ふハンデキャップをすつかり取り除いて見た場合の、獨立した劇そのもの丶失敗である。何故であるか。理由は頗る簡單である。劇の筋そのものに殆んど必然性が無い。隨つて大部分の臺辭に必然性が缺けてゐる。存在を裏付けるものは必然である。然もこの劇の大部分にはその必

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然性が缺けてゐるのである、現實の社會に於て、この劇の中の如き事件や人物や會話が、事實存在してゐるかゐないかは玆では自ら別問題である。現實に存在し得ることも、それが藝術として現はれた場合、それの必然性を缺いてゐたならば、それは一個の偶發事件報告の雜報記事に過ぎない。現實に存在し得ないことも作者の思想と體驗とによつて、それが藝術上の自然性を持ち得るのである。

今、藤井氏のこの戯曲に就いてみるに、勞働者の宇野一人を除く外、悉く作者の傀儡でない人物はない、傀儡であつても良い。然しながら餘りに統一を缺き、餘りに存在の理由を缺いだ傀儡である。隨つて、この傀儡の集團によつて演ぜられるこの芝居は、自分には全く分らぬことばかりである。その內容の一々に就いて、具體的に書いてゐたならば、五枚や十枚では書けないであらうと思ふ。尤も、「これが新世話劇といふものだ。」と云はれゝば、今まで「新世話劇」なるものを見たことのない自分にとつては、一言もない次第であるが、若しそれならば、自分達の尊敬するこの作者の新しい藝術が、竟に「新派」の領域を出ないものである。氏はここを自分のために深く惜むのである。

谷崎氏の「愛すればこそ」は三幕物のうちの序幕たけが發表されたのである。そしてこの戯曲の「全體の思想の焦點」は、あとの二幕目と三幕目にあるのだ相であるが、この序幕だけで一個の一幕物として通用するから假にこれだけで發表すると作者は斷つてゐる。で自分も、これを一個の一幕物として見る。これに對する自分の批評は、また至極簡單である。

斯の如き作品は、一種の骨董品として、ブルヂヨワ治下に於けるブルヂヨワ生活の肩の凝らない記錄としてのみ、目先にあつても邪間にならないものである。が破り棄てゝも更に愛情の念を感じない骨董品であり記錄である。

この中に描かれてゐる。「愛」の思想は悉くブルヂヨワ心理の現はれでないものがない。未亡人も、その息子も、その娘も、數子も、そして尙ほ體二に至るまでもブルヂヨワ意識の權化である。これまた一々その個々に亘つて批評する必要はない。要するに愚劣な作品である。あつても邪魔にならないが、やはり無い方が

愉快なものである。（孝丸）

讀んだもの二つの感想

『愛の翼』と『開かれぬ扉』

これは批評といふほどのものではない。僕の感じたことを二三簡單に言ふに過ぎない。一つは井上康文氏の詩集『愛の翼』ともう一つは坂本石創氏の小說『開かれぬ扉』に就いてである。二つとも氣持のいゝ愛を取扱つてゐる。それでゐて、二つともに人道とか同情といふ意味のことが取らに見えない。僕にはどんな愛にも同情といふものがある間その愛がほんとうでよいもののように考へられる。それが勞働者に於ける同情の如きまた戀愛に於ける同情の如きみんなそうである。僕はほんとうの愛といふものは、自働的に自分の血を自分の思つてゐる人、もしくは人たちに注ぎ込まねばならぬものだと思ふ。そういふ意味から言ふと井上氏の作の中にも、また、坂本氏の作の中にも僕に多少不滿な點がないものでもない。井上氏に對しては、ペンを持つて机に向つて詩をつくつてゐる俤を想像されぬものでもなかつた。例へば、「勞働祭の日」の中で、

おゝ友よ、同志よ、
愛すべき兄弟よ、
祝福せよ、われらの日を、
勞働祭の一日を。

一句を讀んだ時、僕はあゝまたかと言ふ感じが起らぬでもなかつた。同樣に、坂本氏の作に於ても、僕は初めだら〳〵に流れてゆくような風を氣づかつた、しかしながら二つともに若い人に取つて最もおそろしい、また、あり勝ちな誇張といふものがなかつたことが喜ばしい。その上、二つともに充分に器用さがあつて、心配したほどでもなく、立派に引きしまつだ感じを與へてくれたことはよろこばしいことといつでもよからう。要するに、二つともに充分な若々しさがあつて、それが何よりの力になつて見える。井上康文氏は僕の知つてゐる限り、坂本氏より一般的に世間に知られてゐる若い詩人である。けれども坂本氏に到つては、決して今の多くの新進の人たちの騷がれるように、ちつとも世間的な廣告をしてゐないよう、だそれでゐて、決して既成作家に比して劣つてゐるとは思はれない。若々しく、そして純なこころだけでもそれらの多く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の人たちより遙かにい、と思はれる。決して急がずにゆつくり、ほつ〳〵い、作を發表されることを僕は希望するそうする、ときつと蔭ながら期待をもつてゐる人たちは作者をばなれぬことだらうか。（小牧）

美術 岸田劉生氏個展評

岸田氏の個人展覽會を、神田の流逸莊で見た、岸田氏の繪に就いては、今迄に種々の人から、種々の意味で批評されてゐる。だから僕が今くだ〳〵しく大した發見でもしたやうな顔をして、あゝだかうだと言ひ度くはないが一寸注意して置き度いことがあつたので極く簡單にその時の感想を書くことにする。

一體僕は岸田氏の繪は好きである。他の諸氏が口を極めて讃めてゐる極度に好きな作家である。であるから現代の日本畫壇に於ては、氏が尤もい、位置に置かれることに異論はない。その透徹した感じ方の鋭利な觀察純一なる表現は僕等の大いに學ばねばならぬことに相違ない。

嘗て僕は『白樺』紙上に於て、同氏の藝術論を讀んだことがあるが、今は明瞭に一つ〳〵その時の論點を記臆してはゐないが、例へば性慾などから美は生れないといふやうな、極く徹細な點まですつかり同感されたものであつた。――そんな頭で、僕は最近の氏の作品に接することになつた。實は昨年（大正十年）の帝展はたうとう見なかつたので、氏の「童女像」は見てゐないだから今度の個人展覽會が僕をして氏に接せしめた唯一つの機會であつた。そんな關係で。僕は可なりの期待と喜びとを以て氏の繪に接したのである。そして益々頭が下つたのである。

武者小路實篤氏が「白樺」か何かで岸田氏のあることは、我か日本の誇りだと言はれたさうだ、が僕はそんなにまで明瞭には言ひ切れないものである。が、儘かに日本畫壇の一異彩だとは言ひ得る。それにしても、僕が日本の誇りだと言ひ切れない理由といふ譯ではないか兎角不思議に思つてゐることが一つあるから此處で言つて置く。他でもない。岸田氏の繪には、どの人にも〳〵花を持たせてあることである。僕は數ある氏のそんな繪見をて、人物を花との間に、如何なる有機的な結合點があるかを疑ふものである。時としては、人物を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

草花との間に、極めて自然な、極めて有機的な關係のあることを、僕等ば知ることが出來る。けれども、中にはその花の爲めに、全然その繪を打ち壞してゐるもの、あることを知らねばならない。僕等はそれをしも美人のおならと思つて、而も麝香の這入つたおならと思つて、有り難がつて嗅いでゐなければならいだらうか。その尤も著しい例としては、近藤繁次博士の肖像である。あの博士の顏と、手に持たれた花とは、一體どんな關係が結ばれてゐるのだらうか。何うも僕には不思議でならない、畫面の整理の爲めとしてならば、餘りに智惠のない話だ。

それに今一つの不滿は、子供の顏表情である。あの物を見つめた顏の中には、冷笑と大人のやうな理知とがある。氏は、モナ・リザを描かうとするのであらうか。それにしては、餘りに材料をはき違へてゐるやうだ。僕等は、子供からは無邪氣な氣持をこそより多くの同感を以て受け容れこそすれ、智的な心持を要求しやうとはしない。併しそれも全體がさうであるといふのではない。中には無邪氣な、飛びつき度いやうな作品もある。

大體論はその位にして、一枚々々の作品に就いて、僕は僕の好みから、好き嫌ひを言ふことにする。惜しいことには出品目錄をなくしたので、何番の何とは言へないが、第一室の水彩の方では、這入つて右側の中程で、子供が立つてゐる圖、及び突き當りの床の間の上にあつた女の子供の半身像、第二室の油繪では、正面右側の毛布を肩にした女の子供の半身像、その三點は他のどれよりも好きであつた。その三枚の繪のことを思ふと、今ペンをとりながらも誠に頭が下る。靜物では餘り好きなものはなかつた。又、風景では小松のある砂道の風景の外二點は、失敗の作と思ふ。何うしても好きにない。それに、先つき言つたやうな意味で、近藤博士の肖像は餘りいゝものではないと思ふ。獨り岸田氏のみならず、人々にはそれぐ〜非常にいゝ點と、その反對に、又非常に惡い反面とを持つてゐるものであるが、岸田氏の場合も。その强味と弱味とが、可なり露骨に出てゐるやうに思はれる。其處が、僕が岸田氏を絶世の美人と思つてゐながら、そのおならは矢つ張り臭いといふ所以である。美人のおならには、麝香が這入てゐるものではないといふ所以である。只その

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おならは苦笑しながら我慢するだけのことだ。

　最後に、二階に展覽された日本畫は、岸田氏のことであるから、今後ます／＼善くなつて行くことであらが、僕自身の好厭から言へば、嫌ひなものだと言はざるを得ない。何故かといへば、何うもその筆觸や、構圖や、感じ方に於て、及びこれまでの表現法に於て、僕の胸にぴつたり來ないし、何ういつても氏の油繪や水彩に比較して、未だ／＼と思はれるのである。

　かうは言ふたものの、我が日本の現畫壇を顧れば、氏を措いて幾人か僕等が尊敬してゐる人がゐるだらうか。さう思ふと、僕自身のことはさて置き、眞に心細くなつて來るのである。

　岸田氏に就いては、機會を見て猶ほ言ひ度いこともあるし、こに帝展出品などの問題に就いては可なり言ひ度いこともあのだが、それは今言ふべき場合ではないのだから、他日に讓ることにしやう。――以上、極く簡單に、岸田氏の繪に就いての感想を書く。（弘二）

俳論 『奧の細道』評論を讀む

荻原井泉水の氏『奧の細道』評論をよむ。これは七月頃から大分長く早稻田文學につゞいたものである。重に文中の俳句に就いての評論であつたけれども非常に面白かつた。私は此の一文で遺憾なく芭蕉の人爲りを知ることができた。井泉水氏は誰かも云つた樣に少しくわしすぎる程俳句の批評に力を入れた樣だつたけれども評論中に表れたる芭蕉は遺憾なく、そののろまな偉大さを表はしてゐるのだつた。彼も亦一個の人であつた。決して俳聖でもなんでもない、芭蕉の句は離してよむ可からずである。井泉水佐は昔からある。文中の句の中から僅か、五句か六句例へば『荒海や佐渡に横ふ天の川』『涼しさや岩にしみ入る蟬の聲』『五月雨を集めて早し最上川』を拔いて、佳句だとしてある。尤もなことだ。實際佳句は少ない。殊に白川の關に入るまでの句は全部駄句だと云つてもいいだらう。この駄句と云ふのが、後世の月並となつたのだらう。風流ぶると云ふことはいけないことだらうけれども、芭蕉の句に於いては、私はそうみたくない、芭蕉の句だからと云ふ事が頭に入つてゐるためかも知れないが、そう井泉水氏の樣に一にも二にもなく之れをしりぞけ難い。輕いおどけた芭蕉の顏をおもひ浮べると、句の出來不出

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

來のことなんか云つてられない様な氣がする、殊に名もな人々の求めに應じて句つた、即興的句に於いて然りである。然し廿句卅句の中で、僅かに五六句より佳句を見出すことの出來ないのは事實だ。それだけ、私には芭蕉がなつかしく想へる、芭蕉もちようど私と同じ様なのろまな所があると思ふと、云ふに言はれぬしたはしさをおぼえるのだ。『彼も人なり、我も人なり』の氣がして愉快だ。芭蕉の句は皆表面が温いこなで包んである様な氣がする。そして中味の市でたえずほんのりと温い光りを發しゐる様な氣がする。それだけ、句は大きい偉大だ。そしてそれだけ、蕪村の様には目出たないはつきりしない。だからまたそれだけ早く覺めない。後世芭蕉を眞似た月並家が出たのも要するに此の上つ面の不透明な所だけ眞似て、中味の大事な、光を忘れたからではないだらうか。芭蕉が度々否々、大部分は、つまらぬ句で滿たされたと云ふのも畢竟此の自分の癖に落入つた爲ではなかつたらうか。私はそれだけ芭蕉がなつかしい。私の様な眞抜けたものが、蕪村や其角の前に行つたならば、きつと、田舍臭いものとして輕く『ふゝん』とあざけられたに違ひない、そして芭蕉は只無言のまゝでにこ〳〵笑つてくれたに違いない。それだけ私は芭蕉が好きだ。したはしい。好く人が言ふことだが、芭蕉の此の「荒海や」でも「涼しさ」やの句でも皆産まれた句だ。殆ど芭蕉が、夢中になつてひとりでに出來た句に違ひない。決して一歩退ぞいて、こうゆう情緒を表はさうとか、こうゆう氣分を表そうとか言つて作つたのでなくて、なんでも思はぬ中に、產れたのに違ひない、それを後世の人が只むやみに芭蕉を尊ぶために、「こゝで先師は、覺り給ひけり」とかなんとか云ふて切角の眞の芭蕉を壞して了ふのではないだらうか。芭蕉はどこまでも平凡人でありたい。だから、萬人の心に通つてゐるのである。萬人にしたはれてゐるのである。芭蕉は職業的上手な俳句製造人ではなかつた。かくして凡人芭蕉は、奥の細道中、もう好い年をして盛んに駄句をつくつた、そしてその中から動かすことの出來ぬ不朽の名句が產れた。彼はどこまでも、のろまな平凡人であつたに違ひない、私は、井泉水氏の「奥の細道」評論をみて、特にこんな感じをした。井泉水氏によつて、芭蕉がびし〳〵駄句を摘發されて行くごとに、私は上述の様なことを想つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

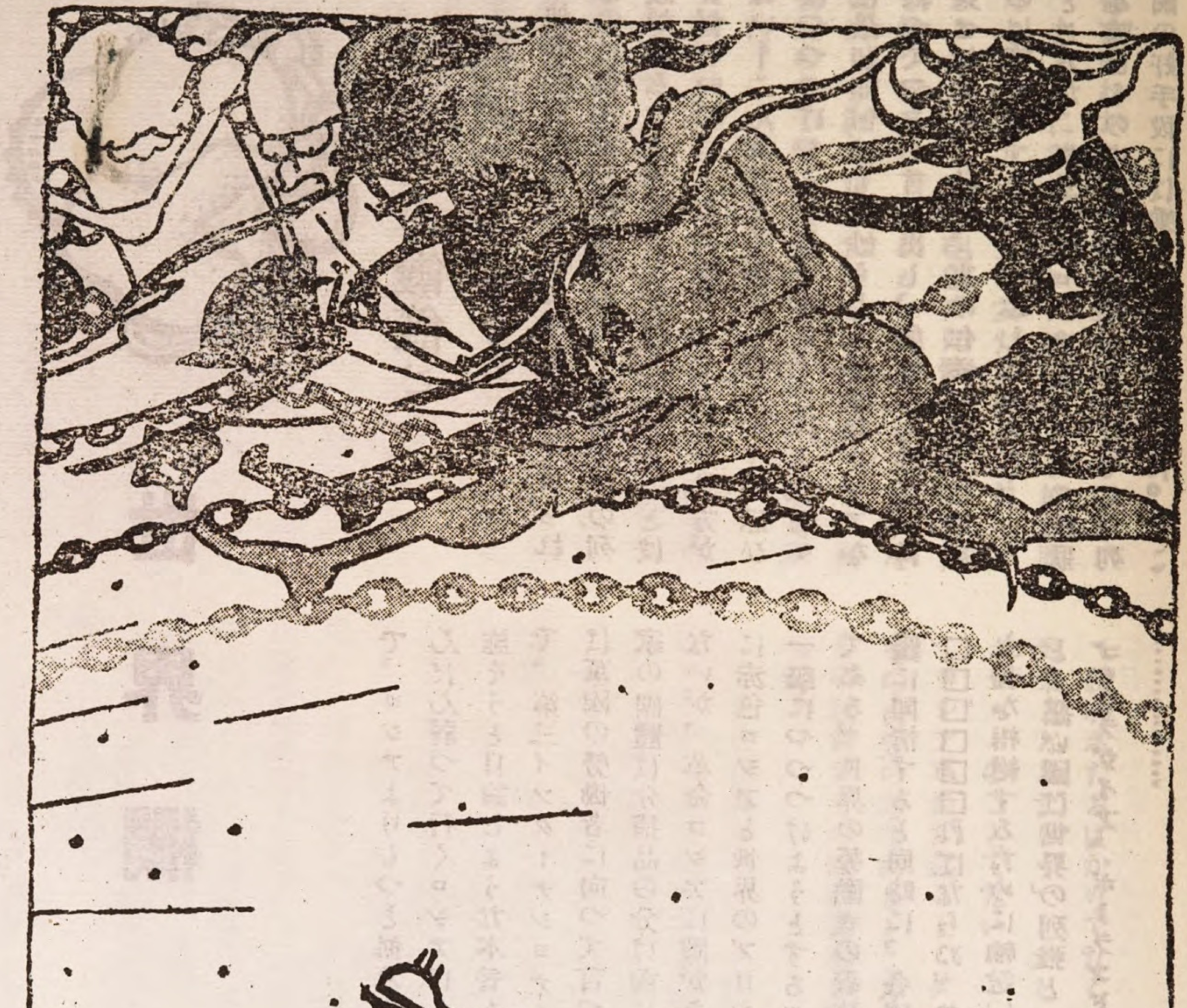
て想はず莞爾とするのだつた、そして私は芭蕉が井泉水氏にいぢめられゝば、いぢめられるごとに一層その したはしさを益してゆくのだつた。(默太)

映畫『戰爭と平和』(キネマ俱樂部)

佛蘭西物である。原名 "J'accuse" に對し「戰爭と平和」は少しどうかと思ふ。畫はヨハネ祭の歡樂を以て始まる。

平和その物のやうな佛國の或る片田舍の村の男女は火をかざして踊り狂つてゐた。かういふ平和な村へ或日突如として獨逸に對する戰爭が報ぜられた。こゝに獰猛な狩獵好きのフランソアと平和な詩人のジヤンなる二青年があつた。ジヤンはふとした事からフランソアの妻に戀するやうになつてゐた。二人の青年は共に戰爭に行く事となる。戰地に在つもフランソアは戀敵なるジヤンと初めは事毎に爭ふが心優しくして同時に勇敢なジヤンの爲に彼はつひに感化せられる。次いで二人が共に傷いて同じ野戰病院に送られるに及び、すつかり和解して了ふ。そして和解して直ぐフランソアは病院死でぬ。ジヤンは後頭部に受けた傷の爲に狂氣となり、村へ歸つてからは村人を集めて、自分の妄想を語り續ける――戰地で死んだ人達が今に村に押し寄せて彼等の犧牲に對して何か酬ひられたかと詰問する。さういふ風にしてジヤンは「戰爭中に村に止つてゐて不義をした男女や、怠けて飲んだくれゐてた者共をきめつける。終ひに、窓からさし入る太陽に向つて、呪ひの叫びを擧げ續ける。さきには平和の象徵として讚美したその太陽に向つて。さうしてとう〳〵そこに斃れて了ふ。これがこの畫のあら筋である。

亞米利加物によく見るやうな安價な人情や戀のいきさつを超越して、大きな戰爭に舞臺を取り殊にフランソアの妻即ちジヤンの戀人が獨逸人にさらはれ、獨逸人の胤を宿すことを描くあたりは實に國境を撤廢してゐる。さうして戰時に特有な戀や、愛國心などをも巧みに取り入れ乍ら、さういふ細部にはこだはらないで、大きな戰爭其物を眼目とし、最後にかうした慘憺なる戰禍に對し力強く大きく呪ひの叫びを擧げてゐるのである。(正夢)



語り行く明の空

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

世界欄

ロシアの饑饉と列國の干渉

他人の苦しむのを常に平氣で見て居られるのは資本家の根性である。資本主義の列强が饑ゑたるロシアを見殺しにすることはまだいいが、――この際そういふより仕方がない――こん度はその弱點をねらつて一思ひにやつつけやうとしてゐる。これらの國々は最初如何にも神妙らしく不幸なロシアを救つてやると言ひ出し、如何にも親切げに見せかけた。最も、東の仁義の國では民衆の展覽會をすらもみつぶしてゐるが……ところが、饑ゑたるロシアはロシアの窮狀を喰ひものにしやうとするようなそんな列國の奸手段には乘らぬ態度を示した。そこで、ロシアよりもつと饑ゑたる列國は、だんだん弱つて行くロシアにこの際荒療治を施そうと目論むような本音を吐いた。そこで、第三インターナショナルの執行委員會は萬國の勞働者に向つて言つてゐる。「資本家の團體は分捕品の分け前には一致してゐないが、革命ロシアに隙があつたら徹底的に赤色ロシアと世界のプロレタリア革命を一擧にやつつけようとすることには一致してゐる。世界の勞働者の義務はロシアの饑饉に同情すると同時に、各國の干渉に對し□□□□□□□ればならぬ。勞働者よ、共產主義を根絶するために輸送□□□□□□」と。悪い國は世界の列强とルーマニア、ユゴ・スラヴイア、ポーランド、それから……

……………

勞農ロシアに於ける イザドラ・ダンカン

イザドラ・ダンカンは、何故にロシアに行つたのであらうか。それは彼女が眞の藝術家だつたからである。彼女がもうブルジョワ臭氣の充ち滿ちたあの歐羅巴の藝術家の氣風に堪へきれなくなつたからである。

彼女がロシアに行かうと決心したとき、先づあらゆる新聞雜誌がそれを否定した。それからいよいよさうだと分ると、それを藝術家の氣まぐれからだといひ出した。さうしてとうとう歐羅巴も米國も彼女をかまひつけないので、彼女はやむを得ずロシアに逃げたのだといひふらした。

しかしさういふことはみんなうそだ。彼女がロシアに出發する前、彼女はアメリカとオランダから來てくれといふ有利な申し出をうけてゐた。彼女はそれを拒絶したのだ。クラシンがルナチャルスキーに談つたところによると、彼女ははじめロンドンにわかれをつげるのを怖れてゐたやうだといふことである。新聞は彼女が「ボルシエヴキ」だからといふので悪口をいつてゐたが

彼女のわかれの出演は連日滿員であつた。

たしかに彼女がロシアに行くことは大膽なことだつた。彼女の友だちはみんなモスクワを以つてまだ砲烟や死骸で一杯の都だと知つてゐた。ダンカン自身も全くそれを否定しきれなかつたかもしれない。とに角彼女の弟子は一人しか彼女について來なかつた。

彼女がロシアでした仕事は、第一に教育であつた。彼女はもとから體育及美的教育に於ける革命家であつた。彼女の學校はみんな成功してゐた。しかもそれらの學校は結局ブルジヨワ治下では閉鎖されなければならなかつたのだ。

彼女はかつてギリシアのヴエニゼロスと一所に古代ギリシアの光榮を今にかへさうとした。ヴエニゼロスは疑ひもなくその國民主義から古代ギリシアを恢復しようとしたのであるし、ダンカンはこの古代ギリシアに對する崇敬の念から發したにちがひなかつた。彼女は今でもヴエニゼロスの次の言葉をくりかへしてゐる。「社會革命と手をたづさへる政治は生活のうちに美を容れることが出來るだらう。それは現在の戰に於て勝利者たおばかりでなく、歴史に永久に光榮となるだらう」しかしこの事業はヴエニゼロスのことでない。

ロシア革命が起ると、ダンカンはすぐにその自分の考であるところの小供の解放とその教育がその國に實現されるだらうと考へた。

しかし彼女がモスクワに來ると、舊ブルジヨワの殘りが彼女のまはりに押しよせた。しかも彼等は彼女がもう踊らうとしないので失望した。さうだ。彼女は彼等のために舞踊しようとはしなかつたが、勞働者のためには踊らうとしたのだ。それで出來るだけ早く勞働者のためにただの劇場を建てようとしてゐる。この事業はどうなされるだらう。例のブルジヨワジは依然として彼女に惡口を放つてゐるが、彼女はそれにもかかはらず、ロシア勞働者のためにつくさうとしてゐる。彼女は「身振りの女王」であつた。しかし彼女の最大の功積はロシアに來たことであつた。

イザドラ・タンカンの手紙

次の手紙はイザドラ・ダンカンが、モスクワから「ルヴユ・コムユニスト」に宛てた手紙である。

『余は自己よりもより高きものを創造せんと欲し、又かくの如く死するものを愛す』

「ツアラトストラはかくいへり」　フリドリヒ・ニイチエ

「仲間よ

「あなた方は私のモスクワに對する印象を待つてゐるでせう。私はウエルズやその他ここに來た文士連のやうにあなた方に政治上の印象を談ることは出來ません。私にさういふ問題については全く知りませんから。私はただ藝術家の印象についてあなた方に談ることが出來るだけです。さうしてそれは理窟で考へられるよりも、むしろ感ぜられたものです。自然のものにはどんなものにも第六感といふものがあります。さうして特に小供と藝術家にあります。それは私達に魂の心理や人間や町の一群の心理を推察させることが出來ます。この第六感といふものが私の藝術家としての經歷をつくり上げたのです。私はその扉を開いたの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で、商業主義が「藝術」を破壞した歐羅巴を見捨てたのです。この第六感によつて私はモスクワをさがしあてたのです。何故ならば物質的事實を自分のまはりに見もてここで行はれてゐることを判斷することは出來ませんから、透見する眼で見なければならないのです。何故ならば、ここで表面的なものはみんな一瞬間の類似に過ぎませんし、それに眞理はこの國の魂の奥ふかくかくされてゐますから。奇蹟はこの集團の大きな靈魂にささげられるでせう。

私はこのロシアで、二千年たつて現れたところの人間性に對する最大の奇蹟が行はれたと確信してゐます、

それを了解するためには、私たちはあまりに同時代の人になりすぎてゐます。さうして恐らく百年生きる人のみが、人間性といふものが共産主義的支配によつて大進歩をなし、決して退かないといふことを了解するでせう。

モスクワは奇蹟の都です。さうしてロシアが受けてゐた殉教は未來には苦業の死であつたものになるでせう。人間の靈魂は基督が考へてゐたよりはもつと美しく、もつと寛恕に、もつと大きくなるでせう。

私はまたくりかへして、私たちがそれを了解するためには、あんまりそれに近すぎるのだといひませう。

もしも私たちが基督と同時代に生きてゐたならば、私たちは同じやうに何も了解しなかつたでせう。私たちはただあはれな弟子共をつれたつまらない人間を見たのみでせう。さうして彼の苦業の死は私たちには下らない最後と思はれたでせう。けれども精神の眞理は全く別のものでした。

ここで行はれてゐる精神の眞理を私は未來に對するきらめく幻像のうちに見てゐます。ベートーヴエン、ニイチエ、ワルト・ホヰットマンの豫言は實現されるでせう。すべての人はこのロシアに生れた解放の大波につつまれて同胞となるでせう。

私の魂が感じ、さうして共産ロシアから起つた豫言の聲によつて私に來た使命はこれです。

私があなた方にお傳へしようとする使信はこれです。

世界の勞働者の結合より外何もありません。未來の文明を救ひまもることの出來るインターナショナルの外何もありません。

イザドラ・ダンカン

サッコ・ヴアンツエッチ事件

サッコ・ヴアンツエッチ事件に就いては、巳に外國電報に出たこともあるが、僕たちはこの事件が世界のプロレタリアにどれだけの反響を與へたかを見るとき、今から十何年前日本に起つた事件のことが聯想される。その時パリの主義者たちは日本の大使館前で約一箇月に渡る示威運動をつづけ樣に續けたことがある。こん度もイタリアの無政府共産主義者がアメリカで死刑の宣告を言渡さると同時に、世界のプロレタリアは一齊に起つた。そして到るところの都會でも地方に於てもつづけ樣の大示威運動を猛烈に開始してゐる。現にパリで、何者か知らぬがアメリカの大使宛に香水箱を送つた者があつたが、その中に潜められてあつた爆彈が幸か不幸かわづかのはづみで大使の一命を助けてやつた。大使と令孃が外出の歸り階段を昇つてゐると、大使の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

部屋にあつた包みが自然と爆發してそこらのガラスを目茶苦茶にした。そして、危い所で一命をとりとめた。だから言はぬことではない。他人がパンや藥がなくて困つてゐるのに、香水などをつけてゐる貴婦人令孃たちはよくこんなことに遭ひ兼ねぬものでもない。何故世界のプロレタリアはこんなに執拗に憤慨してゐるが。それはかうだ。全く無實のサッコ、ヴアンツエッチ兩名のイタリア人を共産無政府主義者なる故に普通の殺人犯として死刑の宣告を下したのだ。(事件の眞相及び兩人物の經歷に關しては、何日か言はうと思ふ)。かうなつて來ると、世界の藝術家たちも默つて居れなくフランスではセヴリヌ、ロマン●ロラン、アナトル●フランス、アンリ●バルビユスはこの不祥事件に對し、アメリカ政府は速かに特赦を與へよと大統領ハーディングに打電してゐる。

マキシム●ゴーリキとエスペラント

昨年の正月モスコウに行つて來た或る外國新聞記者の話だ。彼れはゴーリキの宅に二日も宿つて來た人でエスペラントにはあまり興味を持たぬ男だが、そのことに就いてゴーリキは彼にこんな話をしたと言ふ。

「君はそういふが、早い話、飛行機だつて潜航艇だつて、遂ひ昨日まで空想の空想だと言つて問題にされなかつたぢやないか。エスペラントは飛行機と同樣に、潜航艇と同樣に、決して空想でないことを完全に證明してゐるよ。僕の知つてゐる男が、歐洲の各國をエスペラン國で渡り歩いたが、結構それで通つたと言つてゐた。こん度出來る宣傳者養成學校でエスペラント語を採用することになつてゐる……」

寄贈圖書雜誌

壞人。現代文學。ロシア文學。表現(創刊號)十萬部賣れぬとか云ふ方に非ず)。宗敎と藝術。社會主義研究社會政策時報。我等。ナロオド。文藝旬報。藥。曲水。俳諧文學。勞働者。演藝。近代生活。新組織。詩聖日本詩人。炬火。新詩人。無名。新樹。狼烟(鬼權の門前十一頁削除されあり)尺土。解放。野依雜誌。太陽。痛快。枯野(新年號)國有鐵道ビラ(物騷な繪だ)。ふらんす。セキハイ

愛の翼 (井上康文著) 詩人會
開かれぬ扉 (坂本石創著) 恒星會
大浦兼武傳(記念事業會編纂)博文館
絶對の慈悲に浴して (野依秀一著) 實業之日本社
世界の魂 (福田正夫著) 一步堂
空に指して語る(內藤辰雄著) 天祐社
山澤榮子畫集 大阪新世界ワイ文具店

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

地方欄

▽社會思想の田園的浸潤としての小作人組合

一片のパンが人間最後の生命を左右する場合にそこには何等の法律の存在もなければ勿論倫理的考察を持たう筈はない。最近吾國勞働運動に於て都市の工場勞働者は幾多爭闘の訓練と經驗により、當初の個人的要求なる賃銀問題は漸次產業自治の社會的要求に變化しつゝあるに、唯一千五百萬の農業勞働者は三千年來一個の忠良なる小作人として、誰一人不平等を口にする不心得者は曾つてなかつた。税金は泣き泣き出して來た。戰爭が始まつたと云つては掛換のない可愛い倅を殺した外に、割増の税金をやたらに徵發されても人の良い農民は默つ等の祖先は斯麼事には何等の不て居た。吾思議も寸毫の矛盾も感じなかつたほど生活に對する常習犯の前科者が多かつたのだらうか。この有難い先覺が現在地球上に殘した唯一の財產は多くの貧しき人々を、貧しきが故、弱きが故に飢ゑの鬪末窟に導いた戰慄すべき無智より釀成されたる實に罪惡の温床其れ自身であつたのだ。

何時の間にか强い者は弱い者を支配し金持ちは貧乏人を奴隷にして虐げて居た。有史以來多くの人々の「申し合せ」は常に金持ちの都合のいい樣に造られて來た。金持ちの造つた「社會的申し合せ」に依つて貧乏人は支配されて來た。極く手短かに云ふと常に貧しき者は人間生活に交際負けをし多くの犧牲を拂つて來た。三千年もかゝつて拵へ上げたのがこれだ。「社會的申し合せ」は法律となつて殘され、經濟的に殘されたのは無產階級の勞働者であつた。この金持ちの作つた申し合せなるものに仲間はづしにされたからと云つて貧乏人は蒼くなつて騷ぐ。これは一體怎うした譯か。

先日も原敬とか云ふ男が日本の東京で殺されたと云ふ噂がある、何でも殺害者は年少の男で場末の或停車場の轉轍夫だつた。この少年は大罪人として新聞紙は盛に指彈し一方原の生前の美德を口を極めて推賞した。新聞によつて一夜の内に創作された所謂智識階級（金持ち―或は手先の官僚）は自分等が先に造つた申し合せを忘れて、或は逆上の結果或は打算の末か「人間一人を殺した場合云々の申し合せ」以上に彼の少年を制裁し尙當該屬吏に最極刑の鞭撻を加へた。これでいいだらうか。この時日本といふ國には否といふ一人の哲學者もなければ倫理學者も存在しなかつたと見える。

ところが不思議なことが何一つ突發した少年の居つた停車場の驛長が直ちに罷免された。理由は監督不行屆といふ名目だ。斯麼監督が行屆く驛長が日本に何人居るだらうか。一々喧嘩をしたと云つては責任を負

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ひ振拂ひをしたと云つては責任を負つた時にはやりきれたものではない。鐵道に起つた內部的事項でなくて對社會的の個人の責任迄負ふといふ不合理は毫もないではないか。この問題の第一に責任を負ふべきは本職の警視廳があるではないか、岡とかいふ總監が涼しい顏して居るのに何の爲めに驛長が罷めさせられるのか？驛長が罷めるなら殺害の現場に居合せた否見送りの家來共は腹でも切つて詫びなければ相濟むまい、況や鐵道大臣の元田とか云ふ男は原の側近く警護して居たといふではないか。原は斬られたが其後腹を切つた乾分の話は一寸も耳にしたことはない、現在存する「申し合せ」はざつと恁麼ものだ、一體これは恁うした譯だらうか、これは都會に起つた一つの實例に過ぎぬ。又引續き不屆千萬な農民問題が御膝元からほど遠くない多摩川の上流府中町を中心として所轄大國玉神社の神罰も忘れてか八百餘の不埒者の小作人共が地主樣に對して空前絶收の大それた反逆を企てた。

由來東京府下北多摩郡府中町及多摩村十三字（八幡宿、京所、新宿、本町、屋敷分、府中分梅、芝間、矢崎、谷戸、下モ川原、（是政、東西、中の三部）は遠く德川幕府以來地味の肥沃ならざるに反し地主の搾取は甚く小作人窮路に泣かして來た。現在小作人は府中町四百八十人多摩村三百五十人府中町の矢島藤助を始め大小取混ぜ地主階級の者總勢百九十七名小作總反別田畑五百町歩田平均三俵入付へ（俵四斗入）この地方は最上收穫五俵半或は六俵の平均である、畑は舊來の慣例により金納となつて居る。地主が最初小作人に土地を貸與するに當り「天災其の他の事情の爲小作料の減額等は毫も申す間敷云々」といつた小作證一札に及び剩へ平心低頭地主の機嫌を伺ひ吾勝ちに地主の權門に驅せ參じたものだ。ところがこの愚朦な小作人の間にも鳥が鳴いて夜が明ける時が來た。從來地主の恩惠に生きて來た農民は權利に生きんと絶叫し出し最近小作心理の一大急變を來し始めた、地主が人間なら小作人も人間だ、小作人が働いて地主が遊食する理由はない。

俺達は汗水を流して耕作の結果出來た物を最初に地主に納めるのは間違つて居る。小作人の食つた殘りを地主に年貢として送るのが順序であるなんて不心得者が勃々出て來た。

偶々本年實入期四十餘日の降雨の爲稻作減收に機會を得忽ち地主對小作人の紛擾が隨處に驀然として十月二十二日に勃發するに至つた。

利害を共にする農民は誰云ふとなく奇々協議を開き數人の集りは字の集りとなり字の集りは忽ち村の輿論となり會合となり終に收穫時に至り要求の一致は期せずして必然一大團結を創造するに至り百九十八人の地主に對し左の公開狀を書留にて十月二十二日午前九時郵送し即時確答を促すと共に小作人團體の決意を仄めかした。

（以下公開狀參照のこと）

此の時內々小作人團體の形成を感知せる地主連は緊急地主會を祕密裡に召集し府中町長桑田某矢島藤助の獻策により二十六日小作人代表者なる矢島甚吾宛に左の如き回答が齎らされた。

「元來諸君との小作關係は個人的の物なれば今回の如き關係としての交涉は地主は斷然拒絶する云々」

の內容であつた、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

この横暴なる飛報に接した小作人は滿場一致前記公開狀に對し關係交渉を拒絕せる地主の誰なるやを確めんためる、拒絕者連記の地主名の確答を町長にして地主なる桑田英助及矢島藤助宛に再び書留にて即答を促したところ、越えて二十七日午後何等確答なきため豫報の如く承諾と認め八百餘名は各自鎌入敷日にして全部收穫を了した。

この時同町在住の數名の新聞記者の斡旋により種々妥協の結果雙方の面目を立つることに協定、結局接衝數回に渡り地主側は一俵に付七升五合の負引をし小作人側は目的貫徹の故を以て穩かに聯盟團體を解散する條件の下に、郡役所樓上に委員相會し無事手打ちをなし一方小作人聯盟は凱歌を舉げて解散したのは十一月三日の事である。

然るに問題の解決に安堵せる小作人が愈々十一月下旬小作米納入に際し地主側は俄然前言を食み橫暴にも一割減を固守して讓らず亦々紛擾は、再燃し地主の甘言に乘せられ團體を解きたる小作人は憤激其の極に達し、急遽同志に檄を飛し前委員協議の末十二月一日午後二時同町府中座に於て府中多摩兩村聯合小作人組合の發會式を擧ぐると共に大會を開催規約其他の組織に種々申合せをした。

（別紙參照の通り）

此の日大會中に地主側は續々として七升五合承諾の申し入れをなし來り大會閉會間際には十數名を數ふるに至り漸次事實に於て要求を承諾の曙光が瞭然と見えて來た。

豫め內務省より嚴命を受けたる東京警視廳では勞働課員總動員朝來府中に飛躍を試みた、平口署長以下三十餘名現場に臨檢嚴重警戒の內にあつて滿場立錐の餘地なき會場にて左の決議をなした。

「吾々は七升五合負引の貫徹を期し橫暴地主に對し飽くまで吾等の生活を確立すること」

署長の眼は異樣に耀いたが怎うすることも出來なかつた。生活の前には弱い百姓共も當局が恐くなかつたと見える、この日大會應援の爲全日本鑛夫總聯合會より加藤勘十勞働學校講師小泉鐵、外正進會和田英太郎外數名の辯士が出馬した。

孰れもこの橫斷組合を祝福し勞働階級の猛進を鼓舞し自覺を促した。和田英太郎の演說中止は（顏付け）でやつたとの批難が多かつた。

一二の檢束はあつたが大會は盛會裡に無事四時終つた。

工場勞働者の爭議は今や農村問題に飛火し、全國に渡り小作問題の紛擾を惹しつゝあり、勞働問題の中心は農民問題を中心として將來一大階級戰が惹起するのは明瞭な事實である。金持の案出せる小作法は小作人の物ではない、都市の工場勞働者の如き進路を辿り現下諸所に勃發せんとする小作問題は、究極するところ產業自治に到達せる時始めて眞の解決を見ることであらう。

地主の搾取にやりきれなくなつて、眞に「死に物狂ひ」になつた時に運動は眞物になつた時であり、其の時は組合員誰もが指導者になつた時である。

近く實現さるゝであらう農民の自由と幸福は、農民それ自身を措いて解決する者は他にない、一千五百萬の農民の血と肉が最後の解決の武器でなければならぬ。

先覺や金持ちの「申し合せ」は決して農民の自由と幸福を齎す何等の權威なく從つて價値なき殘骸であるのに氣が付いた時始めて無產階級の生活が保證さるゝのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

小作勞働者現實の敵は地主階級であると誰もの小作人が考へて一意其の對應策に餘念のない狀態である、地主共は小作人より搾取せる金を以て事業に投資し地主として儲け尙其の上に企業家として資本家の享樂をむさぼる輩なのだ小作人の現在の爭ふ目標は漸次變化され行き最後に現實の地主より一層慘虐なる大地主の即ち地主の「元締め」が背後に控へて居ると云ふ事が感知された時に始めて自由と幸福が得らるゝと共に唯一の武器なる血と肉が役立つ時である

公開狀

謹啓秋冷之候益々御淸榮之段賀上候陳者本年も已に稻作收穫の時期と相成申候處御承知之通り雨天續きの爲め收穫の減收を憂慮致し居り候處果せるかな試驗的に實地坪刈を行ひ申候結果意外の不作にて今更驚入申候

要するに如何に增收に苦心努力するも天災より來たる增收は人力の及び難き處に候之れを具體的に申上げれば實入時期に入り四十日餘りの雨天續きの爲め遂に實入らざるものに候

終に芝間上も川原、是政、矢崎、分梅、本町、屋敷分、新宿、八幡宿、京所、番場、片町の府中地壹帶の坪刈實收の有穀を申上げれば一石面の耕地に於て七合平均三俵面の耕地に於て最下壹升二合最下等七合平均三俵面に於ては九合五勺に候是れを平均坪刈實收の九合五勺を俵數に直せば三俵二斗二升五合と相成る勘定に御座候

以上は實際の收穫に候故に三俵納米とすれば差引二斗二升五合が小作人の利益となる勘定に候此の二斗二升五合を以てしては當抵一反部貳拾圓內外を要する生產費を償ふに足らず

況んや坪刈實收七合八合に於てをや誠に悲慘の極に候

殊に本年の畑作は一般不作に終り養蠶は收支償はず缺損に缺損を重ぬる始末にて一縷の望を米作に掛けたる處天潜れを利せず斯く相成候次第御憐察被下度候

就ては甚だ勝手爺數く存じ候得共左に具體的負引量を申上候間御同情御聞濟み被下度候

◎四斗入の內壹斗を貢引くだされ三斗俵にて納入すこと以上の御願は餘りに突然に候得者御疑問の方々も之有る事と存じ候間來る十月二十六日まで一般鎌止めをなし十月二十五日二十六日の兩日小作人一同府中町蓮乘寺に集合致し居り候間二十五日二十六日の兩日中御足勞ながら實地坪刈實收を御試驗被下度萬一御足勞無之き場合は御承諾を得たるものと存じ二十七日より鎌入り可仕候間左樣御承知相成度候

尙末ながら御了承を得度き事は決して利益的慾望より集合結束して同盟運動を起すものには無之眞に不作の結果此擧に出たるものに候間誤解の無き樣願上候

要は只刈取り時期の切迫の爲め斯く申合せ候次第不惡御了承被下度候　早々

大正拾年拾月貳拾貳日

各字小作人總代

矢部甚吾

小作組合組織の經過と所感

組合長　矢部甚吾

吾が府中多摩兩町村の小作組合は小作權の確立を圖り利益分配公平を期せんが爲

め地主諸君と協調をなし、一面輿論を喚起して小作法の制定を速かならしめ各府縣の小作人と相呼應し生活安定の保證を獲得する事に於て正に先驅たらんとするものなり

自今各府縣に小作爭議の頻々として起れるは實に國家の不祥事なりと雖畢竟するに頑迷なる地主階級が過去の因習に捉はれ自我的時代後れの强制的手段方法の下に小作人に威壓屈服せしめんと欲するが爲めなり即ち人權の無差別平等と云ふ點を無視せるが最大の原因たらずんばあらず

吾人小作人が本年要求せし小作米の貢引は五十日餘の雨天連續にて自然減收を來たし止むを得ず現出せしにも不拘物價の騰貴と國費、各町村費、社交費等の負擔を口實として容易に承諾を與へず果ては新聞記者團の仲裁に依り辛ふじて解決を見るに至れるは頗る遺憾とする處にして人權を無視せるは勿論德川時代の舊思想に捉はれたる階級觀念の所謂現實曝露なり近年政費の著しく增加せしは吾人又是れを認む、從つて是れが負擔者たる地主階級の苦痛又た能く之れを知る、然れども政費の增大するは畢竟するに地主階級の怠慢より來たれる自然的結果なりと吾人は斷ぜざるを得ざるものなり、行政、財政、税政を整理して經費を節約し負擔輕減の策を取らざるは抑も愚ならずや國、府縣、町村等の財政は殆んど地主階級の獨專にして、之れが增減の自由は地主諸君が欲する儘に左右し得らるゝにあらずや

彼の高級官吏の俸給、會社重役の俸給並に其賞與金の特に過多なるを知らざるか俸給的富者階級の購買力にして衰ふれば物價は自然的に引下げ得らるべし、其購買力を弱める手段として俸給の三分の一なりとも、强制貯金をなさしめ、是れが貯金を流用して、肥料製造販賣の資に供し、肥料專賣法を定め、煙草の如く政府の專賣にし其價格を低廉にし小作人に廉賣すべし、而して小作人の保護奬勵を爲せば食糧の豐富充實の一大平和境は現實にせられ小作爭議と云はず勞働問題の如き朝飯前に解決せらるゝに至らん小作人を愛するは實に國力致富の一大捷徑なりと吾人は斷ずるものなり

畢竟するに吾人が小作組合の目的は國力の充實にあり一般的民衆をして文化の惠光に浴せしむるにあり

而して當面の事業としては小作條件の當不當を審議し是れが改善を圖り地主對小作人の爭議を圓滿的協調の下に正當に解決せんが爲めなり、徒らに天災的自然減收の場合の如き其收穫を調査し地主及小作人の分配をして最も公平ならしむるにあり

進んで地主諸君に向つては國費の節約、物價の引下げ又は農事の改良指導等我が農界の爲め大に硏究努力せられん事を切望するものなり

小作組合申合規約

第一條　本組合ヲ小作組合ト稱シ事務所ヲ五五七五番地ニ置ク

第二條　本組合ハ小作人及ビ自作兼小作人ヲ以テ組織ス

第三條　本組合ハ農事ノ改良發達及地主小作人ノ協調ヲ以テ主眼トナシ小作條件ノ當不當ヲ審議シ之レガ改善ヲ圖リ生活ノ安定ヲ期スルヲ目的トス

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第四條　本組合ニ左ノ役員ヲ置ク
一、組合長一名、副組合長各字ニ一名
二、各字毎ニ世話役若千名
三、各字毎ニ會計係一名
但シ役員ノ任期ハ各二箇年トス
第五條　役員ノ選擧及權限
組合長、副組合長ハ世話人中ヨリ世話役會ニ於テ選擧ス、世話役ハ各字ニ於テ組合員中ヨリ選擧ス、組合長ハ本會ヲ統轄ス、副組合長ハ組合長ヲ補佐シ組合長事故アル場合之ニ代ル世話役ハ本組合ノ協議事項ヲ審議スルモノトス
第六條　本組合員ハ維持費トシテ毎年各自耕作ノ反別ニ依リ一反歩ニ付金十錢ノ割合ヲ以テ米麥ニヨリ納ムルモノトス
但シ水田ハ米（十一月）畑ハ麥（七月）納ムルコト
第七條　本組合ハ毎年一回一月總會ヲ開クモノトス
但シ必要ニ應ジ臨時總會ヲ開クコトヲ得ルモノトス
第八條　第三條ノ目的ヲ達スルガ爲メ左ノ事項ヲ行フモノトス
一、地主ニシテ不當ナル小作料ノ引上ヲナス場合ハ協力一致適當ノ對策ヲ講ズルコト
但シ頑迷ニシテ溫情ナキ强制主義的地主ニ對シテハ別途ノ方法ヲ以テ反省ヲ促スコト
二、天災事變又ハ收穫ノ意外ニ減收ヲ來ス場合ハ地主ニ對シテ小作料ノ低減又ハ負引ヲ交渉スルコト
三、耕作地專屬ノ橋梁及ビ道路ノ破壞ヲ修繕シ堰渫、排水等ヲ完全ニスルコト
但シ破損修繕ノ負擔ニ堪ザル時ハ關係地主ノ寄附又ハ援助ヲ乞フモノトス
四、組合員病氣又ハ不時ノ災難等ノ爲メ耕作上手廻ラサル場合ハ各字ヨリ若干名ヲ指名シテ小作ノ手傳ヲナスコト
五、小作物ニ被害アル場合之レガ原因ヲ調査シ驅除其他ノ方法ヲ以テ相當ノ施設ヲナスコト
第九條　本組合員ハ本規約ヲ誓ツテ嚴守シ之レガ實行ヲ期スルコト
第十條　本組合員ニシテ本規約ニ違背スル時ハ違約金ヲ徴收シ又ハ絶交ヲナスコト
但シ違約金ハ金五拾圓トシ違反者ヲ出ダセシ部落役員ノ連帶支辨トス

▼故村より▲

京都で突然お別以來慘虐な浮世に押流されて、遂々生れ故鄕に吹き寄せられました失業者が歸農することは各々異つた意味で誰も望んで居る事です。家なく土地なく農具なく小作權のない勞働者に歸農は望んで得られることでせうか。なまじか都會生活の明みを見て來た私に食ふ爲めの仕事がないのです。すつかり農村に同化しされないのは仕事がないのです。農村に同化することは文明のすべてに目を閉ぢることです。今親戚に身を寄せて此山の家で冬籠りして亂れた虐げられた氣分丈けでも靜調を得たいと希つて居ます。

遙東半島の死火山に對峙して、湖近くく山を負ひ。湖畔に渡る村々を一望に眺め得られる丁山の麓りそこに息づく此小さな部—

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

落は私の幼い時から好きで〲たまらない處でした。疲れ苦しみ、憤り狂ふ、殘虐な都會生活の荒びに幾度か此幼の詩境に逃れたことでせう。アイヌ時代から多くの史跡と戰國時代のローマンスを持つた城址のこの小さな部落、樹のうるはしい美眸の多い此部落。泉の湧く鱒の美味い此部落。水の音、青嵐の音、山彦すゞ木の音、金の音山鳥の啼音、遠海の唸り、かすかに瞬く燈臺の光り、沖に霞む死火山を寫す湖の色―夕映に浮く半島を照す湖面の光、霙に煙るM山の裾、はては草屋を洩るゝ秋の夕べの煙まで、くだ〲の追憶が、教室の窓から事務室でのペンの先きから、工場で農園で幾度か私を自失させたことでせう。

武藏野に美的百姓を訪れ、八瀬大原の牛の啼音に泣き、宇治嵐山の川舟の中、長瀞上流の探鑛の小屋、小松島のデッキの上、泯々の身の何處へ行つても此幻影がつき纏つて居ました。それが今、目のあたり毀される現實の惡感が裏切られた焦燥に惱まされて居ます。バケツを擔いで泉に水くむ乙女や泉の流れに大根を洗ふ若者を見ても、青春から流れる粗野な情緒をむさぼる様に探し求めることがありますが「無駄な努力」を嘲ける理性に邪魔されて仕舞ひます。「無智への反抗」情操の破産は、喜びか悲しみかたゞ焦燥に燃えます。

一度明い都會文化に觸れたものからこの農民の生活狀態を見るとたゞ〲驚くより外ないのです。どうして泣かずに生きてるでせう。どうして泣いたまゝに生きてるでせう。私は過去數年間百姓生活を呪へつゞけました。愛するが故に呪ふた。爲政者、ブルジョアジーが此尊い生産者を「動物」として顧みないのは當然です。農政學者、文化運動者、人道主義者達へ私が冀ふのは、たゞ一日でいゝ「あの煤けた納戸に一緒に寢てあの泥と塵を浴びて、一緒に稼いで食つて見るがいゝ」と。其人達の一日の難行苦行が現在全國の小作人―八百萬の日本人の一生を貫いた實生活なのです。あゝ農民文化―、それは地主の息子―美的百姓―が玩ぶ夢なら「言葉」に過ぎません。百姓は田畑を作るより外何者をも知らなかつた。百姓は代々何人をも信じて居なかつた。百姓の注意力と智識とはたゞ「天候」のみに注がれ盡して居た。百姓の轉職は自分の生活の何であつたか覺らせる。仲間の轉職が殘つたものゝ地位を覺らせる。

「動物」の作るものが日本人にとつて何であるかを眞に「動物」が知つた時、最後まで忍ぶことを意識して起つた時「最後まで忍ぶものは救はるべし」げにそはすべての社會運動の最後であり、すべてを救ふ時であると思ひます。

私の目に映じた農村の經濟生活を檢べて見ますと、農村は明かに破産して居ます。農村の危機は逼つて居ます。農村とはいつても、地利や地點土壤の關係で非常の相違があり、適確に統計を得る事は困難ですが私の村の周圍の事情から得た私の臆測を概算して見ますと。左の様な數字が出ます。生産地で一石三十七圓五十錢では都會の人には可成打擊の時價でさへ百姓にはこんな狀態になります。

	純小作人	自作兼小作	自作農
所有田反別	—	八	二〇
小作田反別	一五	一〇	—
自作收得米	—	一六	四〇
小作收得米	一〇・五	七	—
計	一〇・五	二三	四〇

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

時價換算	三九三・七五	六三二・五一	一、三〇〇・
一ヶ月當	三三・八一	五一・七一	一一五・
耕作人數	二・五	二・五	二・五
家族數	三・	五・	五・
一ヶ年飯糧米	九	一三	一五
勞働時間	一三	一三	一三
一日勞働賃	・四四	・六四 諸税差引	一・二七 同

私の村で二町歩の小作は大小作人に屬し馬か舟其他操業の設備が必要です。馬、肥料、種子、農具設備等の諸經費を計上しない代り藁其他の副産物を計上しません。大作人に屬し諸設備を完全なものと見做してさへ、一日四十四錢の生活しか出來ないのです。況して小作人に至りては推して知るべしであります。

然し乍ら實際は大作人や自作兼小作人の收得米は全部又は過半は一ヶ年の飯糧になつて仕舞ふのですから米價の高騰には大して影響はないし小作人に至りては一ヶ年の飯糧さへ不足なのですから、米價には殆ど影響ないと、つていゝのです。又家族數は實際これ以上になつて居ますから農村の生活狀態はどうして人間「人間」の生活として見ることが出來ませう。このまゝでは小作人は生きて居られぬのです。ですから私の村では兼業の爭奪が盛んです。參考の爲め他の職業の勞働報酬を檢しますと。

職業別	一日平均收入	一ヶ月	平均勞働時間
荷馬車屋	三、五〇	一〇五	一〇
人力車夫	二、〇〇	六〇	一〇
運輸人夫	一、五〇	四五	九
小漁業	二、〇〇	六〇	九
魚小賣人	一、五〇	四五	九
大工	二、〇〇	六〇、〇〇	八
屋根屋	一、五〇	四五、〇〇	九
製材職工	二、〇〇	六〇、〇〇	八
製材人夫	一、二〇	三六、〇〇	九
保線工夫	一、五〇	四五、〇〇	九
農業人夫	一、二〇	三六、〇〇	一〇
漁業人夫	一、二〇	三六、〇〇	一〇
藥工品工女	、七〇	二一、〇〇	九
同自宅手工賃(男)	、九〇	二七、〇〇	九
同　(女)	、六〇	一八、〇〇	九
農僕(下男)	、四〇	一二、〇〇 但シ食糧付	一三
下婢(小地主)		四、〇〇 同	一〇
下女(宿屋料理屋)		八、〇〇 同	一〇
參考			
驛夫		三九、〇〇	九
役場員		三〇、〇〇	八
敎員		四五、〇〇	八
郵便局員		二七、〇〇	一三

私の村は耕地反別と人口との比較は農村といふ資格はないので、地點の關係上職業が大へん復雜になつて居ます。從つて小小作人で此等の兼業を營んで居ないものは一人もないのです。購買力の盛んなのは之が爲めであります。小作人は他村の農業人夫を傭つて小作させ自身は他の有利な職業で働くといふ傾向を呈して居ます。其が爲め田地が荒廢し年々毎に收穫や米質が劣惡になつて行つて居ます。

飜つて地主側の收入を檢しますと、

	所有田地	收得米	時價換算石(三七、五)
小地主	五〇	六〇	二、二五〇
中地主	一〇〇	一二〇	四、五〇〇
大地主	一〇〇〇	一、二〇〇	四五、〇〇〇

一反歩時價八百圓にすると此利子は五分五厘强になります。右の概算に據つても小作人勞働報酬を一日一圓とすると五十五錢の損失を招き地主の利廻り一割とすれば四分五厘の損失を招いて居ります。斯の樣に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

破産した農村の經濟狀態は資本主義の原則た都會より以上の加速度を以つて流れて居ます。金融の道ない農村では銀行の大株主又は重役なる大地主も、田地を擔保に高利の貸主も同一人です。自作農や小地主は家庭に何等かの變事のある毎に擔保の田地は高い利子を拂つた上に十五六割安い價格で大地主の手に集收されるので私の村でも小地主で昔ながらの狀態に居るものは一人もないのです。

米價は地主にとつて利廻りに重大の關係がありますから。縣農會、米穀檢査所に命して米質の檢査や乾燥の强制をやつて居ますが夏の半で糧米を無くして居る小作人にとつては「農民」の名に依つてなされた不賣同盟の高い米を買つて食つでる狀態です地主は利廻の損失を口實に小作料の遞減には應じないが、今日時價其儘田地を買占むる不敏の地主は一人もなく、安い抵當で田地と資本の集中にあらゆる機關と手段を用ゐて居ます。私の村では小作人は他に轉業して小作が副業の地位に變つて居ます。右の様な高率の勞働報酬を保ち得るのは同業組合即ち漁業組合、鮮魚小賣組合、屋根屋組合、大工組合、小賣商組合、荷馬車組合俥屋組合、床屋組合、料理屋組合、米穀仲買組合、運輸人夫組合、運送店組合、精米組合等の爲めで殘つたものが唯一つ小作人組合丈けであります。

是等勞働者の中には小地主以上の收入で生活をして居るものがあります。私の村では十町歩以上の地主は居ないので、種々の悲劇の中に他町村の大地主の手に田地を奪はれ壞滅を急いで居ります。右に列擧の職業は皆一時的のものでいつまで其好況を保ち得るものでせう。醒覺しつゝある百姓が一度人間的の生活し離れか再び動物的の生活を望むものでせう。此破産の農村は社會的の大恐畏として危機が目前に迫つて居ます。「働かざるものは食ふべからず」と此現實の教訓の前に、勞働にたゞ餘念のない村人を見ると拜みたい様なかきむしりたいやうな焦立ちを覺えます。あゝ「最後まで忍ぶものに救はるべし」。

一九二一—一一—二八(刹州)

▼仙臺市のレッドムウブメント▲

三上芳郎

○先夜の——十三日夜の——當市の赤化協會主催のレッドムウブメントは大へんよくゆきました。會は數十分で解散にはなつたんですが、私なら成功したものと思ひます。

なぜと云ふに、あゝした運動には「純な嚴肅な、眞面目な人間性」といふ心のある事や、又その運動は兎まれ必然的な諸條件によつて驅り立てられた結果發生したものであることや、又それらの運動を取締るといふ現今の支配階級の中には如何に非人間的な根性が潜んでゐるものであるかといふ事等を、鈍感なる民衆にも可なり强く印象してくれたらうと思ふからです。少くとも人らしいハアトを持つてゐる人であつたならば——かうした運動に對しての智識と訓練との點から見てはたとひ幼稚園程度としかいへない程の人にしても——兎にかく先夜のあの光景を見た人は「生活の義しさを求むる此の要求に對して、何といふ非人間的の壓迫だ、何といふ暴力的不義の横暴だ!」と感ぜずには居なかつたらうと思ふからです。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○こんな意味での「成功」をお知らせしたら驚かれるかも知れませんが、「古沼のやうな沈著さ」をもつてゐる當市——前世紀からのヌシが吾が世顔に安住してゐる當市に於ての夫のレッドムウメントの反應としては、之れだけでも成功と云はざるをえません。

○當夜の會場の警戒は實にモノ〳〵しいものでした。「顎紐をかけて劔の柄に手をそへてゐ」取締役達は、先づ、入口のあたりに文字通り密集してゐたし、內部では之れ又一間毎に一人の割で立つてゐるし、それに「聽衆と同じ姿」ののも、會衆の何割といはれゐ程多く入りこんでゐたやうです。ですからウツカリ口もきけないのでした。なんでも人の話によると、日本海の海戰の時にウチの方は殆んど空つぽにして全海軍力を對馬沖に集めた時のそれのやうに、臨時の大召集をやつて近い郡部や市內をば殆んど空にして當會場を「保護」したらしいといふことです。(何年に一遍しかないといふ村のお祭に村の世話役がノボセ上つたといふ格ですね。ですから、血の出るやうな實人生の一光景といふよりか寧ろ舞臺の上のそれを見てゐるやうな戯曲的な氣がしました。)

○それに、會が始まるとます〳〵以てドラマテツクなんです。會は、當夜の主演者大杉加藤岩佐三氏の檢束に就いての司會者の報告に次いで、來援の黑色勞働會の二三氏の講演に移つたのでしたが、その言はんとする所は極めて——實に極めて——おだやかな當り前のことであつたにも係はらず、目醒し時計かなぞのそれのやうに器械的に繰り返へさるゝ「注意」「中止」の連發に皆妨害されて了ふのでした。その注意中止の取締り方と來たら、まるで「酒に醉つた村の巡査樣」が百姓の女子供に威厳を示すのに實によく似てゐました。

○こんな事ばかりですとお互ノンキにユウモラスな氣分で書きもし讀みもされるんですが、實に情けない嫌なことがあつたんです。それは、聽衆の中に紛れこんでゐた例の國粹會流の連中や、三文新聞の記者連中の態度でした。むろん國粹會流といつてもドンブリに鋭いものを吞ませてゐる程の凄さがあるわけではなく、せい〳〵一杯機嫌で騒ぐ位のところでまあ餘興的といへば云へるものでしたが、情けなかつたのは、三文記者連中がいゝ氣になつて彌次を連發してどつかの御用振を發揮してゐたことでした。記者ですからいつれ「御用」のものではあるんでせうが、いくら何んでもあゝした折にあゝした態度が、ノンキにも實在しえたといふことは、實に情けないことでした。尤も、會に少し油がのりかゝつて來た時、それらの連中は聽衆によつて言論的に征服されようとはしたのでしたが、その時丁度解散をくつたので、つひ征服し切らなかつたのです。殘念なことでした。

○當夜は取締役側も成功したのでせう。極めて靜かな解散の中からも二三人の檢束者を擧げるといふ功もたてたし、それらの人を公衆の前で擲ることによつて、取締側のマイナスな示威もかなり有効にやつたやうでした。その勝利の得意然としたシインを想像して頂くための一つのことを附け加へておきますと、取締役の人達は、入場の權利のある聽衆の多數を會場の門前で拒んだ上、しかも、學生らしいものに向つては一々その氏名學籍を訊してゐたといふ事實があつたのです。前途有望な靑年を「親切に」「善導」するためだつたんでせうね。

○あまり長くなりますから今夜は之れ位に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

します。「ヌシの棲む古沼」に投じられた「レッドムウメントの石」のたてた水音とその波紋とはまあこんなものでした。（十一月二十八日夜）

▼線香の淡い煙り▲

神戸にてヷガボン生

第三勞働新聞。艸の會。戯曲座。新開地。種蒔き社の諸君、十一月及び十二月號の宍明共三君の通信はかなり愉快に拜見した。そこで僕も彼の向ふを張つて、關西に於ける新らしい運動を書いて見たい氣になつたが關西と云つても、主として神戸のことだ。神戸の川崎爭議一件の迹は、君の方の創刊號に8T生君が庇のやうな懸にもつかないことを、麗々しい仰々しい見出しで書いてゐたが、あんな常識的な通り一遍なことを、「爭議の迹を訪れて」など、云ふ仰山な表題附で、よくも〳〵書けたものだと、その鐵面皮に呆れ返へる。

遮莫、神戸といふ都會は、扇港といふ名で呼ばれてゐる。扇を擴げた樣な形だからだ相だ。ところが、僕に云はせるとこれは扇港ではなくして、線香だ、線香の樣に細長い都會なんだ。そして總てが線香氣分だそれも線香花火のやうに、小さくとも鋭い火を發する奴なら良いが、佛壇に備える奴か、腰拔けの蚊を虐めつける程度の線香なんだ。隨つて、この都會から發する新らしい運動も、線香の烟のそれのやうな、細々とした淡いものだ。

「名は體を現はす」とはコケ者の言葉にしちや良く穿つてゐるよ。何處から何處まで線香氣分だからな。第一、市長の櫻井は、お上品な香ひを發する程度に過ぎない櫻井蚊取線香みたいな代物だし、福原の不見轉の玉代も線香で左右せられてゐるし、「扇港の空高くして」てなことを歌つて歩くニキビ面の學生は線香色の服を着てゐるし、まあ何から何までが線香萬能さ。

藝術上の新しい運動―を標榜して立つた「艸の會」と云ふ朗讀會の連中までが、線香に燻されてゐるのだから驚く。その證據に第一回の公開朗讀も、第二回のそれも、これまた線香の例にもれぬ細長い新開地の、然も抹香臭い「道德義會」といふ佛教の會堂でやつてのけたものさ。

「艸の會」で想ひ出したから、少しこの地の線香氣分の藝術運動でも書いて見やう。

この「艸の會」といふ奴は、「藝術の民衆化」を以つてそのモットーとしてゐる。そして秋田雨雀が顧問なんだ。まあ京都の「大學町のインテリゲンテイヤ」が寄り集まつてやつてゐる「カメレオン朗讀會」と、東京で秋田雨雀がやつてゐる「土の會朗讀會」とを眞似て、といふのが戀けりやその向ふを張つて、出來た若いサラリイメンの「眞面目な娛樂」なんだ。

ところがだ、その第二回朗讀會の時だつけ君の方の同人の佐々木孝丸がこの「艸の會」へやつて來てれ、「脚本朗讀の意義」てなことを喋つたまでは良いが、その席で、早速「種蒔く人」のガンダをやつてゐたよずるい奴さ。尤も聞いてゐる連中の中には何云つてやガンダと云ふやうな顏の方が多かつたがれ。餘談に亘つてゴメンナサイだが、兎に角この「艸の會」といふ奴が、民衆藝術の一部門としての、來るべき小劇場運動（小劇場運動は今でもある、てなことを云ふ奴は糞喰へだ。）の一歩としてやつてゐるのならば、僕は贊成もし、陰ながら應援もしたい氣でゐる。が、その爲めには同會の連中が、早く線香氣分から、道德義會な

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

どの形式的線香氣分はまあ良いとして、その本質的線香氣分から脱け出して了はれば駄目だ。民衆藝術を標榜する連中が、民衆の何であるかを理解しない限り、その民衆藝術運動は、竟に線香氣分で終り、その小劇場運動は竟に線香の煙りの如きものに終つて了ふ。僕は彼等の「用心深い民衆藝術運動」を嗤ふ。

　話が劇のことになつたが、この線香氣分の都會で、最も愚劣な線香式民衆藝術運動をやつてゐるものに「戯曲座」と自稱する一劇團がある。これはもと、パセイスム（こんなイスムがあるかないか知らないが）をマニエリスムで捏ねあげた繪を畫いて、フユーチエリスムを氣取つてゐた今井あさ路といふ畫伯が、レジツスールとなつて組織し、パルナス座と云つてゐたのだが、その後この畫伯が止して、別のレヂツスールが這入つてから「戯曲座」と改名したのだ。そんなことはどうでも良いが、秋田雨雀の「埋もれた春」を上演するかと思ふと、例のエロトマニアック白蓮の佛典ものをアラビヤ人のやうな扮裝でやつてのけ、そしてそのレヂツスールが、關西劇壇に於けるアムペシルの隨一である扇雀の脚本を書いて得々としてゐるのだから驚く、おまけにさういふ手合が、『扇港に於ける民衆劇、小劇場運動の先驅』を誇つてゐるのだから、そしてまたそれをありがたがつてゐる連中が多いのだから、愈々以て線香式だと思はざるを得ない。

　この線香氣分の都會で、辛ふじて花火線香の氣を吐いてゐるものは安谷寛一と和田信義との「第三勞働新聞」だ。ところが、先天的に惡口屋の僕のことだから、この新聞に對しても、一應惡口を云ふ必要を感ずる。安谷君に忠告するが、君が君の新聞で賀川豊彦のことを惡く云ふのは結構だが、その私行をあばくのはよくない。賀川が吾々の新らしい運動からは遙かに緣の遠い愚物であることは、彼の勞働者操從振り彼の「貧民心理の研究」彼の「勞働者崇拜論」を拜見すればすぐ分ることであつて、又、日本一のブルヂヨワ雜誌「改造」のアムペシル連中でない限り、誰でも認めてゐることだ。がさういふ人物に對して、否寧ろさういふ人物であるが故にこそ、その私行上のことまでをあばくと云ふのは、君自身のケツの穴の小さいのを示すことになるばかりだ。これは止した方が良い。――少くとも君の「第三勞働新聞」をヨタなものにしたくないならば。

　種蒔き社の諸君。

　君の方へ出す手紙が變なことになつて了つたが、まあカンベンして呉れ。この次ぎには京都か大阪のことを書くが、この通信のとゞめとして、新開地のことを少し知らせよう。

　一度みんなで遊びに來ないかい。良い所を案内するよ。東京の江戸川べりや、大川端にあるやうな一本二錢のフライやヤキトリは無いが、その代り安くてうまい鯨の「かんとだき」がある。この「かんとだき」を喰べて、コツプで二三杯引つかけて、それから線香のやうに線長い新開地の黄昏を歩いて見たまへ。正面に聳立してゐる資本そのものゝ權化のやうなガントリンクレーンの方から、兄弟のナツパ服が行列だ。誰でも「おい兄弟」と話しかけたくなるれ。ところが、このナツパ服の兄弟が、毒々しい色の新開地の眞中を、殊に聚樂館の前や、中央劇場の前を、空つぽになつた辨當箱を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

下げて、どんな氣持で歸つて行くかは、賀川の壇奈や、鈴木の先生にはお解りでないのだ。いやナッパ服以外のものには誰にも分りつこはれえのだ。何？藝術家には分る？ 糞喰えだ。藝術家がこの線香氣分の町へ來て分るのは、福原の線香の値段ぐらいなもので、ナッパ服の家の線香のやうな細い煙の味なんか分りつこありやしれえ。

それはさうと、もうぢきに正月だ。南の方も寒くなつた。僕もモウパッサンのブガボンぢやないが、この寒空に一人ぼつちでほんとに牛乳下げた女中にでも出會したいれ。

▼湖東支部講演會▲

（S生）

おゝ烈しい風……

悲慘な冬が罹災のこゝ北國秋田の小さな町五城目に音もなく、その白い牙のどん婪をほしいまゝにしてゐる――日ぐれの了賢寺の雪の上、その勢のかすかなれども。おゝ烈しい風……ビラは昨夜から今曉までの不知火君の苦鬪に依つて生れた嵐である。吹きめぐる風、おゝ烈しい風、第三インターナショナルが生れ出づる苦惱の一夜が明けた。幽靈の保守、偏見。猜疑の目の底にビラは生活を鑄直す熔鑛爐であつた。燃ゆる赤心の吐露であつた。

民衆文化講演會！第二回種蒔社講演會！十二年二十七日の市日に市場は色めきわたつた。急霰のすぎた後の白雪にビラの文字が眞赤に浮き出る……講演者、不知火、松治郎、友治、洋文、弘二、五時より、主催種蒔社支部。午後五時――暗黒が風の落ちた大空に生ま温い腹を見せて、暗い人影――饑えたる犬のごとき悲しい瞳を持つ良心の叛逆者の影を門前に立たし、徘徊さしてゐた。定刻、いかにも苦鬪であつた。然しやり通した不知火君の聲が三百燭の電燈の下を躍り上つて、自働車からの友治君の聲を、はつとそれと呼應した。心の歡喜はたましひをわなゝかす。「なに…ボクが、大丈夫よ」「何そんなもの」「やつ…初めて…」「久し振り…」六時、七時……

不知火君が立つた。開會の辭に昨夜からこの一瞬までの種々の暗鬪と會の主旨をぶちりと言ひ切る。「僕等を危險思想家と見てゐる――不安な、また底さぐりの様な氣分が溢ちてゐる―僕等は只事實を事實のまゝ赤心に依つてうごかされ、叫ぶのである。さアずうと前へ！―とび出して行つて火鉢を引きづり出しブルヂョアも、プチブルヂョアも、警察の人々をも前に引きづり出した。

生活即藝術といふ題で、生活を藝術にまで高めればならぬと説き、まづ生活の根本的解決からと累々と說き出す。一時間、ずつくり落ちついてぴたり聽衆と呼吸をあはして、やつ―とまくしたてる。

「また失敗つた、腹案なしの、つかれでさも一遍出てやるぞ……」と言つてゐた。

松治郎君「農民の步み」年來の苦心の農村研究及體驗の結晶に加へて、綿密な統計を指示しての、吐露だ。眞摯と熱誠が理を破つて聽衆に迫る！

「……農民が立つたら最後だ……。」さうだ！烈火となつて崩るゝ炭火をみつめて、庫裡の白い提灯の下で不知火君が胸を叩いて友治君を見る。……實際うまい――友治君はじつと考へつゝ、ことりうなづいた。同志と一味の一室の私語を奪ひ去つた一瞬があつて、やがて急霰が鳴つた。

友治君「無題」「松治郎君と重複する點が

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

多少ありますが……」と深い思索から來たたぐる容易しさで、ぴしぴし政治經濟問題を解決してゆく。殊にこの町には適切な問題ばかりであつた。然かも政治經濟の關係する總べての方面にわたつての深い思索が釀し出す、あの胸をえぐる皮肉である。そつ！そうだ、は……と弘二君を洪笑さし危いぞ！はうはう不知火君を悩まし、ええつくそつやつつけろ！と拍手さした程明快な理路の講演に、いつもながら手に入つたものだとそゞろ感歎する。

弘二君「僕は、土崎へ嫁を貰ひに來ました……文藝の方面は洋文君が」やつ！とう〱露骨に出た、出たと友治君が手を振る確かに聽衆すべてが期待し、納得した理路であり、明朗快活な話し振りで社會問題を手ぎわよく話しつゞける

「社會主義や、共產主義は危險ではない……」「すべて主義の人は眞劍になつてきた……」どうして君の熱誠に感動されずにゐられやう。それこそ君の眞劍な態度がばらりこの町の共產主義、社會主義の妖怪を切り落したのだ。

「誰も、研究しなければならない問題です」

聽衆はうなづくのであつた。おゝ君の明朗と快活と熱誠は君自身と共に種蒔社を紹介してくれた。

「おゝ寒い、」「寒いな」、金子君を壇へ送つた。

洋文君、例の急流の樣な撓ゆみない精氣と熱辯である。蒸く聽衆を感得させずむば不止ぬ熱辯である。民衆文化は君に於て能辯である。文藝思想方面を限りなく驅けまはつた君の精氣が爆發した――資本主義をまづ倒さなければならぬ！

無事に會は終了した。十時すぎた雪解のぬかるみを走る自働車を待つ間の我等の顔が眞紅に炭火によつて描き出されてあつたふつと誰やらが白い齒を、はゝゝと誰やらが笑ふ。「これでいゝんだ」「この次にはいゝぞ」「いゝ種が蒔かれた」が、やがて「どうしたらう自働車は」「不知火君」に變つた。

一味の一人が奔走したが、駄目だつた。此の時はまだ誰も知らなかつた。自働車はブルヂョア町長渡邊の所有であり、自由であつたのだ。

泥道が靴の弘二、友治君を惱まし、足駄の松治郎、洋文君を危くする。

「氣の毒だ、氣の毒だ」と一里八町歩らうとする不知火君と「歸れよ、昨夜もロクにれないんだらう、いゝから」と提灯の光を先へ先へと送りながら松治郎君が說くのだ「歸つたらどうだ。いゝよ、大丈夫だよ。君、イタリアの……」と友治君はやつ！と元氣よく話の先をすゝめる。「別にもう、譯もないんだから、歸つて休みたまへ。いゝよ、歩くときまれア平氣だ。」洋文君が手をのばして體の平均をとる。

「いゝ、態物語が出來たれ「おい松本」洋文君が顔をあげて弘二君を見る。

新設の軌道の上を躍り上つて進んで行く弘二君は「うむ」と言つたなり、北國の自然を暗の中に快活に呼吸してたらしかつた森山も、軌道に沿ふたまだら雪が持つほの寒い畑、二つの村、風のやうなにはとりの聲、汽車の音、低い空、田、停車場の灯、呼吸が汗ばむにつれて、よろこばしさが疲勞を醫した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

婦人欄

音響機(サウンダー)の音

電信局女事務員の獨白

大久保瑞惠

わたし達の勞働は男子の勞働よりもひどい。

同じ様に働いてより以下に酬はれてゐるからだ。

わたし達は、男子よりももつと多く働いてゐる。男子以下の弱い體質で、同じ仕事を强ひられるからだ。

音響機の音はわたし達に搾取の何物であるかを敎へる。彼を通じて打たれ受けられる幾萬の電報は、主として資本の增加、勞働搾取の露骨な實證であるからだ。

點字機の現字紙はわたし達に軍閥と權力との何物であるかを敎へる。彼を通じて打たれ受けられる幾萬の電報は、主として虐げられ、殺されたものを嘲る陰險な報告であるからだ。

弱きものは女性ではない。强きものは男性ではない。現字紙の上に、音響機の響きに、流れ亘る大部分の源が强きものだ。然も彼等は最も弱きものだ。何故なら彼等は誤まれる「時」の庇護に依つてのみ今の强さを保つてゐるからだ。

假面は剝がれねばならない。今、わたし達にはそれを剝ぐ力がない。時である。それを剝ぐ力は正しき時である。その正しき時を近づけるために努力するのはわたしたちのつとめである。

音響機の響きはわたし達に反抗を敎へる點字機の現字紙はわたし達に生の貴さを敎へる。貴き生は日光と共に存在する。淸らかなる空氣と共に存在する。そしてまたまどかなる眠りと共に存在する。わたし達には日光がない。淸らかなる空氣がないそしてまたまどかなる眠りがない。壓しつぶされた生である。在るものは壓しつぶされた生である。

埃りと薄闇と不眠と絕え間なき騷音と、無智なる「主事」てふ官吏の白眼との下に

誰か處女の美を誇り得るものぞ？

蒼白めたる皮膚の色を誇れ、荒らされたる肌のキメを誇れ、結核に冒されたる胸の裡を誇れ、そしてなほ、青春の血を失なひ婚期を失なひたることを誇れ、若し奴隷を誇らんとするものは！

小學校を出る頃、十四の春の頃、この世に自由てふ言葉の存在することを知つたわたし。嘆きであつた。自由てふ言葉を知つたのは嘆きであつた。知つた時は無きときであつたから。

自由とは言葉だけの存在である。

わたし達にあるものは何であるか？

音響機は反抗を强ひる。

點字機は奮起を促がす。

たゞ奪はれたるものゝ慘めさ、强ひる聲も促がす聲も、たゞ耳許の松風である。四十錢の日給！其處に太陽があるか、日光が在るか、然もわたし達は處女である。

數の力は大なる力である。大なる力は强き力である。誤まれる「時」の下に最も弱きものが最も强きものになつてゐる。

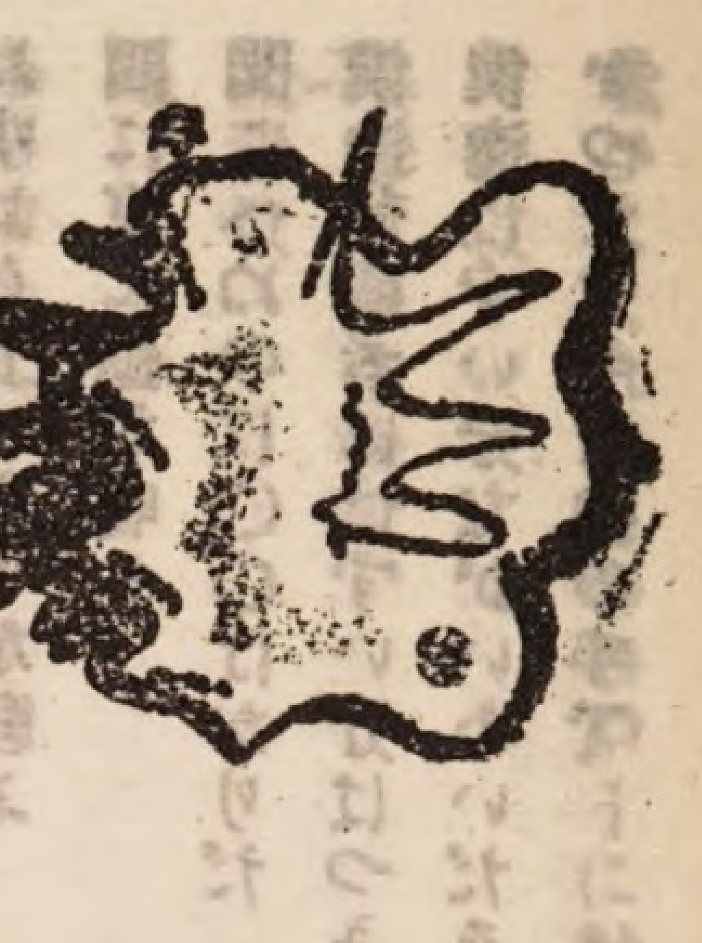
大なる力は集合の援けである。

集合の援け……

わたしたちには處女の誇り得る暖き肌もない。燃え上る血潮もない。すべては音響機の音とともに消え去つた。がわたしたちにはなほ大なる力を待つ「望み」がある。

そして大なる力は集合の援けである！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



聾人

目擊した事件 ―― 柏木Ｉ生

X兄

僕は先夜目擊した事件を君に吾げやう僕はそれを憶ひ出すとゾットせずには居られないのだ。

それは繁華なKの十字街多分八時頃だつたと記憶してゐる。

一人の若い小柄な男を三人の警官が散々に蹴つたり撲ぐつたりして巡査休息所に引きづり込んだのだ。

未だ宵の中殊に人通りはげしい所なので忽ち黒山の樣に人だかりがした。交番の中からは巡査の罵聲やはげしく撲る音がするのだ、僕は見て居る中にたまらなくなつてしまつた。一體その男は何をしたのだらうどんな罪があつてあんなにひどい目に會ふのだらう又巡査はあの抵抗力のない男を何故撲るのだらう。

一人の巡査は群る群衆を追ひ拂はうとして努力してゐるのだ。

しかし群衆の半ば好奇的な半ば恐怖を帶びた眼は遠巻に嚴重に閉された窓の方を向いてゐる。そしてそこからは依然として巡査の罵聲と劇しい物音に交つた可哀想な男の悲しいうめきが聞えて來るのだ。

僕は居たゝまれないで逃げだした。

巡査に誰があの男を撲ぐれと命じたのだ。何が巡査にあの男を撲ぐる權利を與へたのだ、恐ろしい强制力。

僕は其夜から一種の脅迫觀念に支配されてしまつた僕はもう平安な氣持で東京の街を歩く事が出來なくなつた。

僕はペンキのさめた交番や巡査のサーベルに恐ろしい憂鬱を感ずるのだ。

X兄

僕等の最大急務は自巳を完全な平和の領域に誘導する事ではないだらうか。しかしどこに平和があるのだ。

僕等は平和に對する自己瞞着を嫌ふのだ僕等はどこ迄も甘酔を是認し得ないのだ。平和は絶望的なものか？僕等はどうすればよいのだ。

僕等は文明の空氣に窒息しやうとする不安な細菌の一つに過ぎないのだらうか？

X兄、凡ては未來派の不可思議な動線だそして電車の響と自働車の[illegible]りばかりこうした黄塵の大空にたゞ奇怪な交響樂を奏してゐるのだ。

我等は何日まで盗族だ 相良卯一郎

盗族の法律に我等はいつまで
プロジャーが我利主義な規則にいつまで
束縛されるのだ
我等は早く〳〵
本然の道へ……行け
我等の祖先は何を略奪された？
誰が神秘な動かす事の出來ない
勇敢と相愛と團決一致とを

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

パラダイス實現のために

姫路　寺田路郎

「種蒔く人」非軍國主義號讀みました。同人諸氏の並ならぬ努力を謝します。矢張り同じく「種蒔く人」としての使命を感じてゐる青年です。第十師團司令部所在地てふいかめしい名前のついた姫路市のことですから市民全部の氣分がうかゞはれます只兄弟達を呪ひ・殺すのみを讃美してゐる彼等市民のために祈らずにはゐられません私は預言者ヨハネの立場からやがて來るべき吾々のパラダイス實現のために一微の力を注ぎ度いと思つてゐます。

西に東に鐘が鳴る

大阪　樋口住一

種蒔く人の發生を祝ふ
君達は君達の生れたと——
その事をハッキリと見つめて
よりよく上へ——を願ふ
西に東に鐘が鳴る
聞こへぬのは○○ばかりだ
僕達苦闘者にはずい分はつきりと聞こへる
僕達はずい分ながいあいだその鐘がききたかつた、今君達の手で　ハッキリとその鐘をついて與れた樣な氣がするモット確つかりついて與れ。

一夫の歌へる

加藤一夫

僕は種をまく——
僕自身の種をまく
それが何うならうと僕は知らぬ。

實を言ふと

大阪　田非象

恁うした雜誌や新聞にあり勝ちな短命を此の雜誌も亦荷ふのでないかしら？と懸念せんでもありませんが、實を言ふと命の長短よりも質の良いか否かが先決問題であり、此の點に於て僕は寧ろ短命ならん事を望みます。と云ふは僕等を或る程度にしろ滿足させて與れる程のモノは大抵は短命なのが常であるから。だが「研究」だけは例外として長命であり而も實質にも相當滿足してゐます。同人諸氏の健奮祈。

神戸の印象

金澤　勝目てる

S街の角の豪壯な劇場の上半面に
それはいゝ小春日の　日光が
降りそゝいでゐた。
黒人種の一人の男が
黒い勞働服を　着けたまゝ
何處を
あてもないらしく　歩いてゐた。
彼の頬は　こけて　淒い眼は
くぼんだ底の方で、恐ろしく光つてゐた。
一臺の自働車が
彼の後の方から　疾驅して來て
劇場の　前に　とまつた。
揮發の臭氣と　日光の中に　混亂する
無數の塵埃に
眞黒い男は
平然として浸つてゐた。
彼は　動かなかつた。
悠々と
降り立つた　それは又
眞白い　碧眼の　紳士と
同じ　茶色の　洋服の女。
いそ／＼として
肩を並べて
二人は
一等席の入口から
吸ひ込まれるやうにして姿を隱した。
闇の中に見る猫の眸のやうな
鋭い眼光が
眞黒い顏から
二人の後姿に

喰ひこまれたもののやうに射られてゐた。
それは いい
小春日の午後で、
太陽は
地に生くる
あらゆるものを
平等に
はぐくんでゐた。

眼玉が光る　金澤　示野生

貴誌の目次を豫告を見ますと、經營上尤ものことと思ひながら、有名に文字を飾られるよりは實質のある隱れたるプロ君やアナ君の創作論說をおまぜになつてはと申したいのです。
それにしても、光る眼玉は惡く憎々しくも誌面を穢しますれ。無捨と云ふも殘念です

眞赤に燃えたその時　秋田　少年局員

あんな小さな屑さへも
眞赤に燃えた其の時は
小さな「ストーブ」の上にある
茶釜の中の湯氣さへも
ボンボン暑く煮立てる

「はだか娘」の歌　後藤謙太郎

一九二一、九一八栃木分監にて

(1)雨が降らうがナ――この世の地獄でナ――
風が吹かうがナ――かせいでもかせいでもナ――
わたしや、炭坑のはだか娘ナ――
炭坑娘ははだか娘ナ――
バリ〳〵ナ、トコバリ〳〵ナ――
バリ〳〵ナ、トコバリ〳〵ナ――

(2)何の因果かナ――何うせこの世のナ――
はだか親がナ――仕組を變へなきやナ――
生んだわたしもはだか娘ナ――
わたし死ぬまではだか娘ナ――
バリ〳〵ナ、トコバリ〳〵ナ――
バリ〳〵ナ、トコバリ〳〵ナ――

(3)朝も早うからナ――仕組變へる時きやナ――
地獄の底でナ――いのちをはめだナ！
かせぐわたしははだか娘ナ――
わたしや炭坑のはだか娘ナ――
バリ〳〵ナ、トコバリ〳〵ナ――
バリ〳〵ナ、トコバリ〳〵ナ――

愚かなもの　エス・セキソオ

愚かなものよ、
なぜ書きたい事をかかさないのか
それ、どいつもこいつも
好きな事をしやべつてゐるぞ！
それ見よ！
人間はどんな事でも考へるぞ！

×

思ひあがつたものよ、
お前達のみの世界だと思ふのか
そこにもここにも
虐げられたままの民衆がゐるぞ！
のけ！
民衆をこの上泣かさうとしても
その手は喰はぬぞ！

×

哀れなものよ、
はてしなく海のつゞいてゐるのを知らないのか
陽は――
すべてのものを
すべての人を
あまねく照してゐるではないか！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

盲目なるものよ、
ここ五十年もたてば
すべての人類が
世界主義の名のもとに
一つの新たなる國を形作るであらう事を
夢忘れるな
萬一にもそれ迄生きながらへたとしたら

『三　銃　士』

――ダグラス――（アホヒ館）

小牧「孝丸は仲々フアンだ相だね。道理で近頃はあんまり怠けすぎると思つたよ。」
孝丸「戯談云つちやこまる。正俊なんてきたら僕以上なんだからね。時に、ダグラスは何時見ても氣持がいいね。ヤンキー物ぢや何と云つたつて、ダグラスとチヤツプリンだね――無論チヤツプリンの方が一枚上だがね。」
小牧「松之助と同じ意味でダグラスが好きだ。もし松之助がアメリカに生れてゐたら、それはダグラスになつただらう。」
正俊「中學生の云ひ相な事だ。問題は「三銃士」だ。君達はどう思ふ？。」
孝丸「講談でも讀んでゐる樣でノンビリして愉快だ。實際僕は每朝眞先きに新聞の講談を讀むんだ。其の方が亦眞個の樣な氣がする。「三銃士」の俳優如何とか撮影法とか何とかは僕は敢へて論じたくないが、凡ゆる點に於て、そう惡いもんぢやないと思ふ。ダルターニヤンは勿論のこと、クシユリユもいい出來だと思ふ。次いでに、コンスタンスも讃めて置かう。道場のとこなんぞは、豆本でよく讀んだ「寬永御前試合」つて氣がして面白かつた。兎に角、場面々々が痛快であれば、彼ダグラスの天分が盡せるんだ。こまじつか、人情物的にやらうとするととても見てゐられない。」
正俊「近頃神經衰弱に惱まされてゐる余（余等ではない）にとつては、かかる單純な淺薄なものほど、好ましい。そこにかかる種類のものの存在の價値があるのだ。だが予はあまりこれに就いて多く云ひたくない（詳細は拙稿××所載「〇〇〇〇」を看られよ）」
小牧「僕たちは日本にも一人位「デユーマ」が出てもいいと思ふ。僕はパリでたしか「三銃士」を二三卷觀たと思ふ。仲々の評判だつた樣だ。「デユーマ」をねらふ處はダグラスも利巧だね。」
孝丸「氣障で不快千萬なものの中で、邪氣のない「三銃士」を見せられた、ことは「カラマゾフ兄弟」を觀たと異つた意味で惡くないと思ふ。」
小牧「何だかんだ云つたつて、僕たちは活動を見る位が關の山ぢやないか。」
正俊、孝丸「全くそうだ。」とはおめい達の言ひそうなことだ。（赤繪代）

六

若し軍國主義が惡るといはれる場合があるとすれば、是れは前述の日本人の傳統を仔細に理解した上で、軍國主義より以上の猛烈なる獸性と專制と團結と武力とを、我々日本人の生命にぶつつけてくれるものでなくてはならぬ。軍國主義より以上徹底的に我々の靈肉に活動的訓練を與へて、大なる生命の旅路に出發せしむるものでなくてはならない。それは何んであるか？それは內容形形共に〇〇で表現するよりほか出來ないものだ。それほど眞劍なものだ。その〇〇に對する命がけの自覺、命がけの決心がない以上は、遺憾ながら此ところ「軍國主義至極結構」であられればならぬ。

種蒔く人を讀む

新生活即新藝術

(『種蒔く人』第二號を讀む)

津田先生

近頃、同人雜誌が、雨後の筍の樣な勢ひで、あちらからも、こちらからも、ムク／＼と、文壇の野に頭を出し始めた。其の種類は實際一々枚擧に遑あらずと云へさうな有樣である。

それは勿論、樣々な意味があり、樣々な特色があり、實に千紫萬紅の趣きが、我が文壇に於て點出されさうな氣勢であるか、斯うした氣運が今　我が文壇に醸成されるに至つた根本の動因に就て考へて見ると、それらは一括して皆、舊文壇、既成文壇乃至現文壇に對する新進の不信任とも云ふべきものにあるらしく思はれる。詰り、現文壇の所謂主流なるものに對する新進の不滿と反抗、それの當然の發現が、今日の同人雜誌發行の現象であると見て差支へなからうと思ふ。

それでは、何うして、今の文壇の所謂主流なるものが、新進をして斯かる不信任的行動を取るに至らしめたか？

それは、何よりも、既成文壇の所謂主流に在つて、現文壇の支配的位置に立つ人々の手から、周圍の樣々な事情や、前代未聞の樣々な刺戟や、内心の樣々な欲求や、目醒めや、雜多な衝動に驅り立てられて居る新人の、止み難い心の動搖惱みとに、適當な住み家を與へるべき世界か開拓されるであらうと云ふ新進の希望と頼みとが、刻々に裏切られ、漸くにして失はれるに至つたからではあるまいか？

これは甚だ抽象的な廻りくどい言ひ方であるが、もつと端的に、手つ取り早く云つて見れば斯うである――藝術活動が商業化され、職業化され、資本主義化されつつある文壇の現代に對する新進の反逆である。詰り、これは新進の藝術活動に對する新しい目醒めの運動である。商業本位の文壇、資本主義の文壇、そこからは決して新しき自我に目醒めた新人が眞實に翹望し、心から欲求する新しい世界は生れないと云ふことを、今や、第二の文壇を造らうとする新進は、はつきりと意識し、十分に自覺したのである。(尤も多數の中には、現文壇をそのままに肯定して、何でも文壇へ出さへすれば好いと云ふ考へで、三四年前あたりに出た同人雜誌の多くが好んでやり、そしてそれが可なりな成功を得た事實を見せられて居るテクニツやポリシイ(例へば、好い加減な仲間褒めと云ふ奴を)眞似て――斯う云ふ惡い意味の所へ「白樺」に出て貰つては失敬かも知れないが、それがたとへ、惡い意味のテクニックやポリシイだとは云へないにしても、とにかく、あれなどにはさう云はれても仕方がなささうな事實を、僕は見たのであつた――實際、今の文壇へ出るには、それがテクニックやポリシイで固まつて居る商業本位、資本主義のものである丈、可なり勝れたテクニックやポリシイが必要には相違ないのだから、只、漫然と、文壇へ出ようとする者で　その數に倣

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふ者が多くあると云ふ事は何としても、拒ふべからざる事實であるが)、今や、明かに一部の新進は自覺したのである。その場限りの輕薄にテクニックやポリシイに依つて文壇へ出ることの、如何に藝術の本意に悖り、隨つて如何に文壇その者の空氣を腐敗せしむる、馬鹿らしい態度であるかを、一部の新進は悟つたのである。所謂主流作家の作のテクニックとポリシイで捏ね上げられた、無内容さ、無生命さに慊焉たる心が一部の新進の胸中に翕然として湧き起つたのである。詰り、それと云ふのが、最初、藝術が、文壇へ現はれるに當つて、商業主義、資本主義と安價に握した當然の應酬であることを、一部の新進は明かに意識したのである。

そこで、この自覺した新進は、新文壇の建造、新藝術(藝術に新も舊もないなど云ふ藝術論者なんかは僕等には何うでも好い僕等に取つては新生活即新藝術である)の創作、と云ふよりも更に、新生活の充實の爲めに、現文壇の存在をそのままに是認して、文壇へ出ることを潔しとせず、從つてそれを輕視して、これと與みせず、新たに一方に、獨立獨歩の旗幟を樹てるに至つたのである。

今や、舊文壇は行き詰つて居る。僅かに行き詰らないのは名ばかりの、外面的經濟的に丈である。その内面は明かに行き詰つて居る。これが行き詰らないならば、それは所詮、緣無き衆生、何として收拾すべからざるものである。「富める者の天に昇るは駱駝が針の目を潜るよりも難し」と云ふ古い譬へにも當て嵌まる位なものである。

「舊きもの滅び、新しきもの生れたり」と云ふ叫びが、今、本當に日本人の生活のどん底から、叫ばれても好い時代が來たのである。眞に目醒めた人間の文藝改造を渴望する時が來たのである。金に誘惑されず、舊い生活の感情思想に誤魔化されない、眞の新人の出でゝ戰ふべき時が來たのである正しき生活の爲めの正しき戰ひか開かれる時が來たのである。生まやさしい思想と思想、感情と感情との戰ひを通り越して、眞實の肉に徹した戰ひが開かれたのである！——少し誇張した言ひ方ですが、それは正に血みどろの戰ひである。後へは退かれず前へは出られず、絕體絕命の窮地に立つた眞實命懸けの戰ひである。「自由か死か」、それが、是迄の樣な、單なる頭の中の概念でなしに眞實の體驗の聲となつて、今、吾人の前に現れたのである！

この新生活の新しき戰士、フォア、ランナーの貴き體驗！今や、それは佛蘭西のものとしてでもなく、亞米利加のものとしてでもなく、露西亞のものとしてでもなく、正に日本のものとして現れたのである。身を以て戰はんとするこの勇ましく眞摯なる同人よ！我等は最早、その行動を、文壇の單なるゴシップの種として見ては居られなくなつた。正に嚴肅なる審判がそれに加へられなければならない——所謂技巧もなくポリシイもなく、行動即藝術！それを單なるセオリーでなくした迄、高調した「種蒔く人」！

おゝ「私は詩を書く積りではなかつたがつい斯う云ふ感投詞が出てしまつた)、そこに早くも、第二の戰場に於て死屍を晒した四人の者！僕は君達の行動を何う批判していいだらうか——その他の負傷者、重傷、輕傷、手をもぎられ、足をちぎられ、頭をやられ、胴を突がれて片輪にされた五人の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

者、運よく彈丸を除けた六人の者、君達はそれでも復た起つて、第三の戰場に向ふ勇氣があるだらうか？

靜かに療治をして吳れ給へ。僕は祈る。君達の健康の回復を。と云つて、その藥料にさへ差支へる貧しい僕だが、僕は吳れ吳れもあの四人の戰死を惜しむ。

平林君、君は眞先きにやられた樣だ。さぞ無念であらう。僕も爲めにラヂカルのチヤンピオンの面目に接することが出來なくつて、何んなに遺憾だか知れない。今度、面目を新たにした君の復活を期待する。

加藤、金子、井上の諸君、君達のやられたのは、吾々に深い反省を與へた。創刊に続いて君達がやられたので、編輯者が大變悲觀し出したの尤もだ。編輯者ばかりではあない。讀者である僕達も大いに悲觀する行動即藝術、直觀の表現、それが何んとしても意ふ樣にならないので悲觀する。それを意ふ樣にやるには、死を覺悟しなければならないのだから。思ふに、この三人は直觀の表現を意ふ樣、やつ付けたに相違ない。それが證據には、アレゴリーとユーモアーで行つて居る外の連中は皆、生き殘つて居るではないか？

僕は、藝術の形式としては、若しそれが出來るならば、アレゴリーよりも、ユーモアーよりも、直觀の表現か一層好いと思つて居るが、そして直觀の表現が若し徹底的に出來れば、それはもう藝術とは云はず——本當の生活或は正しい行動とでも云はうより外はないであらうし、隨つて、そこには最早、藝術なるものゝ必要も職分も、吾々の生活にはなくなることゝ、思つて居るのであるが、詰り吾々が、直觀の表現をやらうとしても、それか直ちに、現實に行はれない所に、藝術なるものゝ、吾々の生活に於て醱酵し、存在する所以があり、又、それが吾々の生活に必要なる所以があるのではないかと思つて居る。

さうして見ると、殊に、こんな暗黑無明な時代では、僕等の思想、感情が、十分露骨に、天眞爛漫に、卒直に表現出來ないのは止むを得ない忌はしい馬鹿げた事ではあるが、それが餘りに明白な事實であるからこの事實の名に於て、止むを得ず、詩とか創作とか云ふ、所謂藝術的表現の形式を取るものだとすれば、藝術の本體論は姑く措いて、その實際論に於ては、矢張り、あの妙にひねくれた樣なユーモアーや、アレゴリーの形式を取つた藝術か、藝術としては一番好いものになるではないかと云ふ結論になりさうに考へられる。そして、藝術はアレゴリーやユーモアーの形式を取ることに依つて、決して藝術としての調子を低めるものではない樣に考へられるが何うだらう？ずるい考へ方だらうか？ずるい考へ方だといはれても仕方がない。實際、今の僕には、藝術の問題を、本體論と實際論と區別しなくては考へられないのだから。若し斯う考へることがいけなかつたら、どしどし反駁なり、教示なりを賜はりたい。

秋田、片岡、小川の三氏の創作は、どれも皆、何等かの意味で、アレゴリーの藝術と呼ばれ、眞劍なユーモアーの藝術と呼ばるべきものであると思ふ。そしてその意味に於て、三氏とも、すぐれた作を示して居るのは、たとへそれが小さなものであるにせよ、新興文藝の爲めに、新生活の爲めに近頃最も感謝すべきことである。最後の評論も皆キビ〳〵して居る。

それから、雜誌としての樣式であるが、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

從來の營利本位の商賣雜誌は、雜誌の立場とか、主義主張とかいふ雜誌本來の面目であり、生命であり、存在理由である所のものを本位とするよりも、當時の所謂「賣れつ兒」とか「有名な人」とかいふものを主として、執筆者を選定する傾向を持つ所から、それが、そこに載せられた記事の分量が多ければ多い程、益々誌面が不統一になり、散漫蕪雜に流れて、讀者の頭は爲めに餘計な混亂を來さなければならない樣になつた。現代人の神經過敏と神經衰弱とは、斯かる商賣雜誌の惡傾向に負ふ所が蓋し多大なものであらうと思ふ。それにも拘らず、營利本位の商賣雜誌は、賣れつ兒や有名な人の記事を、出來る丈多く輯錄することに依つて、誌面は益々擴大され、誌價は益々高騰するに至つた。玆に於てか雜誌の墮落は今やその頂點に達した。

事實、今日の無產階級の人間に、その貧しい財布から進んで斯ういふ營利雜誌を買はうとする興味の、勇氣の、時間の、金の所有者が幾人であらうか？無產者に取つてはさういふ雜誌の存在、　に無意識千萬なものであると、はなければならぬ。しかもその雜誌を製造する植字、印刷、製本の職工は無產階級者である。彼等は自分達に取つて一向無意味な雜誌を製造して居るのである。いや、營利の爲めに、金の爲めに、そしてブルジョアの享樂の爲めに、それを製造させられて居るのである。

事實、今日の商賣雜誌は、よく／＼餘計な時間と金を持つて居るブルジョアの讀むべきものだ。僕等無產者は何としても、高い代價を拂つて迄、それを買つて讀む氣にはなれない。そのブルジョア化された空疎な誤覺化し氣分の內容に至つては「これこそ俺達のものだ」と思へる樣なものは、十の記事の中、せいぜい一つか二つだ。或は一つもない。

斯ういふ馬鹿氣た商賣雜誌が、我が讀書界に跳梁跋扈して居る時に當つて、同じ旗幟の下に轡を並べて立つ戰士の衆と肉とを以て充實された雜誌「種蒔く人」が現れたのは、我が讀書界に取つて最も意義ある事であり、我等無產階級者に取つて此上もなく感謝すべき事である。事實、私はこの雜誌を隅から隅まで非常な興奮と緊張とをもつて讀んだのであつた！ブルジョア雜誌は餘りに多くあり過ぎる。これから新たに生れ出づべき雜誌の樣式は、是非共、この樣な旗色鮮明な態度で、飽迄も創造的な「プロレタリヤの世界のもの」といふ意識の下に爲されるのでありたいと思ふ。

映畫劇に就て

示野吉三郎

活動寫眞はブルジョアの宣傳色彩が濃厚である、それは多く物質に關したものである――と樣に平林氏が言つてゐる。之れとは全で反對に精神的――感情的に民衆化しなければならぬ。と說破してゐるのが（本誌二號）の賢三氏の論說であつたように思ふ。

私は、前者は何に右の評論をされたのかは知らないが、後者は前者の唯物的に映畫の價値を貶し去つたのに飽足らぬとの意である樣に見た、卽ち「假りにその題材が多く、ブルジョアの讚美や宣傳であるとしても、その映畫劇が民衆の心理にどんな風に反映するかといふことを考へないで映畫をけなすのは輕卒をまぬがれないと思ふ」と云ふのは、「民衆に反映する善とは、虐げられてゐる人のことで」あり「映畫にあらは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れる不幸者や弱者は、民衆の本然のすがたであるところの善良さ」で「虐げられてゐるものを、助けやうとする勇敢な青年に陶醉するのは、彼等が虐げられてる生活から脱出しやう脱出しやうとしてなし得ないあこがれ」であり「さうした勇敢な青年の行動に依つて滿足さしてもらひ、感情の發散を感ずるのである。」そして民衆の善良さは「ぴつたり握手する」からであると云ふにあつた樣だつたが、「權力階級の爲め、資本家階級の爲め、はては不可抗な運命の爲め死ぬほど求めてもあたへられないものか、映畫ではあたへられる。」と云ふことがどんなものやら、

私は、それが、小屋を出ると直ぐ、ああ面白かつた來週もまた來ませう……ね。と云つて消えて無くなる「尊むべき彼等の單純は、そこで憤怒し、痛快を感じ、愛し、憎み、絶叫し、號泣し、快笑する」ものでないと思ひ信じることの出來ぬのであります。さう思ふことが間違つてゐたら、「かうして、本然の自己に立返つた民衆に、眞實の生活はお前達のうちにありと敎へるのが映畫であり」、またさうであらればならぬと云ふことになるのかも知れないが、

私は、現在の映畫の持つてゐる所謂藝術的境地が反逆心を抑へたあのままのものであつては所詮、平林氏の言に似た見方で貶しさられればならぬ代者であると思ふ。何故ならば、私共は今、精神的に效能を釋てたるべき場合ではない。「彼等の罪惡は、如何に戰慄すべき場面となつてあらはれ、彼等の生活が如何に、虛僞であるかを覺らしめる」には「民衆が、感情の發散以上に、驚愕して自分の眞のすがたを凝視する時、そこではじめて民衆は救はれはじめるのである。」の映畫劇を實際に見せなければならない。「若し映畫劇が、綜合藝術で」あらうが何んであらうが資本家共の經營になるものに、貧乏人の我々が得のいく樣な寫眞を見せて吳れる氣遣はない、之れは實に明々白である。適に映畫を觀ても、賢三氏の云ふ勇敢な青年の身の結末に、芽出度し芽出度しに腹立しくも馬鹿々々しくなつてしまうではないか。

されば、種蒔き社の常設舘でも出來ざる限り、物質的に呪ふべく貶すべきであつて私は矢張り「活動寫眞に至つては近代の産物だけに、ブルジョアの宣傳の道具としての色彩が極めて濃厚である。」と云ひたいのであります、そして、そういふことをプロパカンダすることは、精神的（學術的）に效能を釋くより「ブルジョアの心臟をゑぐる△△となるに違ひない」——效能の多いものであると思ふのであります。

軍國主義至極結構

藤井眞澄

一

いい惡るいといふ事は比較的の問題で、軍國主義も或物に較べては、多少いゝ場合があらうと思ふ。

日本で軍國主義を攻擊するのは、今までのところ大抵、謂はゆる民本主義や人道主義や文化國家や國際聯盟の立場に居る人々らしい。今、將來の□の意味に於ける人類進化――それの爲めの一大回轉を速進するという目的から、冷靜に公平に觀際して、軍國主義とそれを非なりとする夫等の諸主義との、いづれが多大の利益があるかといふ事は、なか／＼の問題である。

民本主義も人道主義も文化國家も國際聯盟も、徹底的の觀際をすれば、皆んな「上

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

貴族官僚と戰ひ、下貧民勞働者を抑へる爲めに資本主義と共に起つたもので、結極ブルジョア擁護の最も巧妙なる役目を務めるものにほかならないから、それよりも却つて軍國主義の方が、寧ろいゝわけになる。ロシャ革命もドトッ革命も、決して夫等の主義の宣傳から出來たものでなく、却つて軍國主義の徹底から起つたものとも見られるではないか。夫等の主義の流行する處ほど、貧民勞働者がより多數よりひどく苦んで居り、より永く頭が壓げられないといふのは、今日の事實である。

この間の機微を覺らずして、徒らに非軍國主義を主張する馬鹿者程、眞の意味の人類進化――その爲めの一大回轉に邪魔になる者はなからう。若し眞に彼等の諸主義が人類の幸福になると思つてゐるのだとすれば、二を知つて一を知らない俗學者に過ぎない。又若し、それが最も美妙なるブルジョア擁護の最高機關であるといふ事を自覺してやつてゐるとすれば、人類進化の爲めに最も憎むべき呪ふべきの罪人である。軍國主義の非を鳴らすよりも、ずつと前に、僕等は極力彼等を打伏しなくてはならない

二

人生るゝや死するまで、寒暑と戰ひ病菌と爭ひ、食物と異性を競ふ。一瞬として戰ひのやすむ時はない。戰ひのやむ時、そこに死があるのみだ。生きる事は戰ふ事にほかならない。戰ひを本體とする個人が集つた團隊も、また戰ひを本體とするのは、自然の理である。個人が戰ふよりも團隊を結んで戰ふ方が、より有功であるとするところに、團隊は自ら生れて來たのだ。この人間の團隊が、永い間、この地球の表面を、寒暑と戰ひ病氣と爭ひ食物と異性と競ふて歩いたのが、人間の歴史である。そしてこの難行苦行の經驗をより多く積み、それをより多く意識した團隊が、その個人が、一番本質的に強い生命力を有つてゐる。よく戰つたものが、よく生きるのだ。この戰ひの思想と力を、若し軍國主義が、他の多くの主義よりよく強く教へるとすれば、其場合軍國主義は夫れよりいゝわけのものである。

三

この日本といふ孤島に、最初集つた人種は、色々の異つた種族であつたらしい。その異つた人種が、色々に戰つて後、茲に團隊を結んだのであるから、我々の祖先はなか〳〵の優良人種であつたらしい。然しその後今日まで二千五百八十一年の永い間、仲間内の小ぜりあひはあつたけれども、團隊全部この土地を離れて、他の土地に戰ひの旅をした事は、たゞの一度もなかつた。謂はゆる民族の移動といふ經驗を一度も積まなかつたのである。ぢつと一つの土地にくさりつきさびついてゐて、色々の土地に様々な氣候風雨と戰ひ、色々な種族と様々に戰ふ――といふ經驗のない種族が、我々なのである。「可愛い子には旅をさせ」といふが、一度も旅をした事のない箱入り育ちが我々である。實は、あの元冠の時、一度おもしろい旅をする筈であつたのだが、不幸にして出來なかつた。日清、日露、日獨との間隣國へ行つたのに過ぎない。それでも行かないよりはどの位よかつた事か。が他の種族が永い間異つた土地を移動した戰ひの經驗には、とても較べものにはならない。

要するに、さういふ不運な因果から、今

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

や我々の種族は靈肉共に頽る劣等な者になつてゐる事が、觀察出來る。

若し軍國主義の徹底によつて、この戰ひ、の旅をしないといふ根本缺點を、ほんの少しでも補ふ事が出來れば、幸福であると云へよう。少くとも、それを邪魔したりそれを胡魔化したりする諸主義よりは、いゝわけにならう。

四

旅をしなかつたといふ因果から、活動的生命の傳統が頗る不足して來て、我々には靜的生命のみが沈澱して來てゐる。他力念佛、消極無抵抗、夢幻空想、感傷表徴、摸倣飜譯、逃避隱遁、淡白宿命、あきらめ人道、盲目服從、妥協賞台——さういつた薄暗い幽靈に取りつかれて身動も出來ない變態心理者が、我々である。現實科學、反抗積極、分析解剖、自力獨立、破壞創造、生命建設——さういつたパツと明るい世界は大きらひと來てござる。それが短かい間なら兎に角、あまり長く續いたので、特に最初の徳川封建、の去勢術によつて、日本人は靈肉共に恐らく致命的に腐敗墮落してゐそやうである。

この場合若し軍國主義が、其の肉體的教練と其共妥協性と其野性的な活動精神を以て、いさゝかでも、日本人の原始復古——或は再生の助けになるとしたら、これを助けない、それから逃げようとする他の主義よりも、いゝわけになる。少くとも、日本的變態心理である他力空想の平和本位、センチメンタルな人道主義から泣くやうに唱へられる非軍國主義よりは、ずつと〳〵いゝわけである。それ！そこいらにウヨ〳〵してゐる創造的自覺のない俗學者共の、おのお座りの飜譯的非軍國主義より、ずつと〳〵いゝわけである。

五

宗教や藝術や人道の假面をかぶつた、ブルジョアの學者共は、心靈的勞資協調事業を美妙にやらうとして、更に「慈悲忍從」、「藝術至上」、「人道博愛」を持出して來る。そして落行くところは、何時でも釋迦であり、基督であり、藝術美である。

釋迦は佛教の預言として末法今日の修行をば、折伏の二字にまめてゐる。が、坊主共はこの二字が大きらひと來てござる。

基督の本體は猶太の共産組合の爲めに起つた反抗革命のかたまりであるが、牧師共は、ローマ帝政によつて去勢された骨ヌキ聖書を盲信して、その本體をつかまうとするの誠意を有たない。

美の眞相は生命流動であり、戰ひであるが、幇間藝術家共は、それを感じ知る事さへ恐れる、感知する氣力さへない。

そして釋迦は空想約な「慈悲」であり、基督は夢のやうな「愛」であり、美は概念的な「調和」であると主張して、おめてたく資本家によつて投げられるパンを貰つて行く。

斯かる國で、斯かる土地で、最も露骨な生々しい戰ひを表現してゐる軍國主義は、チヨット珍らしい對照である。それは彼等幽靈共を征服するものとして、利用するに足るものではあるまいか。たとへ共利用が表的に出來ないにして、本質的には出來得る事を知らなくてはならない。いづれにしてと、彼等宗教家藝術家 の魂の切賣りより肉の切賣りをやる軍國主の方が、大局に於てずつといゝわけである。

(百八頁にツヾク)

社會主義研究 一月號

◇「未來は民衆のもの」……（卷頭言）

◎社會主義と商業主義……（山川均）
（再び賀川豐彦氏の教を乞ふ）

◎マルクスの階級及び階級闘争論…
……（西雅雄）

◇無産階級の哲學（六）……（山川均）

◎資本主義の經濟制度（一）…（山川均）

◇勞農國の裁判法――（研究資料）

◎現代の日本婦人……（山川菊榮）

發行所 平民大學 振替東京三四一九一

社會評論雜誌 前衛 創刊號

定價はいづれも三十錢 一年三圓三十錢

◇土臺に働く人……ジャック・ロンドン

◎當面の問題（時評）……山川均

◇二人の犧牲者…（リープクネヒトとルクセンブルグ）…山川菊榮

◎農村運動と社會主義……稻村隆一

◎理想主義と潔癖……堺利彦

◇二名家の二名論……西、田所

◎インタナショナル・ノート……
……社會主義研究編輯部

◎露國は共産黨の獨裁か…山川均

◇挿繪＝勞働者のフートボール―訊問―過剰の人間―資本主義の大病人―相對性原理の研究

發行所 前衛社 大森新井宿五九二 振替東京正四七七

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

▶絶對の健康と永久の若々しさ◀

ベンネット式

若返り運動法

一日僅に十五分間の運動法に依り、七十二歳の老衰より若返れる體驗に基づき、老衰豫防法、長壽法、人間の壽命、斷食療法、清淨法、容貌を若くする法（附化粧品の事）日常生活の注意事項等を擧示し、ベ式運動の方法及び順序を一々圖解に依りて說明すること丁寧周密、何人も一讀して容易に實行し得べし、希くは本篇に就て、盡きざる生命の泉を汲み、以て絕對の健康と永久の若々しさを得られんことを。〔實驗者　星利彥述〕

▶人生の福音生命の源泉◀

發行所　東京市神田區鎌倉町　振替東京一一八四四　政教社

日本及日本人

新年號

▼定價金一圓八十錢▲

▼郵稅（金四錢五厘）▲

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◇正しき思想藝術の爲に我等に破壞意志は必然である◇

壞人

年頭合葬號

壞人默示錄……………………巍白生
武者小路實篤……………………橋浦泰雄
吉田絃二郎……………………楠本寛
有島武郎……………………村上吉藏
豐島與志雄……………………間島惣兵衛
長與善郞……………………林政
室賀犀星……………………角田健太郎
志賀直哉……………………藤岡良三
末定……………………涌島義博
穴居人……………………(解放欄)
閻魔廳……………………壞人同人

◎(定價一部貳拾錢)◎

發行所　牛込區下戸塚二七　壞人社

○○○主義機關雜誌

勞働者

東京市外巣鴨宮下一七八六

◇定價一部五錢◇

關西勞働者

大阪南區空堀町十一

◇定價一部拾錢◇

農民運動

土地

正直であるが爲めに、勤勉であるが爲めにそして正しい生活を送らうと心懸けるが爲めに、常に虐げられ、統られてゐる農民達の道連れとなり、力となり、そして其の人達の言葉の取次所となりたいのです。

四六二倍、八頁で定價拾錢位のつもりです。有志の方々の御参加御援助を願ひます。群細は種蒔き社宛に御照會下さい。

（鳳逸平）

◇◇◇　◇◇◇

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

白樺

◇新年特別號要目◇　定價八拾五錢　送料二錢

停車場にて書かれたる遺書　園池公致

富士山の歌　木下利玄

製作餘談　岸田劉生

美に於て個性に就て、其他　椿貞雄

ミケランヂロの書簡　高田博厚

詩三篇　千家元麿

詩か散文か　長與善郎

出鱈目　武者小路實篤

挿畫――ポールセザンスの作品（着色版共）拾枚

發行所　東京市外下澁谷三七二　白樺社

新年號

我等

◇政治・經濟・社會・教育・文藝の批判◇

アテネの歳の始め……如是閑
生活の機械化と『天才崇拜』の迷信……大山郁夫
生活と乘離した『歴史』及『歴史的』事實……長谷川萬次郎
唯物史觀問答……河上肇
日本農民史雜考……佐野學
若きフランスとジャン●ド●サン プリ……小牧近江
大津から……水島爾保布

最新學說の紹介……學界廿五大家執事

ギルド社會主義の起源と本質……小泉鐵
一九二一年より二二年へ（傾向及批判）……長谷川如是閑
名刺（創作）……佐々木味津三
私の手記（創作）……小川未明
映像（創作）……内田榮造
支那を見て入た男の言葉（對話）……長谷川如是閑

東京神田鎌倉町三
電話神田三二〇八

我等社

振替東京三六三三七六
定價八十錢送料貳錢

批評から

拙者本十日入營したものです、十二月號拜見して大變好きになりうした。(無名氏)

創刊號が出ると直ぐ發賣禁止になつたといふことが恐ろしく腹が立つ、もし之ほどの文字が惡いといふなら、一層日本にある社會主義の本を皆燒いてしまつたらどうだらう。(藤森)

眞理のために純な生活をするために奮起した人々、即ち文壇の新人や社會革命家を以て任ずる人達の寄つて創めた新雜誌である。(大阪朝日)

政府の意見では全體が氣にくはないのだといふ、かうなるともう理論ではない、尤も始めから信頼をあまり其の檢察眼に持てない私は、今更それに驚くほどの者ではないのだが、唯さういふ發賣禁止が大正十年十月にあつた記錄だけは記憶してゐても好いことだ。(讀賣)

ブルドックの樣な雜誌。(文藝旬報)

生活のため○○の眞理を擁護して立つた雜誌で無產階級の味方として熱烈に叫んでゐる。(神戸又新)

思ひ切つて新らしく銳利な思想と論鋒を閃かしてゐる。(九州日報)

過去の有象無象な執筆家に、こけおどした心根はさもしい。(壞人)

「妥協」といふ言葉に色々な美しい衣を着せることを職業とするものが現今の日本の文學者ではないか、創作家ではないか。「種蒔く人」がその樣な人達でないことを信じたい、そして其處にこの雜誌の生命がある(野依雜誌)

プロレタリアの文藝雜誌だ。(關西勞働社)

編輯後記

僕たちはたゞドイツではカール・リープクネヒトとロザ・ルクセンブルグが一月十六日、それから、□□□□□□□□□。

新年號には約束通り出來るだけ多く新人の作を發表した。新年號と限らず僕たちは希望として、强い若い人達の作をなるたけ多く發表したいのである。

詩人、地方欄、婦人欄に力と血のある投稿を俟つ。

非軍國主義號に共鳴してくれた初年兵さんの便りがあつたけれども、聯隊と姓名が不明であつた。

定價 一部四十錢□半年前金二圓四拾錢□一年前金四圓八拾錢御注文はすべて前金のこと□代金の領收は雜誌發送を以てする□送料內國一錢外國四錢

廣告 廣告及廣告料金については直接本社宛問合せ乞ふ

宛先 寄贈、通信、購讀申込及び送金其他本誌に關する一切の御用向書籍雜誌等の寄贈は凡て『種蒔き社』宛

締切 毎月五日

大正十年十二月三十日印刷納本
大正十一年一月一日發行

東京市赤坂區青山北町一丁目八番地
發行人編輯人 印刷人 近江谷駉

東京市神田區松下町七番地
印刷所 大潮社

東京市赤坂區青山北町一丁目八番地
發行所 種蒔き社 振替口座東京五九三八七

大賣捌 東京堂 上田屋 北隆館 至誠堂 東海堂

種蒔く人 第二年第二巻第四號 (大正十年十二月一日第三種郵便物認可) 大正十年十二月三十日印刷納本 大正十一年一月一日發行

本號特價五十錢

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

種蒔く人

第二年第二卷第四號

（大正十年十二月一日第三種郵便物認可）

大正十年十二月三十日印刷納本
大正十一年一月一日發行

本號特價五十錢

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA